

り論せば、美は善の上にありと雖も、社會内に在りては、社會を維持するに必要條件たる善は、美の上に立ちて命令權を有するなり。——即ち一種の美術、或は裸體畫の或物を禁するが如し。而して佛敎的趣味の厭世的の有害なることは、有害なる美術と見て排斥して可なり。此くて宗教は、眞の攻撃に堪えずして美術として觀んことを望めり。雖も、美は尙ほ善の批評を受けざるを得ざるなり。佛敎の如き、此く學理の攻撃に由りて、眞界を出で、美として觀られんことを願ふとも、尙ほ善(社會國家)より其攻撃を免る能はずして、佛敎的嗜好は日本國性に有害と認めらる。嗚呼佛敎は眞善美の點に於て其攻撃に堪へ能はざるなり。

近頃宗教家等、學理の攻撃に對するが爲めに大同團結ならば尙ほ可なりと雖も、異類團結に至りては抱腹の至りとなすを作る、甚だ奇態の現象なり。又學者の頭腦腐敗して折衷主義を取り、往往學者たる者にして宗教家の歡心を買はんとして、宗教も惡しからずと云ふ者あり。學者として迷信を辯護し保存せんとするに至りては、吾人亦彼輩と論ずるを好まず。今日日本の思想は實に沈滯腐敗瓦解せり。嘆すべきかな。

或る社會學者の如く、宗教は社會の一大動力なり、社會改良の一要素なりなど云ふ時は、甚だ温厚の學者らしく見ゆべしと雖も、これ死せる歴史を知りて現在將來を知らざる者の言なり、ベンジャミン・キッドの社會進化論の如きこれなり。これ誤謬なり。宗教は古昔學術的知識の普及せざりし間は、或は人間の迷信に訴へて一種の大動力となりしとは云へども、今や科學の旭日は登りて迷信を掃し、迷信に訴ふる所の勢力は日に微弱に赴けり。豈社會將來の大動力たるを宗教に望むべけんや。宗教に向て過去の如きを望むものは、現在を知らざる愚昧なる歴史家なるのみ。

六合雜誌の妄なることは、吾人數々之を云へり、尙ほ之を云はざる可からざるなり。其百八十四號の中島徳藏君の經驗論とカントとの關係論中に曰く「彼等(實驗論者)は眞も美も善も眞聖も一に經驗の與ふる範圍に於て其實なることを信せんと欲す、是に於て由來東洋文化の中心に潜在せる根本的信念も亦其根底より震撼せられんとする傾向なき能はず」と。讀者之を熟讀せよ、果して何の意味をか此内に發見す。實に「ノンセンス」と云ふべきのみ。眞善美は各範圍を異

にす。道德と道德學とは別物なり、知と情とは同一種類に非ず、實驗論は東洋古來の道德及び善美を破るゝとの根據何處にかある。無根據の大言を並べ以て沈着なるべき學理を論せんとす、吾人は君の爲めに之れを取らざるなり。中島君未だ實驗論の精神も知らず、又其學史も功績も理想にも明ならざるが如し、之を學びて然る後に發言せよ、然らざれば世人君を大言壯語の人となさん。

十 結 論

吾人は以上に於て畧ぼ實驗論の精神を明にし、諸論者の誤解を正し、形而上學の不成立を言ひ、形而上學者の發したる種々の質疑に對へ、終に實驗哲學の社會、道德美術等に對する意見を述べ、大に形而上學者の疑惑を解きたり。然りと雖も此論文たるや單に答辯的のものに止まり、實驗哲學の組織に非ず、世界觀にも非ず、人生觀にも非ず、首尾完備せるものとして見る可からざるなり。吾人尙ほ言はゞ言ふべき事管に是に止まらずと雖も、餘りに冗長となるを恐れて茲に終りを結ぶべし。殊に「テレオロジ」的説明法は事物説明の終極的のものに非ず、

殆ど物の説明と謂ふべからずして、器械的説明こそは深底窮極のものなるを論せん、と欲すと雖も、今は畧し、他日機あらば或は論ずることあるべきなり。此他高山君の東西思想の比較一斑論の全然的_ト外れの論にして、余の言はざりし所を余の言として引用し、或は種々の罵詈を余に向けられたる所少なからずと雖も、是等は吾人答ふるの必要なかるべしと信ず。只高山君に望むは、君の吾人に爲したる約束を守りて、正々堂々歴史的現在の實驗論を精密に論破し、又實驗論が既に破り去りたる所に對して形而上學の成立を明瞭なる言語を以て、論理的に吾人に答へ、吾人に教へんことなり。其他の形而上學派の諸論者、若し尙ほ吾人に答へ教ふる所あらば吾人は喜びて耳を傾くるものなり。

眞 善 美 の 希 望

雨風今宵荒らくとも
明日は静かに日は照らむ。
明日も曇らばあさててこそ
必ず晴れんうららかに。

霜雪いかに強くとも
なほ來ん年に春はあり。
こども今年も散りぬれど、
花は開かん春毎に。

悪と苦痛は永遠に
絶えざる人の世なれども、
たゞ／＼仰き望むなり、
行手に光る眞善美。(明治三十年作)

第三編 倫 理 論

古來聖哲は皆功利主義なり

「危を見て命を授く」「身を殺して以て仁を成す」等の語は、功利論如何に之を説明するや、否功利論果して功利主義を以て説明するを得るやとは、功利主義に向けらるゝ所攻撃の套語にして、決して今日に始まりしことに非ず、又恐るべき攻撃にも非ざるなり。單に陳腐にして恐るゝに足らざるのみに非ずして却て反對論者が功利主義の精神及び其功利主義なる言語の使用の範圍等を知らざるに基づくものにして、實に功利主義を攻撃するものは、自己の無學と其徳義理想の狭少下劣なるを示めずものに外ならざるなり。

古來功利主義の誤解せられ、又其名稱の濫用せられたるや甚大なり。既に誤解せられ、又濫用せられたりとせば、其主義の眞精神及び眞價値の知られざるものも亦其大なるや言はずして明なり。吾人は今こゝに功利主義に關して論せ

んとすと雖も、一々精密に此主義を組織し、一々精密に諸批評に對へ、又吾人の組織的積極的の意見を述べんとするに非ずして、只、古來の大聖哲人は、皆功利主義の人たるを論せんとするのみ。然りと雖も、古來の聖哲盡く此主義を名乗たりと云ふに非ず。或は明瞭に名乗りたる者もあり、或は間接に之れを云へるものもあり、又は功利主義を攻撃せし者もあり。而して其功利主義を攻撃したるものは、實は誤解されたる功利主義の攻撃にして、其誤解を正すに於ては、却て功利主義に一層の光を與ふるものたるなり。又は功利主義を言語名稱に由りて攻撃すと雖も他の方面に於て却て功利を主義とする所を説き、或は之れが實行を奨励せる者もあり。

イングラントの功利主義の唱道者ベンサム、功利主義を定解して「最大数の最大幸福」を與ふるものを善とする主義なりと云へり。決して功利主義は利己我欲を行ふ主義なりとは云はざるなり。最大數とは社會或は國家分子の最大多數にして、成らん限り多くの人を意味し、其成らん限り、能ふ丈けの人が最大にして成らん限り、得らるゝ限りの幸福を得しめんとするものにして、素より利他の

精神あるや言を待たざるなり。吾人其定解の高尙にして正當なるを認むるものなり。然るに世人之を誤解して、功利主義を以て、自己一身の利害を計量し、利を先きにして義を後にする利己我欲主義なりと思へるあり。これ誤解のみ。利己主義と功利主義とは言語の異なるは言はずして明なるのみに非ずして、又其精神を異にせり。然るに世人、否多くの倫理學者すら之を混同す。利己主義とは自己の幸福を主とすと説く所のものなり、功利主義とは利他を含み、最大數の人民をして最大幸福を得しめんとするものなり。意義此く明瞭に相違せり、然るに之を混同す、亦甚しき誤解と云はざる可からず。(こゝに一言し置かざる可からざるは利己主義と云へる言語なり。吾人がこゝに云へる所の利己主義とは、實行上の利己主義を意味するものにして、學理上の利己主義には非ざるなり。實行上の利己主義とは、自己の利欲を第一にこれ計り、他人の不利損害をも顧みざる我欲主義なりと雖も、學理上即ち説明としての利己主義は、一切の行爲は利己心より來るものなり、善行美行も利他的行爲も皆利己心より發達進化せしものなりと説明するものにして、決して私利我欲を主とすべしと云ふものには非

ざるなり。余のこゝに云ふ所の利己主義とは専ら實行上の私利我欲主義なりと知るべし。然りと雖も彼の私利主義を以てしては、身を殺して以て仁を成すと云ふが如き行爲を説明すること能はざるや無論たるなり。故に余は云ふ、功利主義を以て私利主義と混同すること勿れと。重ねて云ふ、功利主義を以て私利主義と混同すること勿れと。

功利主義は此く誤解せられたり。之に加ふるに吾人は又其名稱の亂用せらるゝを見る。如何なるものを其亂用とかなす。曰く、世に私利主義の人衆し。我利これ計り以て利己を行ふ。此くの如き者も心中我利の高尙なるものに非ざるを自覺し、功利主義の語を聞きかじり、以て自己の我欲主義を辯護するものなりと信じ、我欲主義に哲學を得たりと心得、其誤解を以て常に得々功利の語を亂用し、爲めに世人をして功利主義とは、我欲主義の辯護哲學なりと思はしむるものあり。

此誤解と此亂用とは相結合して、功利主義中には嫌惡すべきものあるが如き感^を世人に與へ、誤解に誤解を重ね、功利主義と云はゞ、是非を問はずして之に反

對を試みんとす。世俗の誤解は止むを得ずと雖も、學者たるものは世俗に雷同すべきに非ずして、世俗を教導すべきなり。然るに近世は世俗に阿る雷同學者甚はだ多し。

功利論は其行爲及び心事の果して如何なる結果を生ずるものなるやを尋ねて然る後其行爲心事の善惡を云ふものにして、社會國家の福利を増進する所のもの及び善惡を拒く所のものこれ善なり、之に反するものこれ惡なりとなす。故に善惡には之れが判定に一定の標準を立て得るなり、之を以て功利主義は學術知識の進歩と共に益々完全に趣き愈々其正確を致すものにして、決して彼の直覺判知論、良心神聖論、無上命令論の如く、善惡の判断に一定の標準なく、規則なく、我儘勝手なる如きものに非ざるなり。注意す——直覺論及び無上命令論には、倫理上善惡の標準を立てざるものなることを。

實に功利主義の表面に立ちて反對なる主義を直覺派及び無上命令主義となす。カントは無上命令主義の代表者なり。余は此主義をドンキホーテ主義と命名せり。其主義を説く所に由れば、道德は其結果如何を顧みて爲すものたる

哲

可からず假令其行爲の爲めに天は墜つるとも地は陥るとも世は亂れ人は死すとも只自己の心に善と認めたることを行へば可なり只法則を法則として行へ利害得失(一身にも他人にも)を思ふこと勿れ結果如何を憂ふること勿れ法則の爲めに法則を行へ人間の爲めにも非ず社會公衆の善の爲めにも非ず善なるが故に法なるに非ずして法なるが故に法なるなり法の爲めに法を行へとす。これ無上命令主義の所説なり。知るべし善の爲めに法を行ふに非ずして法の爲めに法を行へと云ふときは善惡法は何に由りて法たるやの理由も標準もなく其法とするは自己の勝手氣まゝの定めにして自ら法と認めれば其結果は社會たれ國家たれ善たれ惡たれこれ義務とせざる可からざることにして實に無茶滅法の實行主義なり又學説なり。而して余が之れをドンキホーテ主義と命名したるはイスパニヤの小説家セルヴンテスの著なる「ドンキホーテ」と云へる小説の主人公に其の名を取りしものなり。其書に據ればドンキホーテはイスパニヤのサラマンカの人なり古代の義勇騎士の書を愛讀して其風を慕ひ(發狂して)其實行を思ひ立ち武者修行に出立す。素より義俠狂にして愚人なり。

瘠馬に鞍を置き破れ具足をつくりさび槍を携へて一愚僕を伴ひて出立す。其主義たるや只良心の命とする所を行はんとするものにして全然カントの學説の如し。途に風車の廻轉せるを見て以て惡魔なりとして之を襲ひ槍を折られ馬より落されたることありされども良心の命を行ひたるものと自ら認む。或は僧侶の行列を襲ひて以て人を救へりと自信せることあり。或は人形芝居の假事なるをも實事と思ひ惡役の人形を打こはし頭も手も足も滅裂せしめ(義務の命と信じて)て償金を取られたることもあり。或は理髮師の金盥を以て傳來有名なる兜なりと思ひて之を被りて揚々と都市をねり歩きしこともあり。或は酒屋に宿して酒囊を斬りて惡魔を殺したりと信せしこともあり。其他認め善とし良心の命と信せしことを爲したること擧て數ふ可からず。されども何時も人に迷惑を及ぼし人を害し人を苦しめ自己は必ず失策せり。これ宛然カントが言ひし如く結果如何を思ふなく良心の命にのみ従へとの説の實行と同一なり。故にもカントの説を是なりとせばドンキホーテはカント派の世上第一等の大聖人と謂はざる可らず又完全無垢の人たるべし。而してカント

トはドンキホーテより後代の人にして其學説はキホーテ的なり、ドンキホーテの註解はカント最もよく之を爲せりと云ふべし。故に余は此意味に於てカントを以てドンキホーテ主義と稱す。最も命名の當を得たるものなりと信ず。無上命令と云ひ、利害を顧みる勿れと云ふ。一見高尚なるが如しと雖も、其利害は若し一身の事のみならば或は無上命令主義の言の如くなるも可ならんと雖も、社會全體に及ぼす利害結果をも顧る可からずと云ふに至りては大に不可にして、社會國家を思はざる所の學説は實に危險極まるものと云はざる可からざるなり。功利主義は一身の利害を以て倫理の標準となさんと云はず、ベンザムの言の如く、最大数の最大幸福を興ふるものを善とし、行爲の法則となさんと云ふ、豈偉大高尚なる精神にあらずや。而して吾人は古來の聖哲の勉めたる所は實は全く此主義に外ならざるを見るなり。余は今此に古來の諸聖哲と題したるが、古來の諸聖哲を盡くこゝに引出して例證となさん、の意には非ずして、今回は主に東洋古代の聖哲三四を以て代表せしめ、以て功利主義に對する世人の誤解を正し、其眞精神の偉大高尚なることを知らしめ、諸聖哲の聖哲として尊

敬せらるゝの理由は、全く功利主義の實行にあることを示めし、以て此主義の眞價を明にせんと欲す。

一 支那太古の聖王の功利主義

伏羲——の仰て象を天に觀、俯して法を地に觀、鳥獸の文と地の宜とを觀て、近く之を身に取り、遠く之を物に取り、是に於て始めて八卦を作りて以て神明の徳に通じ、以て萬物の情を類し、以て易を作りたる其目的は何ぞや。他なし、天地の生々變化するの法則を得て、以て人民に利し、性を完成し、存在を續けしめんとするにあり、——即ち功利を目的となし、以て人民を利せんとするにあり。其功大なり、之れを以て世人伏羲を以て大聖となす。

神農——の百草を嘗めて醫藥を作り、或は農業を教へ、人民に火食を教ふ。此くて人其生を完ふし、疾病を除くを得て、其功利甚だ大なり、之を以て後世神農を聖人となす。

黃帝——心を盡くし、天下を治めんとして、其方法を講ず。其目的たるや他な

し、只人民の安樂幸福の爲めにして、如何にせば最大数の人民は最大なる幸福を得るやを思ひしなり。これ功利主義の務むる所。黄帝功利主義なり、之を以て後世之を徳として聖人となす。

堯舜——人民の平治康福を欲す。之を以て四時を司るの官を置き、人を東西南北に遣はしたり。之と同時に或は文教を布き、禮樂を尙びたり。皆これ治國の目的にして、人民をして幸福ならしめんとしたるものなり。これ功利主義には非ざるか。然り。之を以て後世聖人を云ふ者は必ず常に堯舜を云ふ。

禹——は最も功利主義の人なり。之を以て聖人と稱せらる。舜位を禹に譲りしとき、禹を賛して曰く、允を成し功を成す、惟れ汝の賢、克く邦に勤めて家に儉なり。自ら滿假せず、汝唯矜らざれば、天下汝と功を争ふ者なしと。禹の最も意を注ぎたる所のものは、勤勉と節儉とにあり。其精神を尋ぬるに、國本は衣食にして、勤勉と節儉とは能く衣食を充實せしめ、衣食の充實は自然に人をして亂なからしむるものなるを以てなり。堯が人を四方に遣はして氣候天象を司らしめたるは、農業の爲めなり、舜又遠きを安んじ、近きをよくし、徳を厚うするは、食な

るかなとし、后稷をして時の百穀を播かしめたり。禹に至りては此思想殊に著しく、心に常に之を念じ、身に又之を事とせり、故に曰く、政は民を養ふにあり。水火金木土穀、惟れ修まり、徳を正し、用を利し、生を厚ふせば、これ和ぐと。其主義此くの如く、其績亦大なり。孔子稱賛して曰く、禹は吾れ間然するなし、飲食を菲うして、孝を鬼神に致し、衣服を惡うして、美を黻冕に致し、宮室を卑うして、力を溝洫に盡す、禹は吾れ間然するなしと。禹、洪範九疇を作る。其主意とする所は、徳義勤勉、政治、君臣の關係、吉凶の卜筮及天候の如何ん等を云へるものにして、其全體の精神は功利主義たるなり。其主義此くの如く、それ功利なり、而して人民の幸福を増進す。之れを以て後世聖人となす。世の以て聖人となす所の者は、皆な功利主義を實行する者に非ざるはなし。天下に功利大なるに従ひて、其人益々大聖人なり、小にして小聖人たり。功利なき者は無益の人たり、功利を害する者は悪人なり。

二 管仲の功利主義

功利を云は、古來の儒者等必らず管子及び晏子を謂ひ、管晏功利の學として之を卑しむ。何たる無見識ぞ。吾人は世俗の儒等と見を異にし、管子の功利説及び其實行の偉大なる功績は決して輕々看過すること能はざるなり。實に管子の當時は周の王室衰微し、諸侯分裂して互に干戈を交へ攻伐を事とせり。之を春秋戰國の世と云ふ。管仲齊の桓公を相けて諸侯を糾合し、天下を一匡してよく王室を貴ばしめたる大人物なり。孔子、管仲を稱して曰く、桓公諸侯を糾合し、兵車を以てせず、管仲の力なり、其仁に若かんやと。孔子此く管仲を以て仁者となす。孔子は容易に人に仁を許さざるの人なり、然るに管仲には之を許せり。若し當時戰亂相繼ぎ、此まゝに行きしならんには、文明地に墜ち人情亦野蠻に歸らんのみ。然るに能く此擾亂を平定して、天下を周の王室に統一し、生民を塗炭に救ひたるの偉功は、彼れ管仲之を奏す。孔子又曰く、管仲、桓公を相けて諸侯に霸たり、一たび天下を匡正して今に至るまで民其賜を受く、管仲微りせば吾それ變を被り、枉を左にせんと。然るに孟子は後代に出で、管仲の功を隱くし、仲尼の徒、桓文の事を云ふ者なしと云へり、愚と云ふべし。管仲は大功利主義者なり、

故に仁者なり。

功利主義の立論は、人間一切の行爲は其快樂を求め、苦痛を避くるより生ずることを基礎となす。管子亦此理に由り、以て行政道德等を説き、人をして徳行ならしめ、政令に順ならしむるを得るは、全く此二動機を利用するに由ることを説けり。其説に曰く、「凡そ人情利を見て能く就く勿きなく、害を見て能く避くるなきなし。利あれば民自ら美安なり、推さずして往き、引かずして來る」と。人生利を好む、利とは極めて廣き意味にして、快樂幸福等と同一語と知れ、之を以て人間を動かさんと欲せば利を以てし、其好む所に由るべしとなす。然り。管子は賢人の賢人たるは「民の爲めに利を興こし、害を除き、民の徳を正す」にありとなす。故に管子の説に由れば、道德法とは君主賢人の下を治むるの方法にして、其法則は決して先天的存在の神秘形而上的のものに非ず、又無上命令的のものにも非ず。只人を治め、苦痛を去り、快樂を與ふるに最もよきものを以て行政及び道德の法則となすのみ。

功利主義は社會及び國家に重きを置くものにして、直覺論、先天論、或は無上命

令論の如く、箇人的利己的のものは其趣を異にせり。故に多少國家の觀念を有せるものは、必ず功利主義の人たるなり。大政治家、大經濟家、大經倫家は、皆功利主義の人に非ざるはなし。功利主義に非ずんば、大經世家たること能はざるなり。吾人の所謂功利とは、決して一箇人の利欲を完うせんとするの主義には非ずして、社會の福祉なり、國家の隆昌なり、天下を利することなり、これ其目的となす所にして、利他的のものに非ざるはなし。然るに直覺論或は無上命令主義は、全く箇人的にして、只自己一身を潔くせば可なり、國家、社會は如何ならんともよし、人は死するとも、國は亡ぶるとも可なり、自己の行爲の結果如何を問ふこと勿れと云ふ主義なり。之れを以て素より利他的の哲理の基礎なき者にして、無上命令と云ふが如きは、功利の語に對しては、一見高尚なるが如しと雖も、實は利他的のものなく、箇人的利己的下等なるものなり。

管子は功利主義の大哲なり、故に社會國家を重んず。己に之を重んぜば從てこれが爲めに功利を重んずるは論なきなり。而して管子の理想とせる社會國家は如何なるものなるやと云ふに、蓋管子は政治と道德とを其發する所を一と

せる者なるを以て、政治は道德の爲めに、道德は又政治の爲めに、互に相助けて國家の強大、社會の安樂を興ふべしとなす。實に管子の精神とせる所は、箇人の幸福と國家の健全とを保たしめんとするものにして、上は能く下を愛し、下は能く上を敬して其令を守り、君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友、皆其分を全ふし、人々相信じ、箇人の私欲を恣にすることなく、禮義廉耻を重んじ、節を守り、奢侈を禁じ、各其業を勉勵し、人々相和睦し、少くして相居り、長じて相遊び、祭祀相福び、死喪相恤へ、福禍相哀しみ、居處相樂しみ、行作相和し、哭泣相哀しみ。萬民驩びて其力を盡くして上の爲めに用ゐらるゝを樂しみ、入りては本を務め、疾作以て倉廩を實たし、出でゝは節を盡くして敵に死し、以て社稷を安んじ、勞苦卑辱と雖も敢て告げず。墳然として一父の子の如く、一家の實の如くなる。これ管子の理想とせる國家なり。殊に一旦事あるに當りては、人々驩欣以て相死するに足るの俗を爲さしめんとす。此くて内は人々相共に幸福なる生活を爲し、外に對しては強力なる國家を組織するを得べきなり。

故に人若し此社會に屬し、又屬せんとするときは、其理想に従ひて、其社會の安

全と利益とを害せざるべきは其當然なる所にして、然らざれば社會の平和を失ひ併せて各自の利益を害せん。家屋は四維ありて之を維持す、社會亦之れを維持する物なかる可からず。然り「禮義廉恥」これ社會國家の四維なり。四維ありて社會始めて存するを得るなり。若し一維絶へば則ち傾き、二維絶へば則ち危く、三維絶へば則ち覆り、四維絶へば則ち滅す。四維は社會の存立に必要ななり。管子之を主要なる「德義」となす。されども管子は是等の諸徳に加ふるに「信」を以てす。信とは「人を結ぶ」ものにして、社會の安心と一致とは信あるに由りて始めて得らるゝなり。管子の功利的の徳義尙これに止まらず、勤勉も亦其大切とする所なり。勤勉とは、各自其力に任じ、其分を盡くすとすなり。蓋人の社會に在るや必ず各自爲すべきの分あり。「農は常業あり、女は常事あり、一農耕や、一民之れが爲めに饑へん、一女織らざれば民之れが爲めに寒なるものあらん。」之れを以て人々各々其分を盡くし、怠ることあるべからず。實に一箇人は一箇人の一箇人に非ずして社會の一員なり。一人の勤惰は社會に影響を及ぼすや少々なりとせず。之を以て勤勉は社會に於ける重大なる徳義となす。管子又

戒めて曰く「曙は戒めて怠ること勿れ、後遅なれば殃に逢ふ。朝に其事を怠れば夕に其功を失す」と。此くの如く管子の徳義を云ふや、一として國家の功利人民の康福に非ざるはなし。

管子よく徳徳を貴ぶ、其之を貴ぶや國利民福の爲めにあり。故に社會國家を重んずと雖も、又箇人の幸福を破らざらんとし、人に令し、徳徳を守らしめんとするや、必ず人情人性を考へ、之に順ひて事を爲さんとせり。管子が人民の福利を重んずるや、決して儒者等の如く、單に徳徳々と云ひて人を攻むるに非ずして、人をして徳徳を行はしめんに、安んじて樂しく之を行はしめ得るの準備を以て之に臨めり。否々徳徳を云はんよりも、不徳なからしめんとせり。「倉廩充ちて禮節を知り、衣食足りて榮辱を知る」とは、管子不朽の金言にして、又其大原理なり。これ其功利の精神に出で、人民を幸福にして不足なからしめ、惡は之を起るに由なからしめ、又徳徳の實行を要求するに當りても、人をして安く之を爲さしめんとするものなり。故に曰く「凡そ國を治むるの道は必ず先づ民を富ます、民富めば治め易く、民貧なれば治め難し。何を以て其然るを知るや。曰く、民富め

ば郷を安くし、家を重んず。郷を安くし、家を重んぜば上を敬し、罪を畏る。上を敬し、罪を畏る、時は治め易し。民貧なれば郷を危くし、家を軽んず。郷を危くし、家を軽んずるときは敢て上を凌ぎ、禁を犯す。上を凌ぎ、禁を犯すときは治め難し。故に治國常に富みて亂國常に貧なり。是を以て善く國を爲むる者は必ず先づ民を富まし、然る後に之を治む。舜刑罰を嚴にし、禁令を重くせるに非ずして民之に歸す。これ去るものは必ず害あり、從ふ者は必ず利あればなり」と。

而して聖人は何が故に尊ばるゝやを云ふて曰く、「先王は能く民の爲に害を除き、利を興こすものなり。故に民之に歸し、國富み郷を安くし、家を重んじ、俗を變じ、習を易くす」と。若し人富まば之れに由りて幸福の大部は得らるべし。若し人富まば不足なく、悪心生ぜざるべし。若し人富まば自然に禮節を知り、廉耻を重んずるに至るや其理なり。之を以て管子は其本を務め、功利を以て主義となす。人民を幸福ならしめ、よく政令を聞かしめ、道德的生活を爲さしめんと欲せば、上に立つ所の政治家は大に之に注意せざる可からざるなり。此に於て管子、政治家及び君主の事とすべき所を説くこと周到精密にして、山林、水澤、六畜、桑麻、農

工等の事の輕んずべからざるを云ひ、貧富と徳義と國勢の強弱との關係を説き、致富の法を講明し、教育の事をも云へり。又國家の貧富強弱の觀察法を明にし、以て人民を充足せしめ、國を強くし、以て最大數の最大幸福を得しめんとせり。此くて政治家其處置宜しきを得たるときは、管子「地員篇」に云へるが如く、其國田疇墾けて五粟のもの或は赤或は青或は白或は黒又或は黄なるべく。其桐、其楡、其柳、其栗、其桑、其柘、其櫟、其槐、其楊等群木蕃滋すべく。又水澤には魚多く、綠の牧場には碧色の水流れて四邊を濡ほし。其牛羊は其肉綽々として肥え、其梅、其杏、其桃、其李、其棘、其棠等は庭園に秀生し、紅白、黃綠、華美を競ひ、果實は累累として枝を撓はめ、又鳥獸は山野に繁殖せん。此くの如き山川、此くの如き田野、これぞ人民倉廩の源泉なる。此自然の美の内にこそ禮節を知り、廉耻を重んじ、勤勉、輯睦、質素、強健なる人民は、平安、康福なる生活を爲すなれ。而して朝廷閒にして、官府治まり、公法行はれて私曲止み、倉粟充ちて囹圄空しく、賢人進みて姦民退き、士民勇武を貴び、得利を賤し、庶人耕農を好み、飲食を惡む。是に於て財用足り、飲食薪炭饒なり。是故に上必ず寛裕にして解舍あり。下必ず聽從して疾怨せず。

上下和同して禮義あり。故に處れば安ふして、動けば威あり、戰へば勝ち守れば固し。此くの如きは管子の理想にして、又其功利主義は其理想に到達せしめたり。誰か盲目的に管子を誘ふ者ぞ。誰か無學にも功利主義を卑しと云ふものぞ。古來の腐儒等の説を採り、西洋の淺薄なる倫理學者の迂論に迷はされ、以て功利主義に反對せんとするの輩は憫れむべきかな。韓非子は管子を尊稱して「聖人」と云へり。これ功利主義なればなり。

三 詩經の功利主義

功利主義は人民の豊富を貴ぶ。何となれば豊富は人民幸福の一大方便にして、人性を完うし、又之を善となし、自重の心を生せしめ、行爲を節飾し、舉止を美にするものなればなり。故に豊富は功利の大なるものにして、決して忽苟に付すべきものに非ざるなり。凡て幸福を生ずる行爲を善行と云ひ、幸福を與ふるもの、充備豊富を善物と稱す。善行を爲すものも善行にして、善物を作るも亦善行なり。何となれば善物多ければ人々樂しみ、幸福多く、國富み、兵強く、個入にも、

社會にも亦國家にも大善なればなり。故に聖人及び大政治家は必ず善物の豊富を云はざるものなし。「詩經」は儒教に大に尊ぶ所、孔子の念々誦したる所、孟子の常に引用したる所の書なり。書中道德を歌ひ、又は稼穡を歌ふ。聖人之を美として後世に傳ふ。稼穡勤勉をすゝむるはこれ社會の福利なり。

管子の語たる「農は常業あり、女は常事あり、一農耕やさゞれば民之れが爲めに饑えん、一女織らざれば民これが爲めに寒なるものあらん」とは、これ管子が勤勉を以て社會維持の大徳となし、怠惰は其大不徳とせる所の精神の發表なり。功利主義の勤勉を貴ぶこと此くの如し。詩經も亦勤勉を美とし、之を詩にして人にすゝむ。曰く

「坎々(力を用ひ)として檀(車)の材を伐り之を河の干に置く、河水清うして且漣つ。稼せず穡せずんば胡禾三百廩を取らん。狩せず獵せずんば胡ぞ爾の庭に懸貍あるを瞻ん。彼の君子は素餐せず。

坎々として輻(車)のやを伐り之を河の側に置く。河水清うして且直し。稼せず穡せずんば、胡ぞ禾三百億を取らん。狩せず獵せずんば、胡ぞ爾の庭に

懸特あるを瞻ん。彼の君子は素食せず。

坎々として輪を伐り、之を河の涓に置く、河水清うして且淪あり。稼せず穡せずんば胡ぞ禾三百困を取らん。狩せず獵せずんば胡ぞ爾の庭に懸鶉あるを瞻ん。彼の君子は素食せず。

と。君子は素食せず、素餐せず、額に汗するに非ずんば食を得ず、稼せず穡せずして如何んぞ禾を得るの理あらんや、狩せず獵せずんば焉んぞ美肉を得ん。勞働せざれば餓うるあるのみ。詩經詩人の勤勉を貴ぶこと此くの如きなり。然るに耶蘇は之れに反して教へて曰く「野の百合花を見よ、勤めず績がざるなり、空の鳥を見よ、稼かず穡らず又倉をも建てざるなり。然るに天の父は之を養ひ玉へり、故に汝等只神の國を求めよ、然らば衣食は自然に得べきなり」と。只空々として神の國を求めよとして、稼穡せず勤勉せざる如きは尸位素餐の人なり、無益の人なり。「一農耕やさゞれば民饑うるものあらん、一女織らざれば民寒なるものあらん」との管子の精神に比較せよ。耶蘇の所説は社會を貧弱ならしむるものと云はざる可からず。

其心を盡くし力を盡くし、勤勉して禍害を未然に禦ぐの趣を詩にせるもの
曰く

「天の未だ陰雨せざるに迫びて彼桑土を徹りて牖戸を綯繆す(すきまをふさぐ)今汝下民敢て矛を侮るあらんや。」

予が手拮据し予が持るところは茶。予が畜租むる所なり、予が口卒く瘠む。

曰く未だ室家あらず。

予が羽謙々(羽のそげ減ること)たり、予が尾脩々(破れること)たり、

予が室翹々(危きこと)たり、風雨の漂搖する所、予維れ音曉々(急)たり。」

と。此詩の本意は王室新造の事を寓せるものなりと雖も、又文字通りに解して鳥の語を借りて其巢を作る勤勉を歌ふものと解するも亦善からずや。これ實に大なる勤勉なり。風雨に先き立ちて牖戸を綯繆すと云ふが如きは、其預備心と避害心とを示めすものにして、功利主義の人の社會國家に盡す所は亦此くの如きなり。

古昔に在りては、農業は生業の大本なり。故に農業を貴ぶや其理由あり。農

業を勤むるは大徳なり、之れを勵まし、之を勤むるは大聖なり。これ人間に最も大なる功利なればなり。神農は農業の祖、又醫藥の宗なりと稱せらる。又人民の福祉を増進し、患害を除きたる偉功の聖人なり。伏羲、黄帝と併せて三皇として尊崇せらる、皆これ功利主義を實行したるものなればなり。神農を祭るの詩に曰く、

『我齊明(祭物)と我犧牛とを以て、以て社し、以て方祭す。我田既に臧きは農夫の慶なり。琴瑟擊鼓、以て田祖神農を御へ、以て甘雨を祈り、以て、我稷黍を介にし、以て我士女を穀はん。』

百穀を豊富にして、以て人民を養ひ、田事を奨勵して、之を教へ、以て民の利を興こしたるは神農なり。故に之を祭りて功を念す。

后稷は堯舜の農相なり。詩經には其生誕の奇怪神異にして、其成育の又靈異なるものありて、牛羊之を養ひ、平林に置けば、人之を拾ひ上げ、寒氷に置かば、鳥來りて之を覆翼せりと云ふ。其成長に至るの狀を云ふて曰く

『誕に實に匍匐し、克く岐に克く、巍に、以て口食に就き、之れが荏菹を蒔う。荏菹

菹蒹々(成長す)たり、禾(つらな)役り穰々(苗の美好)たり、麻麥(ま)懐々(茂密)たり、瓜(うり)瓠(はく)嘩々(たり)實多き。』

こゝに后稷の穡相くるの道あり。厥(そ)豊草を蒔(ま)め(草を抜き)これが黄茂(嘉穀)を種う。實に方(皮穀)し、實に苞(芽ばらぬ)時に種を漬(じ)け、實に種し、實に糝(し)し(長じ)實に發(花さ)き、實に秀(實に堅く)實(實)に好(形味)の美、實に穎(たり)穂、實に粟(稗)なく、有(部)と云ふ地(に)封(せ)られ(の家室母の家)に即く。』

と。人民其衣食に豊にして、生を安くするを得たるは皆后稷の賜なり、之れを以て後世后稷を神に配して、之を祭り、其恩を思ふ。若し后稷にして功利主義に非ずとせば、焉んぞよく聖人とせられ、神と祭らるゝことあらんや。功利主義の大なるものは、能く人をして聖人たらしめ、又神たらしむ。

禹は又農事に功勞ありし人なり、人民歌ひて曰く、

『信なるかの南山、維れ禹之を甸(む)む、町々たる原隰は曾孫(祭主)之を田つくる。我れ疆し、我れ理し、其畝を東南にす。』

上天雲を同うし、雨雪雰々たり、之れを益すに霽霖を以てし、既に優かに、既に

渥く、既に霑ひ、既に足り、我が百穀を生ず。」
と。これ禹の頌徳なり。禹水を治め、田畝を經營す、其徳後世に及ぶ、功利主義の及ぶ所此くの如し。

公劉亦古昔の大功利家なり、民を足らし、國を富まし、兵を強くし、以て國威を輝やかしたる人なり、詩其功を頌美して曰く、

「篤いかな公劉居に非ず康に非ず。廼ち場し廼ち疆し、廼ち積し廼ち倉し、廼ち糧を裹む囊に囊に。輯げ用て光にせんことを思ひ、弓矢これ張り、干戈威揚爰に方めて行を啓く。」（公劉の人民國家を思ふこと篤しと云ふべし、安居せず康樂せず、田畝の事をつとめ、收穫を蓄積し、兵糧を囊囊に包み、人民を輯睦し、干戈弓矢を充備し、こゝに始めて軍を行ふ。）

人民を思ひ國家を思ふ者皆此の如し、これ人民に大功利なり。或は后稷、或は禹、或は公劉、みな大人なり、君子なり、而して其爲したる所を問はば、一として人民の幸福、國家の富強に非ざるはなし。大人の勉むる所みなこれなり。此くの如きの人は、積極的に直接に人民の幸福を増さんとする者にして、善物を充たさん

とするものなり。所謂道德は、行ひを善たらしめんとするものなり。其もの異なりと雖も、其精神及び結果の歸する所は一たるなり。

后稷及び公劉の風化を述べて作りたるものを、七月の詩となす。衣食の爲めに勤勉せざる時は寒來りて衣なく、食を欲して食なきを云ふ。これ勤勉勸農の詩なり。曰く、

「七月流火。九月衣を授く。一日日鬻發。二日日栗烈、衣なく褐なくんば何を以て歳を卒へん。三日の日于て相す。四日日趾を擧ぐ、我婦子と同じく彼南畝に饑するとき、田畯も至て喜ぶ。」（七月には火星下りて西方に流れ、九月になれば寒氣も増す故衣を授く。一日(十一月)になれば風寒く、二日(十二月)には寒威強く、衣褐を要す。三日(一月)相を入れ、四日(二月)趾を擧げて畊す。女子及び小兒等は其田に在るものに食物を運び辨當を送る。此る時に勸農官も來り見て其出精を喜ぶ。）

と。又曰く

「晝は爾茅かれ、宵は爾綯索。丞かに其れ屋に乗れ、其れ始めて百穀を播け。」

と。其勤勉をすゝむるの切なる見るべきなり。此くて人民衣食に足り、幸福の生活をなし、鼓腹して父母妻子と共に楽しむを得べし。實に鼓腹擊壤は聖人の目的とする所には非ざるか。

而して其人民を康福ならしめんとするの功利主義は、又貧者寡婦等に對して慈惠餘恩となることを歌ふて曰く

『彼に穫らざるの穉あり、こゝに斂めざるの穉あり、かしこに遺棄あり、こゝに滯穂あり、これ寡婦の利なり』

と。其豊富充實、或は穫らざるの穉、或は斂めざるの束あるが如く充實するに於ては、何ぞ事新しく、慈善を説くを要せんや。積極的に満足せば何ぞ稍極的の救済を爲すの要あらんや。此くの如きは功利主義の精神とする所なり。

『かの苗たる藎、壹發して五疋。』(藎は苗として盛に茂り、獸類は多くして矢一發して數頭を獲)

と云ふが如き豊富を得たらんには、人民生業の安き、樂しき思ふべきなり。而して能く此くの如きを得るは、政治施策の功利其大なるに由らすんば非ざるなり。

『河水洋洋たり、北流活々たり、思を施くこと濊々たり、鱣鮪發々たり、藎藁揭々たり、庶姜姪姊、藥々(盛飾)たり、庶士竭武貌(たるあり)』
と云ふが如きは其極度の豊富を示めし、之を美とせるものなり。此くて萬物豊富にして人民勤勉して田作又多く。

『之を穫ること恅々たり、之を積むこと栗々(密)たり、其崇きこと塼の如く、其比ふこと櫛の如く、以て百室を開き(取り入れ)百室盈ちて婦子寧し』

婦女子弟安樂なるを得。又種々祭祀の時の供物の香ばしきは『邦家の光』となり、又其馨ばしきは、『耆老壽考の人の安寧』となり、歡喜となる。

此くの如きは詩經の功利主義、豐富主義、幸福主義なり。聖人此書を美として人にすゝむ。吾人聖人の主義の又此くの如きものなるを信ず。詩經は功利主義を美とし、之を詩とせるものなり。

四 「易」の功利主義

正々堂々と功利主義を唱ふるものは「易」なり。易は伏羲以降孔子に至る間の

諸聖人の手に由りて成れるものにして、人民に行爲の法則を教へ、幸福なる生活を爲さしめんとする純然たる功利的精神より成れるものなり。易の第一原理は「成性存々」にして、萬物をして其性を完うし、生命を長久にし、又之れを幸福ならしむるにあり。故に其目的を完うする方法と云は、素より功利主義たるや論なし。而して易は最も明瞭に諸聖人の聖人たるは、功利主義に由るものなりとの理由を説明して餘す所なし。

元來道德とは何ぞや。何の爲めに吾人は道德を行ふか。或は之に答へて云はん、道德は他に目的なし、只道德の爲めに行ふのみと。これ前に數々言ひし所の無上命令主義なり。されども此説の誤謬なることは、吾人の前に畧論したる所に由りて明かなるべし。こゝに易の所説も亦無上命令主義の如きもの、非を證明し、以て道德の標準を功利主義に取れり。易の倫理及び政治上の精神は實に功利にあり。

無上命令主義の道德は、只法則此くの如き道德法則と云ふものが實在せるや否やをも確かめずしての命とし云は、結果の善悪は毫も問ふ所なくして之を行

ふべしと云ふと雖も、功利主義の所説は、無上命令主義の如く無責任なるものに非ず、着實に事物の情性を考へ、自然の法則に遵順し、よく其結果如何んを思ひ、以て徳義の法則を立てんとするものなり。之を爲さんと欲せば、よく人の欲する所及び欲せざる所を明にせざる可からず。其欲する所を得しむるものは善にして、之に反するものは悪なり。是に於て易は利を以て道德の標準となし、道德は實利たるが故に道德たる尊き價值ありとなす。

易の目的は功利にあり、天下の人民を利せんとするにあり。之を以て易は其精神とせる所を云ふて曰く「天の道を明にし、而して民の故を察し、是に神物を興し、以て民用に前んず」と。吾人はこゝに問はん。道德或は聖人は何が故に貴きか。只身を殺すが故に仁人なるか、或は目的もなく千辛萬苦を嘗めたるが故に君子なるか、或は是非利害は問ふ所なく、自他に如何なる害悪來るとも顧るなく、以て道德なりとして之を行ふが故に道德は貴きか。カント者流の倫理説に由る時は、此くの如きの問ひに向て然りと答へざる可からざるべし。若し果して然りとせば、聖人の聖人たるは他なし、只苦しむるが爲めなり、道德の道德たる

は他なし、よく人を苦しめたるが爲めなりと云はざるべからず。これカント者流の倫理説の免る可からざるの批評と云ふべし。實に多くの大人は千辛萬苦を嘗め、或は甚しきは仁を成さんとして身を殺せり。然りと雖も、聖人君子の苦しみたるは決して「道德」或は「法則」と云ふ如き空漠なる抽象的の物の爲めにせしには非ずして、肉あり情ある所の人間の爲めにせしものなり。道德其物の爲めに非ずして人間の幸福、利益の爲めなり。これ大人の大人として尊ばるゝ所以にして、又道德は其功利たるが故に貴きなり。若し大人君子にして、只虚形無實在なる道德と云ふものゝ爲めに自ら苦しみたりとせば、吾人は決して大人君子を尊敬することなかるべし。何となれば此の如きは、これ只彼等自己の心を満足せしむるのみにして、毫も他を利益するの精神なく、謂はゞ彼等の利己主義を行ふものに外ならざればなり。世を利益せざる者、吾人何ぞ之を尊敬するの義務あらんや。人生の幸福を擴大し、其利益を増進せんとする人こそ、眞に貴ぶべきの大人にして、カント者流の無上命令主義の人の如きは、實に卑しむべきの利己主義の人物と云ふべきのみ。嘗に卑しむるのみに非ずして、其行爲の目的も結

果をも思はざるが如きは、これ狂行盲動暴虎馮河にして、笑ふべく又恐るべきものなり。何ぞ道德と云ふべけんや。吾人は此くの如き主義の實行をイスパニアの小説家セルワソンスの著なるドンキホーテに於て見、其學説をドイツの哲學者と稱せらるゝカントに於て見る。無上命令主義は吾人之をドンキホーテ主義と稱するも決して偶然に非ざるなり。カントはドンキホーテの解釋者と云ふも不可なし。之れを思ひて易の所説を見る時は、其言は着實にして、道德の眞正なる性質、價值及び目的等を説き得て當れりと云ふべし。功利主義即ちこれなり。易の「乾」の卦の作用を讚美せるの言に曰く「乾始は能く美利を以て天下を利す。利する所を云はず、大なるかな」と。これ大に利を興ふることを譽むものなり。功利主義は唱道すらく、能く人民の多數に大幸福を興ふるものは善にして、道德とは其目的に達せしめ、聖人とは能くこれに盡力するものなりと。易は曰く「物を備へ、用を致し、成器を立て、以て天下の利を爲すは、聖人より大なるなし」と。茲に於て吾人は聖人の聖人として貴きは、美利を以て天下を利するが故なるを明

知するなり。

易は、聖人は人民を利するが故に聖人たるを例證して曰く、「古、包犧氏の天下に王たるや、仰て象を天に觀俯して法を地に觀、鳥獸の文と地の宜とを觀、近く之を身に取り、遠く之を物に取り、是に於て始めて八卦を作り、以て神明の徳に通じ、以て萬物の情を類す。結繩を作り、網罟を爲り、以て佃し以て漁す。包犧氏没して神農氏作り、木を剉りて耜となし、木を揉て耒となし、耒耨の利以て天下に教ふ。神農氏没して黃帝、堯舜氏作り……吉にして利からざるなし……木を剉りて舟となし、木を剉りて楫となし、舟楫の利以て通せざるを濟たし、遠きを致して以て天下を利す。牛を服し馬に乗り、重きを引き、遠きを致して以て天下を利す……白杵の利……弧弓の利……」と。此文章明瞭に功利を説き、人民の害を除き利を興すを以て聖人となす。故に最も尊き聖人は、最も多く人世を利益する人なり。陸象山は宋代の大家なり、能く功利主義の眞價を認めたる人なり。其言に曰く「聖人物を備へ、用を制し、成器を立て以て天下を利す、是故に網罟耒耜杵臼を作り而して民食に難からず、上棟下宇以て風雨を待ち而して民居に病まず……凡

そ○聖○人○の○爲○す○所○以○て○天○下○を○利○す○る○に○非○ざ○る○は○な○し○と。又進みて堯舜禹等の行事の功利的なりしことを述べ、又孔子及び孟子等が功利を卑しみたるを評して曰く「二典堯典舜典に堯舜の事を載す、而して義和に命じて民時を授く、禹は水土を平かにし、稷は播種を降すを當時の首政急務となす。梁の惠王何を以て吾國を利せんと問ひしは、他の過あらず、而して孟子何ぞ遽かに之を闢くの峻にして之を辨するの力めたるや……世儒者を以て無用となし、仁義を以て空言となす、深く其實を極めざれば、無用の譏空言の誚、殆ど苟も逃る可からず」と。着實なる議論と云ふべし。實に道德の目的は功利にあり、聖人の力めたる所も亦功利にあることを知るべし。かの徒らに高尚らしき言語を臚列し、無上命令とか、或は道德は道德の爲めにと云ひて、功利主義を卑しむは、未だ道德の實質を知らざるものなり。道德の判断は功利にありと云ふべし。

五 墨子の功利主義

周末に於ては諸學派四方に起り、各々其説を戦はし、或は民を治むるの法を説

き、或は政治を論じ、或は富國を策し、或は強兵を講ず。而して其最も盛大を極めたる道德説は孔子派と墨子派にして、儒墨と之を并稱せり。殊に孔子没して後は墨子の學派は天下に充ちたりと云ふ。其盛大なる學派たりしや見るべきなり。

墨子名は翟。其最も有名なる學説を兼愛説となす。兼愛説とは博く愛し大に利することにして、即ち功利主義たるなり。

墨子は、天及び鬼神を信じ、人間道德の模範は天意に由りて定まると信ず。素より天を謂ひ、鬼神を云ふが如きは古代の迷信にして吾人の取らざる所なりと雖も、今墨子の此宗教的の言語を倫理的に云ひ代ふる時は、墨子の天の好惡する所と云へる語は、善惡の標準は何ぞやと言ひ代ふるを得るなり。墨子の倫理説の出立點は、天は人間を愛す、故に我等人間も亦互に相愛すべしと云ふにあり。然らば愛するとは如何なることぞ。これ墨子の有名なる兼愛説の論ずる所なり。

愛するとは何ぞや。我これを好み之を利せんとするの情なり。故に愛情と

は其中に愛するものを利益せんとするを含むものにして、愛と利とは必ず合一して始めて愛情其實を完ふせりと云ふべきなり。今若し愛情のみありと雖も、之を利すること能はざるに於ては其愛は眞の愛を得たるものに非ざるなり、之を以て墨子は常に「愛と利とは之れを並び説けり。其の説に曰く、仁人の事となす所のものは必ず天下の利を興し、天下の害を除き去るを以て事となすものなり」と。これ墨子の功利主義を示めせるものに非ずや。墨子天下の害惡亂行の原因を云ひて、人々互に相愛せざるに由るとなす。然りと雖も愛は情なり、其情を實にするには、之を利せざる可からざるなり、故に墨子は愛情を實にするには之を利することあることを云ふて曰く、「昔三代の聖王堯舜禹湯文武の天下を兼愛するや、從て之を利す」と。又仁とは利することなるを云ひて曰く、「仁者の天下の爲めに度るや孝子の親の爲めに度るに異なるなし。今孝子の親の爲めに度るや如何ん。曰く、親貧なれば之を富ますに従事し、人民寡ければ之を衆くするに従事し、衆亂るれば之を治むるに従事す。其此に當てや亦力足らず、財足らず、智足らざるありて然る後已む、仁者の天下の爲めに度るも亦此くの如し」と。仁心

ありと雖も其實なくんば仁は無益のみ、人を利することなき仁は吾人之を知らざるなり。假令種々の事情に由りて、實際に人を利すること能はずとするも、尙ほ之を利せんとする所の精神好意はなかる可からず。仁と云へる言語中には、必ず人を利せんとするとの觀念ありて存す。今若し仁の言語より人を利すとの觀念を取り去るときは、仁は徒に空語に終らんのみ。吾人は利するなきの仁を思ふこと能はざるなり。貧人に仁せんと欲せば、最も貧人の要するものを與ふるにあり。即ち貧者は之を富ますにあり、知識を要せば教育を與へ、助力を要せば力を與へ、彼れ迷へば我れ導き、疾病なれば之を看護するにあり、身を殺して仁を爲すとは、只身を殺すのみが目的に非ずして、身を殺し、以て天下を存し、以て天下を利するなり、人を利するなきの仁あるべからず。人を利するを思はずして善意あるべからず。カントの善意論——即ち人は善意のみあれば可なり、結果如何を思ふなかれ、天は墜ちんとも、人は死せんとも、只善意を以て事を爲せと云ふが如き——は、實に空々無意味の言語にして、カントの如きは言語の分析も、精神と實際との關係も、亦心理作用をも知らざる者と云ふの外なし。カント

の倫理論は誤謬なるものにして、又價值なく、且つドンキホーテ的の危險あるなり。利は決して道德以外のものに非ずして、利なければ道德は中空なり、尙ほ進みて墨子の利論を見よ。其孝を説明するの言に曰く、「孝とは親を利するなり」と。然らば忠とは君を利するなり。(利は廣き意味)愛國とは國を利するにあり。道德の實質は利にして、形式と種々の場合とに由りて種々の徳名あるのみ。故仁者は利せざる可からず。吾人は利と云ふと雖も、利己主義の實行を云ふに非にず、墨子は利己は大に之を攻撃す。

最も人を利するの大なるものは何ぞや。墨子は其最も敬して道德の本源となす所の天なりとなす、曰く「天の人を愛するや、聖人の人を愛するよりも薄し、其人を利するや、聖人の人を利するよりも厚し、大人(小人)を愛するや、小人(大人)を利するよりも薄し、其(小人)人を利するや、小人(大人)を利するよりも厚し」大小に括弧を入れしは余の私見なり。此等の文字を取り去りて讀む方却て眞意を得たるが如きを感ず。小人の人を愛するや實に外面に表はれ、一時の熱情盛なるものありと雖も、其人を利するに於ては或は小なり。天は殆ど愛情なくして之

を利す。墨子は天を模範となす。故に善の至當なるものは最も利するものなり。其意蓋し愛の如きは情にして、一箇人的のものなり。有無は問ふことなくも利あれば其實あるを以て可なりとせるが如し。是を以て墨子は愛よりも一歩を進めて利を以て至高となし、利に於て愛の實も、仁の實も、善の實も、孝の實も之を實得せらるべしとなす。

墨子はよく道德仁愛の實質を知れり。妄りに道德は道德の爲めに行へと云ふが如きカント者流の淺薄なる言を爲さざるなり。墨子至善を云ひて曰く「上は天を利し、中は鬼神を利し、下は人を利する」にありと。三利完きを至善となす。世の功利主義を卑しむの輩以て如何んとなす。故に曰く「仁の事は極めて天下の利を興し天下の害を除くを求む、人に利あらざれば即ち止む」と。

六 孟子の功利主義

吾人こゝに孟子の功利主義と題するときは、世の思考力なき學者等は、必ず之を異しむなるべし。何となれば孟子は功利主義を排し、管仲を攻撃し、墨子を排

し、又た梁の惠王の一國を利することを問ふや、滔々と其利を排し、功利主義に反對せし人なるを以てなり。孟子は實に言語に於て功利主義を排したり、然りと雖も、これ功利主義を誤解して攻撃せるものにして、聖賢の意とせる所の眞の功利主義を攻撃するに非ず、世の利欲自利主義を攻撃せるのみ。故に一方に「利を排すと雖も其精神の奥を探るときは、孟子も尙ほ功利論者に外ならざるなり。

孟子梁の惠王に見ゆ、王曰く「叟、千里を遠しとせずして來る、亦以て我國を利せんとすることあらんとするか」と。孟子對へて曰く「王何ぞ必しも利を云はん、亦仁義あるのみ」と。それより雄辯滔々、利を排す。されども其孟子の排したる所の利とは、吾人の所謂功利主義に非ずして利己主義の利なるのみ。而して惠王の問ひたる所は「一國を利することにして決して利己主義に非ず。然るに孟子一概に之を攻撃して之を拒ぐ、何ぞ誤らずとせんや。一國を利し、人民を幸福にする、何物か其善に若かん、惠王の其國に於けるや實に心を盡くせるの人と云ふべし。然るに孟子は「國利」と云ふことを看過し、王一箇人の利と解せり、宛かも外的の鐵砲の亂發の如きなり。博く天下國家を利するとはこれ功利主義にし

て又仁政なり、惠王の問ひし所は其方法にあり。孟子之を利己主義と誤解して一も二もなく之を排す。誤れりと云ふべし。

梁の惠王及び齊の宣王の快樂を問ふや孟子之を惡とせず、一人之を樂しまんより衆と共に樂しむときはこれ善にして仁なりと云へり。功利主義は最大数の最大幸福を目的となす。然らば孟子にして若し功利主義の眞意を知りしならんには必ずや功利主義の唱道者たりしや論なかるべし。

孟子は常に管仲を罵ると雖も其經濟と道德との關係——即ち功利主義——を云へるの點は、全く管子の言へる所を繰り返へして云へるに外ならざるなり。管子は人をして道德ならしめんには、先づ衣食住を充實すべしと云へり、これ功利主義の倫理家の精神とする所なり。孟子も亦之れと同一の語法を以て曰く「恒産無くして恒心あるは惟士のみ能くする所なり。民の如きは恒産なければ因て恒心なし。苟も恒心なきときは放辟邪侈爲さざるなきのみ。罪に陥るに及びて然る後之を刑す、これ民を罔するなり、焉んぞ仁人位に在る有らば民を罔すると而かく爲す可けんや。是故に明君民の産を制し、必ず仰て以て父母に事

ふるに足り、俯しては以て妻子を畜ふに足らば……驅て善に行かしむるや民の之に従ふや輕しと。而して農業山林の事より教育のことを論ず、一として國利民福に非すと云ふことなし。孟子の常語たる所の「仁政」とは何ぞや、他なし、只人民をして幸福ならしむるにあらざるや、故に孟子は口に功利主義を排すと雖も、其眞精神は功利主義に外ならざるなり。

七 結 論

吾人は尙ほ此他荀子其他の諸家の議論を引き來りて、古來諸聖賢は皆功利主義なりしことを論せんと思ひたり、然りと雖も餘りに冗長となることを恐れてこゝに之を畧すべし。然りと雖も右の如く觀來るときは、功利主義は最も高尚にして、博愛仁義利他等凡て最も美なる精神の發表せるものなることを知るべし。さればこそ聖人等皆功利主義を唱ふるなれ。殊に易及び墨子の功利主義の如きは、學說として最も明瞭に利の大切にして又高尚なることを教ふるものなるを見る。而して吾人が今こゝに論じたる所は、其此主義の學說風に現はれ

たるものゝみにして、又其東洋古代の聖哲の少數に由りて例したるのみ。若し尙東西古今を通じ、學說及び實行等を材料として論ずるときは、吾人の議論は又一層の明瞭を加ふべきを信ず。

孔子が一生艱難辛苦を忍びて四方に漂流して道を説きしは他なし、只人民をして其所を得て、幸福ならしめんとするにありき。耶蘇の死せしは天下の人をして「パラダイス」の幸福を受けしめんが爲めなりき。マホメットの考へたる所も然り。ソクラテースの大目的も亦アテーナイ國の強固と人民の幸福とにありき。凡て聖人の心盡くしは皆人民國家の富強幸福に外ならざるなり。

苟も一國に帝たり、王たり、又政治家たるものは、一として國家國民の康福を務とせざるものなし。日本歴代の詔詞などに、諸天皇の意と爲し玉ふ所は「人民の利」なり、「百姓を安養することなり」、「天下の安樂を保つことなり」、「人民の快樂を得しむることなり」、「性命を全うせしむることなり」、「國家の隆昌」なり、「國民の慶福」なり。——これ功利主義にあらずや。

誰か云ふ、功利主義は卑しむべき主義なりと。吾人は之に反して云はん、功利

主義は道德の諸主義中、其最も高尚なるものにして、諸聖人皆これを説き、之を實行したり、此主義に反するものは聖人に非ずと。故に知るべし功利主義に反せるカント者流は決して聖人たるの資格なきものなることを。

巽軒井上先生より美酒を贈られし時に

君をことほぎ、いざや我

此杯をさし上げてん。

少名御神よ、我思ふ

人を豊饒ぎほぎ給へ。

(明治二十九年の頃)

日本歴代諸天皇の功利主義 を讚美し奉る

「夫れ大人制を立つ、義必ず時に隨ふ。苟も民に利する有らば、何ぞ聖造に妨げん。」(神武天皇)

「惟我皇祖諸天皇等の宸極に光臨し給ふは、豈一身の爲めならんや、蓋し人神を司收して、天下を経綸し玉ふにあり。故に能く世々玄功を聞き、時に至徳を流き玉ふ。」(崇神天皇)

「朕四海に君臨して百姓を撫育す。家の貯財人の安樂ならんことを思欲す。」(元正天皇)

「兆民快樂にして、十萬の有情同しく此福に霑はん。」(稱徳天皇)

「朕國家の隆昌と臣民の慶福とを以て中心の欣榮とし。益々國家の丕基を鞏固にし、八洲民生の慶福を増進すべし。」(明治天皇)

成○ら○ん○限○り○多○數○の○人○を○し○て○成○ら○ん○限○り○の○多○く○廣○き○幸○福○を○得○し○め○ん○と○す○る○事○
に○し○て○惡○事○な○り○と○せ○ば○功○利○主○義○は○惡○倫○理○主○義○な○る○べ○し○。若し果して然りとせ
ば、其判断者は、古來の聖王及び大政治家等の天下國家に幸福を與へたることは、
亦最も惡しき事と云はざる可からず。然るに世豈に此くの如き斷定を下す者
あらんや。否々世に此くの如き斷定を下し、天下の多數の人に、最大最廣の幸福
を與へんとするものを惡しとなす所の論者これ無きに非ず。實に奇怪と云ふ
の外なし。功利主義に反對せる學者は是種の人なり。
功○利○主○義○の○精○神○と○せ○る○所○は○最○大○數○の○人○を○し○て○最○大○幸○福○を○得○し○め○ん○と○す○る○に○あ
り。然るに功利主義に反對なる學者は此廣大なる善良なる主義を惡しとなす。
吾人實に之を怪しむ。意ふに彼等が功利主義に反するや、種々の誤解に基づく
ものにして、彼等は功利主義を以て

(一)利己主義、我欲主義と混同して誤解し

其精神を以て下等なりとして卑しむに由るあり、又た倫理の行爲上、

(二)其精神は問ふことなく、只結果のみ利なれば善しとするものと誤解せる

に由るものありて、此二箇の主要なる誤解が、世人をして、功利主義を誤解せしめ、功利主義の高尙偉大なる精神を有し、最大数の人々の爲めの幸福と云へる最大の愛情及び善意志を包藏せるを覺らざらしめ、功利主義は情なく愛なく、乾燥無味にして、結果の利得のみを計算する私欲主義なりと思はしめたり、これ哲學及び倫理學史上の最大なる誤解にして、徒らに功利主義者の好意を無にし、其學理を埋没せしめ來れり、これ實に腐儒の爲す所。腐儒の學問を誤り、世を誤る決して少々に非ずとせず。吾人之を惡む。

余前きに「古來聖哲は皆功利主義なり」と題して神農、黃帝、堯、舜、禹、管子、晏子、孔子、孟子、荀子、墨子、其他古來聖王、哲人、大經綸家と稱せらるる者は、盡く功利主義なることを言ひ、功利主義の精神の高大にして決して、世俗の誤解せる如きものに非ざるを明かにせり。余は今亦た茲に日本歴代の諸天皇の功利主義の偉大なる精神を獎勵し玉ひしを明かにし、之を讚美せんと欲するなり。

元來人性の好む所のものは何ぞや、曰く快樂、或は幸福なり。之れに達せんとして人事種々のもの生ず。道德なるものは、素より個人の快樂を得しむる所の

方法には非ずと雖も、社會全體の幸福を妨げず、反て之を増進せんとする精神のものにして、決して道德なるもの其の物が道德の目的には非ざるなり。されば人間の最大數をして成るべく、多くの快樂幸福を得しむるを以て精神とする所の功利主義は、最も倫理の主義として高尙にして、又た廣大なる着眼を有するものと云はざる可からず。吾人は日本歴代諸天皇の精神とし玉ひ、常に詔り玉ふ所を見るに、又た必ず功利主義なるを知る。

人性の好む所は快樂にして、其性を完ふせしむるは、これ功利主義の心とせる所なり。故に功利主義は人を愛し、人をして其思ふ所を得しめんとする愛情的現象なり。實に天皇及び神々の人を愛し玉ふは、日本人に取りては事新しく云ふの要なし。その愛し玉ふや人々の幸福を得しめんと力め玉ふなり。繼體天皇の「立皇后詔」中に云へるあり、曰く。

「天黎庶を生し、樹つるに元首を以てし、助養を司らしめ、性命を全うせしむ」と。まことに天に享くる所の性情を完ふするを得ば、これ人民の幸福なり。人をして幸福ならしめんには、成らん限り性情の満足を得しむべきなり。天皇の

此詔勅ある、豈人民をして快樂幸福を得しめんと爲し玉ふものに非ずや。

歴代諸天皇は、人間の終局の目的とせる所或は人間性情の最も求むる所は、『幸福』『快樂』『雍熙』『太平』なりと觀じ玉ひ、人民をして、是等を得しむるを以て其心となし玉へり。桓武天皇『賑恤詔』中に云へるあり、曰く、

『朕四海に君臨すること、茲に七載、未だ含生の民をして、共に淳化に洽からしめ、率土の内をして、咸な雍熙を致さしむること能はず……』

と。『雍熙』の語は尙ほ此他の詔勅にも用ゐらる。雍熙とはこれ人民の和睦し、欣欣然として生息し、最も幸福の状態に在るものなり。淳和天皇の『賑恤詔』中にも亦曰く、

『前略』群黎を富壽に登し、陶風湛化、一代の雍熙を致す……』

と。一條天皇も亦『康寧』の語を用ゐ玉ふ。これ後嵯峨天皇の理想とし、心に親ら望み玉ひし所の

『此君の御代かしこしと吳竹の

末々までもいかでいはれむ』

とあるの意にして、苟も上に立ちて下を治めんとする心ある以上は、必ず人民の康福安樂を望むは當然たるのみ。これ豈功利主義の理想とせる所にあらずや。元正天皇の詔勅に曰く

『朕四海に君臨して百姓を撫育す。家の貯積、人の安樂ならんことを思欲ふ』

と。安樂はこれ人間の幸福の大なるものなり。一種の小倫理學者等は、『幸福』及び『快樂』等を以て下等なるものなりとして之を卑し、高尚らしき言語を以て、道德は道德の爲めに行へ、義務は義務其物を目的として行はざる可からずと云ふと雖も、道德及び義務其物には、積極的實質的價值あるに非ずして、道德の目的或は用は、道德以外に存し、人民の幸福或は雍熙は即ち人間の眞の目的にして、道德も之れを與ふるを精神と爲せり。幸福焉んぞ卑しむ可けん。これ人性の求むる所の眞の價值あるものなり。快樂何ぞ下等なりとせん、其種類一にあらす、何ぞ一概して下等なりと云ふべけんや。之を以て、稱徳天皇は

『兆民の快樂』

なる語を以て、人民の快樂を得ることを希望し玉へるなり。實に人民快樂に生

活せば何物か又た之に加へん。諸天皇が人民を愛し玉ふ所の其愛の情を實にせるは、人民に快樂を與へ、幸福ならしむるにあるべし。幸福を與へ、快樂を與ふ、之れを稱して、民を利すると謂ふ。「利」の語に就きては小倫理學家又々異議を挿みて、以て下等なりとなすと雖も、何ぞ下等なりとせん。人を利益するは幸福を與ふるの大方なり。若し只だ人を愛するのみにして、同時に利することなきに於ては、其愛情は無益に終るべきのみ。中空的なり。愛情の愛情たる價值なきものなり。苟も眞に人を愛せば、又た從て之を利するか、或は之を利するの意志、或は感情を有せざる可からず。之を以て歴代の諸天皇は、皆人民を利することを心となし玉へり。神武天皇の詔に曰く

「夫れ大人の制を立つるや、義必ず時に隨ふ。苟も民を利するあらば、何ぞ聖造に妨げん」

と。其「義必ず時に隨ふ」と云ひ、又た「苟も民に利するあらば」と云ふが如き、全然これ功利主義の學說の唱道する所にして、善惡施設の時に應じて變化して可なるを云へる者に非ずや。李斯が「五帝相復びせず、三代相襲らず、各々以て治む

其相反するに非ず、時の變異するなり」と云へるは、正しく、此意味たるなり。後一條天皇の

「利世の方」

と詔し玉へる、亦たこれ世を利するを善と見玉へるを知るべきなり。利何ぞ之を卑しむべけんや。人を利し、世を利す、これ至高の行爲にして、王者の心とせる所、又た功利主義の倫理學者の善として天下に唱ふる所以なり。諸天皇の

「利世」「利民」

を云ひ玉ひて、

「利」

を發言し玉ふこと此くの如し。而して吾人は吾人の主義を稱して「功利」學派と云ふと雖も、小倫理學者は「利」を卑しみて同時に「功」をも卑しまんとす。されども、「功」何が故に卑しきか、吾人は「功」と「利」とを云ふ。崇神天皇亦「功」を謂ひ玉ふ曰く

「惟我皇祖諸天皇等の宸極に光臨し玉ふは、豈一身の爲めならんや、蓋し人神

を司牧し、天下を經綸する所以なり。故に世々、玄功を闡き、時に至徳を流く」と。人神を司牧せんとして「玄功」を闡き玉ふ。これ人神に幸福を與へんが爲め、其方法を盡くし玉ふなり。人民の幸福に「有功」ならしめんとし玉ふなり。其「至徳」と云ふは、これ其「功」を稱賛、恩謝せるの言語たるなり。實に、黎元を愛育し玉ふ天皇の御身に在りては、人神を幸福ならしめんが爲めには、其方を盡くし玉ふは、吾人臣民の感謝すべき所たるなり。「功」の價值大なるかな。諸天皇は「功」を云ひ「利」を云ひ、「幸福」を云ひ、又た「快樂」を云ひ玉へり。

人間の幸福を組成するものは、素より一定せるに非ずと雖も、概して之れを云はゞ衣食住を完全に以て富壽ならしむるにあり。此に於て各人財産に富むを要す。元正天皇の敕に曰く、

『國家の隆泰は、要するに民を富ますにあり。民を富ますの本は、務めて貨食に従ふ。故に男は耕耘を勤め、女は紝織を脩す。故に衣食の饒ありて人廉恥の心を生ず。刑錯の化爰に興り、太平の風致すべし』
と。嵯峨天皇の詔も亦曰く、

『天黎元を生じ、之れが司牧を樹つるは、財を阜かにし、用を利し、天下を化成する所以なり』

と。財を阜かにして用を利するは人間幸福の要件となす。又た「責吏敕」に曰く

『治國の要は民を富ますにあり。民其蕃あらば凶年は防ぐ。禹水九年、人飢色なし。湯早七歳、民業を失はず』

民を富ますはこれ民を康福ならしむるなり。諸天皇の聖旨は實に人民に幸福の基礎を得しめんとし玉ふにあり。富を得んには人皆勤勉ならざる可からず、此に於て勤勉を勤め玉ふの詔あり、繼體天皇の詔に曰く

『朕聞く士當年にして耕えざる者あらば天下或は其飢を受けん。女當年にして績がざる者あらば天下或は其寒を受けん』

と。此くて古代の諸天皇が農を勤め、或は池溝を掘らしめ玉ひしが如きは全く人民をして成らん限り幸福を受けしめんと爲し玉ふ根本的精神に非ずや。

高き屋に登りて見れば烟立つ

民の竈は賑ひにけり

との歌は、實に仁徳天皇の、人民の殷富幸福を思ひやりて歡喜し玉ふ御心を詠みしものなり。幸福は人性の求むる所なり。功利主義は成らん限り最大數の人民に成らん限りの最大幸福を與ふる所の精神及び行爲を以て善と成す。元正天皇春に當りて京城を巡り玉ひし時の詔に曰く

『朕京城を巡り遙かに郊野を望めば芳春の仲月草木滋榮え。東侯始めて啓けて丁牧隴畝の他に就き、時雨漸く澍ひて蟄蠢溶灌の悦あり』

と。亦これ人民の幸福を悦び聖意を發表し玉ひしものに非ずや。

吾人は實に功利主義の精神の偉大にして、又た仁愛に富めるものなるを言ふ。苟も功利主義を知る者は亦必ず余の言を眞とせん。只世間の小倫理學者等は、高尚偉大なる精神の功利主義を誤解して、又た之を誤解したるまゝに世人に傳ふ。嗚呼成らん限り多數の人に成らん限りの大幸福を與ふるを以て善なりとなす所の功利主義は豈に偉大なる者に非ずとせんや。大政治家、大經綸家及び又た仁愛の帝王等の心とせる所のものに非ずとせんや。

吾人以上に於て歴代諸天皇の、最大數の最大幸福を目的となし玉へるを見た

り。今又茲に明治天皇陛下の聖意を讚美せん。憲法發布の敕語中

『朕國家の隆昌と臣民の慶福とを以て中心の欣榮とし云々』
と。又た『告文』中

『益々國家の丕基を鞏固にし、八洲民生の慶福を増進すべし』

とあるを見るに、國家の隆昌と民生の幸福と、此兩者實にこれ聖意の在る所なるを知る。吾人は其功利主義の偉大なる聖意を讚美し奉り、其人民を愛し玉ひ、又た從ふて利して幸福ならしめんとし玉ふの御心に感泣する者なり。

無からましかば(和泉式部)

- 夕暮はさながら月になしはて、闇てふことの無からましかば。
- おしなべて花は櫻に爲しは、散るてふことの無からましかば。
- 世の中に浮身は無くて惜しと思ふ、人の命を止めましかば。
- 世の中は春と秋とに爲しはて、夏と冬との無からましかば。
- 皆人を同じ心に爲しはて、思ふ思はぬ無からましかば。

ソクラテスの知徳同一論と王陽明の知行合一論を混する勿れ

傳説、武丁に教へて曰く「之を知るの難きに非ず、之を行ふと是れ難し」と。これ普通人々の云ふ所にして、又道德學者等の重きを置いて思考するの問題なり。實に世間博學有識の人にして、尙ほ其學ぶ所を行はず、口に徳義を唱へ、人に之を教へて而かも躬自ら之を實行せざる者あるは、吾人の日常目撃するの事實なり。然るに意外にも言をなす者有て曰はん「人若し徳義を知ると雖も尙之を行はざる者あるなり」と。吾人若し之に問ふに「人若し徳義を知ると雖も尙之を行はざる者あるは其理如何」と云は、彼答て曰はん「是知らざるなり、知て行はざる者は未だ之れ有らざるなり」と。此説を爲す者は希臘の聖哲ソクラテスなり。東洋に在ては明の王陽明又之と同様の語をなして曰く「未だ知て行はざるものあらず、知て行はざるは只だ是れ未だ知らざるなり」と。吾人はソクラテスを知徳同一論者

と呼び又王陽明を知行合一論者と謂ふ。今ソクラテスと王陽明との所言を比較するに、兩人共に其説を同うせるが如きを感じずんばあらざるなり。余は始めソクラテスを研究し後王陽明を読み、此一句を得て忽ち之を以て王陽明が知行合一論の主旨なりと思做し、東洋に於てソクラテスと同説あるを喜びたり。然りと雖も、其喜悅は忽に去て還らざりき。何となれば此兩哲の知行合一論は相一致せりとの斷案は、余が研究の不精密なりし間のことにして、一層精しく攻究して遂に其斷案の誤りしを發見せり。

然るに『宗教』第二十五號に於て文學士立花銃三郎君「知行合一論」を掲げ、四種の部門の下に之を論じ、専ら知行の合一なる點に重を置き、道德及び教育の點を主とせり。其初に知行合一を定解して「智識と行爲とは親密の關係あり、否單に親密の關係あるのみならず合一にして分離すべからざるものなり」と云ふ意見なりと言へり。其の之れを論ずるに當り専らソクラテスと王陽明とに由て之を説明し、ソクラテスと王陽明とは知行合一論に於て同一の説にして「東西古今を隔て、有名なる兩家の間に奇異の暗合あり……二人の説く所其風趣相同

じからず精細又同じからずと雖も其大旨に至ては未だ同一に歸せざるなり」ととせり。

讀者此等兩家の「未だ知て行はざるものあらず、知て行はざるは只是未だ知らざるなり」との語を見て其同一なる點ありと推測し、輕卒にも兩家の知行論は同一なりと想ふ勿れ。素より此一句は兩家同一なるが如しと雖も、王陽明の知行合一論は即之なりと速斷す可からず。王陽明の知行合一論と稱するものは他にあらん。余は始め此句を以て直に氏の知行論なりと思ひ、兩家の知行論は相一致せりとの論文を草せんと着手せり。然るに王陽明を精讀するに及で遂に始めに望みし結果を得ずして「兩説を混同する勿れ」との論を得たり。是即ち立花君の意見と相異なる所以なり。故に今其理由を述べんと欲するや、豫め兩家の所説を明知せざる可からず。故に先づソクラテスより論せん。

一 ソクラテスの知徳同一論

ソクラテスの知徳同一論或は道德實踐の方法たる、其根據を吾人の心理に有

するものにして「人皆自己の善を欲す、若し能ふべくんば彼れ之を爲さん(或は爲す)換言せば、快樂は人必ず之を求め、苦痛は人必ず之を避く」と云ふにありて、快樂及び苦痛を以て行爲の動機となせるなり。此句はこれソクラテスの大前提なり。此大前提あるを以て、若し人をして道德を實行せしめんと欲せば、其方法たる之に示すに道德の善なることを以てするにあり(道德善と私善と異なるものなるをソクラテス觀過せり)人の不徳を行ふは眞正の善の何たるやを知らざるに原因す、もし善と知れば之を求め、惡と知れば之を避く、之れ智者にして即ち徳行家なり、知識は實行と別物に非ずとなす。人若しソクラテスに問ふに「人能く善惡を知ると雖も尙其反對の行爲を爲すあり、之れ智者にして實行家なりと謂ふ可きや」と云はば、ソクラテスは然らずとして云はん「彼等は眞に無學にして頑愚なり、人若し多くの事物中最も自己の利益たることを爲し能ふ時、誰か自己の利益を爲さざるものあらんや、之れ心理的論理的の必然なり、然るに人之を爲さずとせば彼れ無智にして不徳なり」と(セノフオンの「メモ」ラビリア三卷九章)ソクラテス又曰く「正義及び徳義も皆知識なり、何となれば正義及び徳行は善にして賞美すべきものなり。

人若し其善美なることを知らば、何かでか他に之に勝りて樂しきものあらんや。されども其善美なるを知らざる時は、人決して徳行あること無く、又徳行家たらんとも爲さざるべし。只此の知を有せる人のみ能く正義善行を爲すを得るなり。故に正義及び徳行を知識とは謂ふなり」と。又怠惰も無智より來るものなりとして曰く「人は何れの時も必ず或事を爲せるものなり。其骨牌を弄し或は談笑せる時も或る事を爲せるには相違なし。されども其結果や怠惰のみ。然るに人若し自己に善なる事業を爲すときは、彼れ決して善を置きて惡を爲すものに非ず」と。人もし善を知れば必然に徳行家たるべし。故に吾人は善の知識の推究に進まざるべからず、之が爲めに概念定解法、歸納論、辯法及び論辯法等を知るを要す。ソクラテスは此目的と此主義を以て智識的或は論理的教育に向ひたり。今まソクラテスの主義を再言せば「人は自己に善なることは必ず之を行ふものなり(心理的に知行合一の根據を置く)道德は善美なるものなり故に道德の知識あるものは必ず之を實行す」と謂ふにあり。

人は自己の快樂及び善は必ず直に之を實行することは心理的事實なり。故

にソクラテスの大前提は誤り無し。然りと雖も第二前提に至てはソクラテスの誤謬存す。何となればソクラテスは道德上の善惡は萬人普通同一のものなりと認め居るが如きを以てなり。道德上の善惡は決して萬人普通同一のものに非らず、一箇人の善惡と必しも同一なるものに非らず、故に道德上の善惡は必しも我が私の善惡に非ざるなり。我が私の善惡に非ざる以上は、之を行ふに當て感情上或抵抗反對なき能はざる可く、道德の實行必ず可からず。是れソクラテスの誤て觀過したる事實にして、其誤謬の依て生ずる處は即ち是れなり。然りと雖も若し之を許容せば、或限は許容するを得べし、是非とも「知は徳なり」との結論を許さざるべからず。而して「人もし徳義の何たるやを知る時は必ず之を行ふものなり、もし之を知れりとして尙ほ行はざるは未だ知らざるなり」と言はざるべからず。之れソクラテスの知徳同一論なり(ソクラテスの知徳同一論は批評するの價值ありと雖も今は之を省く)

二 王陽明の知行合一論

ソクラテスの知徳同一論は、其實、知徳繼承論とも謂ふべきものにして、知は前在して徳之に繼起すと説く。王陽明亦知行合一論をなす。然りと雖も其説く所はソクラテスと異にして、其名稱の示めせる如く知行合一論にして知覺と行為との同時的否事を知るは行為後に生ずとなすの説なり。余は王陽明の知行合一論とソクラテスの知徳同一論とは異ると云へり。然るに吾人は其同一なるを認めざるを得ざるが如き點なきに非ず、何となれば人々がソクラテスに向て問ひたると等しく、弟子王陽明に問て曰く「人父に孝すべく兄に悌すべきを知る者あり、卻て孝なる能はず、悌なる能はず、便ち是れ知行分明是兩件」と。王陽明答て曰く「此れ已に私欲に隔斷さる、是行の本體を知らざるに了る。未だ知て行はざる者あらず。知て行はざるは、只是未だ知らざるなり」と。之れ吾人が王陽明とソクラテスとを同一と見ざる能はざる所なり。然りと雖も之れ王陽明の所謂知行合一論に非るなり。

吾人は往々外形的の感情に迷はさるゝものにして、王陽明の徳行を重んぜる所より其議論の目的亦此處に存せりと思はん、されども實は然らざるなり。ソ

クラテスは知識を重せるを以て、其目的は知識にあるが如きの感なき能はず。然りと雖も之れ全く反對にして、ソクラテスは徳行の爲めに知識を求め、王陽明は知識の爲めに徳行を言ふ。「知是れ行的の主意、行是知的の工夫」とは王陽明の主意にして、其の目的は徳行に非ずして知識にあり。此く言はゞ人或は奇異の感を爲すものあらん、然りと雖もこれ王陽明の論旨なり。曰く「天下の學を盡くして行はずして以て學を言ふものあらんや、學の初めは素より已に即是れ行なり」と。王陽明の論たる、知者たらんとするは大目的にして、徳行は其方便として之に依らしめ以て知行を合一せんとせしのみ。蓋し王陽明の意味せる所の知とは、單に、架空の講説に非ずして、人已に孝を知り悌を知ると稱するが如きは、是れ其人必ず曾て己れに孝を行ひ悌を行ひて、方に孝を知り悌を知ると稱するなり。只是れ些孝悌的話を説くを曉り得て、便ち孝悌を知るとなさず……知行如何ぞ分割するを得ん」とす。故に「知の真切篤實の處は、即是行、行の明覺精察の處は、即是知、知行の工夫本と離る可からず」「知は是れ行の始、行は是れ知の成れるなり」と。これ知識と實行との關係を云ふに非ずして、知覺は實驗より來ると

言ふのみにして明瞭なる知識を得んと欲せば其の事を實驗知識せよと云ひ、敢て道德の爲めに之を云ふに非ず。ソクラテスは善の知識は善の行爲を生ずとなし以て知識を求めたり。然るに王陽明は知を得んが爲めに行爲を言ふのみ。ソクラテスは知識は行爲の前に有て吾人に善を示し、理を以て吾人を導くと云ふと雖も、王陽明の道德は斯る主意に非らず、其知識は行爲後或は同時に生ずと云ふ平行的事實を謂へるのみ。王陽明の知行合一論を概言せば、知識の爲めに實行すべし、實驗無きの知は眞知に非らずと云ふにあり。王陽明の知行合一論はソクラテスの如く道德上有効たるべき論法を有せざるなり。

余或時此意見を某友に語る。某曰く「王陽明は此くして得たる所の知は單に知に止めず、此知よりソクラテスの論を爲すに非ずや、知て行はざるものならず、知て行はざるは未だ知らざるなり」との言あるは如何」と。然り之れソクラテスと同意味なりとするも之れ王陽明自ら知行合一の名を與へざりしものなるなり。故に之を以て合一論の題下に論ずると能はず、且つ王陽明此思想に重を置かず、故に説明をも下さず、直に進で知覺的の知を説く(前記の如し)。是に由て

之を觀るも、此語は王陽明の知行合一説に非ざるや知る可きなり。兩家の所説斯く異なるのみならず、王陽明はソクラテスの方法を攻撃し、ソクラテスは講習討論し去つて知的の工夫を做し、眞知を得るあらば行爲自然に生ずとなすも、此の如きは遂に終身行はず亦遂に終身知らず、之れ少き病苦ならんやと反對せり。兩家の知行合一論豈同一に論下すべけんや。

王陽明の知行合一論尙更にソクラテスと異なる者あり、之れ實に王陽明の宗旨とせる所なり。曰く「我今知行合一を説くは正に人をして一念の發動する所便是行成り了るを曉知せしめんが爲めなり」と。イエスが「女を見て色情を起す者は心中既に姦淫を行へるなり」と云へるに等し。陽明又曰く「一念發動の處不善あらば就て這不善の念を將て克く倒して根に徹し底に徹して、那の一念の不善をして潜伏して胸中にあらしめざる是れ我立言の宗旨なり」と。是に至り其宗旨の道德的價値の益々大なるを見る可きも、此を以て知行合一を謂へりとせば、前後矛盾を免れざるなり。蓋し王陽明にして是を眞の知行合一の宗旨なりとせば、他の之れに契合せざる言語も亦氏の非知行合一論と云ふ可く。ソク

ラテスの知徳同一論とは決して同一に非るなり。
 王陽明知行論内部の不一致此の如く又ソクラテスと異なること此の如し。
 然るに猶之を以て同一なり符節を合するが如しと獨斷するに至ては其の粗漏も亦太甚しと謂ふ可し。而して立花氏は「知て行はざるものあらず云々」及び「知の真切の處即是行の明覺精察の處即是知」との全く異なるものを以て、直に何の區別もなく列記して同一なりと速斷せり。

三 尙ほ細評せん

余は之れより更に進んで氏の本論に入り、少しく批評する所あらんとす。氏の第一心理學上の考察中再びソクラテスを引用し、その「汝自己を知れ」との語と、王陽明の「天下又心外の事心外の理あらんや」との語を並記し、兩家同一の思想を以て「自家心相上に苦慮精察を費したる主觀的思想家なり」とせるが如し。王陽明は自家心相即ち主觀的考察を爲したる人なり、これ唯心論を執れるを以てなり。然るにソクラテスは唯心論者に非らず、只だ常識的に自己の力量を知

れと言ひしのみ。決して陽明の如く思考的なれ主觀的なれと云はざりしなり。ソクラテス、エウチデムスとの問答に曰く「人能く自己の何事に適せるやを檢省するに非れば、未だ以て自己を知るものと云ふべからず」。エウチデムス曰く「然り自己の力量を知らざる者は未だ自己を知らざるものなり」と(メモラベリ、ア四卷二章)。之れ決して陽明の如き空漠たる論に非ず、又主觀的にも非ず。王陽明は物理に格る外物研究を以て外となせる人にして、甘泉が論じたる如く、之れ自ら其の心を小にするものなり。もし王陽明の言の如く世界も唯心の作用とせば外界も我心にして外界の研究は自心の研究に外ならず。王陽明の唯心論は然かく完璧なるものにあらずして彼の通俗平凡の唯心論(禪學の如き)を採用せるが如し。然るにソクラテスは此る精神に非ず、只常識を以て自己を知れと言ひたるのみ。兩語決して同一に云ふべからず、又是等の語と、立花氏が定解したる所の知行合一とはさまで關係なきが如し。

立花君は知行合一の本領は倫理上にありとなし、此の點に心を用ひられたるが如く、此部分に於ては議論一層丁寧明瞭なるべきを希望せり。然るに論議益

益模糊として一步は一步迷路に入るの感あり。氏が此處に執れる所の知行同一論は、或はソクラテス的なるか、或は王陽明的なるか殆ど知るべからず。さればとて氏が特に定解したる知行合一論にも非らず、只だ何となく知行合一と云ふ言語を辯護せるが如し。第一調和に付て曰く「人心の構造は常に調和を理想とするが如し、今もし内知外行一致せずんば、吾人一身上に於て既に調和を得たりと云ふ可からず」と。内知外行一致せずんばとの語は知行別在し得る意を包むの語なり、且つ人心には必ず調和存せざるべからずとの理由も決して發見し得られざるなり。従つて知行必合一との理由ありとも謂ふべからず。又「心相は皆な調和して發達するを要す」との語は明に知行合一無きの状態を示し、調和とは只理想的要求なるを示す者に非ずや。君の辯護せる王陽明の言の如く「懣々懣々意に任せて做去りて冥行妄作する人」と「茫々蕩々空に懸り思索し去て肯て著實躬行せざる人」と此二種の人あるは知行別在し得るを證するに非らずや。氏は第二統一に付て曰へらく「若し此統一と尊嚴とを欲せば知行合一説を廢すべからず……」と。嗚呼余の不才、立花君の言の何たるやを察知すること能はざ

るを悲む。氏は知行合一の語を濫用せるものなり、何となれば知行合一とは「知行は親密の關係あるのみに非ず、合一にして分離すべからずとの意なり」と定解せり。然るに「此統一と尊嚴を欲せば知行合一……」と言へるが如くんば、人もし之を欲せざれば知行合一なるを要せざるなりと云はざる可からず。然らば知行は必ずしも合一するものに非ずして合一すると合一せざるとは吾人の欲するに欲せざるにあり。豈これを知行合一と謂ふ可けんや。氏は第三に満足に付てと云へる節中に曰く「今もし知行一致せずば知は知に於て安んぜず、行は行に於て安んぜず……」と。是に至ては氏の言益々何を意味せるやを解す可からず。氏は知力上の快樂眞理の「コンテンプレーション」「エクスタシー」或はスピノザの神知の喜悦を知らざるか、何ぞ知は知に満足せずと言ふや。又小動物の天性を見よ、彼等自性の儘に行爲して以て自性を完ふす。而して敢て其の何の爲めに爲すやをも知らざるなり。吾人無意識の行爲をなすこと無きに非らず、されども行は行に於て安んぜざる所何處にかある。立花君の言果して何の意味する所ぞ。

氏は又進で曰く「知行合一論者は性善説を唱道す」と。余は心理上に於てソクラテスの知行同一論を探ること無きに非ず、然れども未だ必しも性善説を爲すを要せずと信ず。性そのものに善惡の名稱を付するは嗚呼これ何てふ道徳哲學ぞ。されど立花君は知行合一論を爲す人なり、故に性善論者ならん。氏は再び荀子の性惡説を呼び起さんと欲するか。性は自然のみ、之に善惡の名を付す、余其の論法の如何なるやを知らず。

氏は教育上の考察に於てヘルマン・ケルンの語を引て曰く「教授は沈靜なる無用の識見を生ずべからず、必ず執意に移り行爲に發する識見を生ぜざる可からず」と、然るに此語たる、氏の尊敬崇拜者として本論中にすら六度まで呼び出されたるジョン・デューエーの言と衝突矛盾するにあらずや。デューエー曰く「吾人は理論と發見とに於て、人と自然との一致を確め得て始めて自己の知識を廣く且つ確かなる地盤上に安んずべし、是れ學術技藝を道徳的價值ありとする終極の辯護なり」と。デューエー氏は如何なる知識なりとも皆道徳的となすを得として之を受納せんとし、ケルンは或物を拒絶せり。是れ衝突矛盾に非ずして何ぞや。

氏は結論に曰く「知行合一論は心理上に於ては其根據最も薄弱なりと雖も倫理上教育上に於ては其價值磨滅すべからず」と。されども其倫理たるは教育たるを問はず、何れも心理を離れて獨存し得るものに非ず、心理上に無効力のもの、豈に倫理上教育上に其効あるの理あらむや。

氏の言此の如く實に漠然として雲を握むが如く、首尾一貫せず、議論絶えて聯絡あるなく、支離滅裂讀み了りて其の主旨を得る能はず。然りと雖も、余は知行同一論(ソクラテスの)の道徳上大益あるを信じ、又王陽明が明確の知を尊びしをも善なりと認む。されども兩家の知行論は決して同一なりと言ふ能はざるなり。(明治二十六年十二月宗教)

プラトーンの美少年論

—戀愛と美との向上—

一 プラトーンと美少年

青年を愛することソクラテース及プラトーンの如きは蓋史上に少なかるべし。プラトーンは常に其師ソクラテースの名を籍りて自己の學説及び意見を述ぶるを以て、其のソクラテースの説きしと爲せる所は、實は大抵プラトーンの説たるなり。然りと雖も、ソクラテース及びプラトーン兩賢哲が常に青年を愛し、又た美少年を悦びしは事實なり。さればプラトーンの著書中にソクラテースに關せる事として記せる部分も、吾人はこゝに又た之れをプラトンの意見なりと視て可なるべしと信す。

プラトーン數々戀愛を謂ふ。然りと雖も、其戀愛や、男女間のものに非ずして、男性間の戀愛なり。而してプラトーンが戀愛を説き、又た美少年論を爲せるや

其書中に少なからず、又たこれ善良高尚なるものにして、決して野卑なるものに非ざるなり。

傳記家デオゲネース・ラエルチウスの云ふ所に由れば、プラトーンは常に美少年説を爲せるのみに非ずして、實際に愛したる美少年ありしもの、如し、其天文學を學習せる時同窓の青年にアステルなるものありき、プラトーン之れを愛したりと謂ふ、又たシリアの専制王デオニシオスの姻戚なるデオーン及び同窓の友フアイドロス等をも愛したりと謂ふ。

余はこゝにプラトーンの美少年の愛を謂ふ、然りと雖も、是れ日本支那希臘及び其他古今世界各地に行はるゝ所の、男性間の肉體關係の戀愛を謂ふ者に非ずして、全然これ精神上の戀愛なることを記せざる可からず。

二 身體美と精神美

プラトーン初期の著述に『ハルミデース』篇あり。これ美少年の名を以つて篇名と爲し、ものなり。其記する所に據れば——ソクラテース、一日ボチダ

ヤ戰爭より歸へりて、公衆運動場に入りて人々と談話せる時、美少年ハルミデース亦其場に來る。ソークラテース其時の狀況を謂ふて曰く「彼の入り來りし時は、滿場驚歎動搖し、其の戀愛者の一群は、彼に従ひて入り來れり。吾等の如き成長したる者が此くの如く感動さるゝは敢て異しむに足らずと雖も、少年者の如きも同じく其美に感動し、幼き小兒に至るまでも、彼れを顧みて、彼れは宛も彫刻せる像なるかの如く思へり」と。希臘の昔、美少年の美が如何に尊敬されしかを見るべきなり、ソークラテース大に其美を稱す。時に人在りて曰く「君若し彼れの裸體を見ることあらんには、其容貌の如きは問ふ所に非るべし。彼れの身體や、實に完全無缺なり」と。

こゝに於てソークラテース問題を一轉進せしめんとして謂ふて曰く「若し些少なる一點を加ふる時は恐くは、他に此くの如き完全なる模範は無かるべきか——即ち彼れ若し高尚なる精神を有せばと謂ふにあり」と。實に「身體美と精神美との合體せる時は、世上美麗なる物の最美のものたるなり(理想國三卷)。時に傍に在りし人曰く「彼れ其外貌の美なるが如く、内心亦美にして善なり」と。ソークラテース曰く「然らば余は彼れに願ひて、其肉體に非ずして其の精神を裸體となし、隠さず飾らず、吾等に示さんことを求めて可なるか。彼れは今や談話を好む年齢に達し居るなり」と。然り、談話はソークラテースが依つて以つて人心美智性美を觀るの一大方法たりしなり。即ちこれ精神の裸體を見るの方法たるなり。

今やソークラテースとハルミデースとの間に談話始まらんとして、彼はソークラテースの側に坐す。滿場大に喜び、各彼れの側に坐せんとして、力の限りに押し合ひたり。此くてハルミデースソークラテースを見つめて質問する所あらんとするや「其容貌の美形容すべからざりし」なり。ソークラテース其時ハルミデースの肌を見たり。其時の感を謂ふて曰く「余は圖らずも彼れの衣服の内部を見て、情火熱し來り殆ど堪ふべからざるに至り……一種の獸欲の打勝つ所とならんとせり。されども能く自ら其慾情を制御せり」と。而して論談以つて、ハルミデースに節制を教へたり。

ソークラテース(プラトーン)此く美少年の美を觀、又大に之れを愛せり。然

り。雖も其主眼とする所は、肉體美と共に精神の裸體美を觀、以つて最大美觀を得んと欲するにありしなり。

三 美少年の愛を得る方法

ソークラテース、一日アカデメイオス園よりリュケイオンに到らんとせる時、若かき友人クテシッポス及びヒッポタレースに會ひ、種々の談話の後、愛人問題に及びヒッポタレースに問ふに、彼等の間の愛人の誰なるかを以つてす。ヒッポタレースは美少年リュシスなる者を愛慕せりと雖も、其愛を得ず、クテシッポスは、其事情を知れる者にて、大にヒッポタレースの方法の拙劣なるを謂ひ、其惡詩惡文を作りて美少年を讚美し、彼れのリュシスを呼ぶ聲の爲めに、時には睡眠を破らるゝことにありとなし、其詩文の吟誦や拙の拙の拙を極むる由を語れり。

ソークラテース之れを聽きて、ヒッポタレースに向つて、其方法の誤れるを説き、美少年の愛を得るまでは、決して其を讚美すべからずとなして、誨へて曰く「賢き戀愛者は、其意中の人の愛を得るに至るまでは決して愛人を頌美せざるなり。」

り。是れ時に失策の偶然あるを恐るゝに由る。されども尙他に一の危険ありとなす、即ち若し戀愛者にして、愛人を稱賛して、之れを増長せしむる時は、彼は自負心と傲慢とを生ずべし、然らずや。其自負傲慢の増長したる後に當つて、之れを捕獲するは、一層の困難を増すに非るか。若し戀愛せる者は、之れを宥めずして、却つて言語を以つて、或は詩歌を以つて其氣を昂揚せしむることありとせば、彼れや最も機才なきものと謂はざる可からず」と。ヒッポタレース、其方法の誤らんことを恐れ、ソークラテースに、意中の人の愛を得るの方法を教へんことを請へり。ソークラテースに於ては方法多々あり。

ソークラテース是れを用ゐて、老人も、成人も、青年も、美少年も、亦美人をも之れを自己の周圍に朋友として集めたり。テーパーイ人シンミアス及びケベースの如きは、遙々他國よりソークラテースを慕ひ來りしなり。

プラトーンの「リュシス」篇は美少年リュシスを題として「友情」を論じたるものなり。

四 美少年を愛する目的

美少年アルキピアデースは、ソークラテースの愛する所なりしとは事實なるが如し。其ソークラテースがアルキピアデースを戀ひしか、或はアルキピアデースがソークラテースを戀ひしかに就いては、二傳の記する所趣を異にせり。二傳とは、一は『宴會』篇にして、他は『アルキピアデース』前篇なり。前者はアルキピアデースが戀ひ、後者はソークラテースが戀ひたりとなす。今順次に兩者の傳ふる所をこゝに記述すべしされどもソークラテースの如き聖哲が戀ひし所の、アルキピアデースなる美少年は、果して如何なる者なりしぞ、必ずや、聖哲の愛を向くるに十分の値ありし美少年ならざる可からず。

然り、アルキピアデースは當時アテーナイ市中第一等の美少年たりしなり。プラトーンの『プロタゴラス』篇に言へる所に據れば、或ときソークラテースの知人、ソークラテースに向つて「君は決して彼れに優れる美しき者を、此アテーナイ市中に見出だすこと能はざるべし」と言へるに由つても、アルキピアデース

が如何にアテーナイ市中第一等の美少年なりしかを知るに足る可し。

アルキピアデース、紀元前四百五十年頃アテーナイに生る、父は有名なるクレイニアスにして富有且つ名族なり。父のコロネアに戦死せし以來親戚の縁故を以つて大政治家ペリクレスの家に寄りてペリクレス後見人たり。後ソークラテースの門人となり、後政界に入りて過激黨の首領となり、或は數度外戦の將となりて、或は成功し或は失敗し、後遂に外國に客死せり。其門地と美貌と、才能と意志の強固と、無規律放縱とを以つて天下に有名にして、其善行よりも寧ろ悪行の方を多しとなす。然りと雖も、活動不休敢爲決行の性質に至つては、實に匹敵する者なく、確かに當時の一大人物たりしなり。ソークラテースが彼れの青年時を愛したるは決して其着目を誤らざりしなり。

アルキピアデース、素より敢爲決行放恣の性なりと雖も、其意志の強固なりしは、大に將來の有望を示めたり。元來人物なるものは、惡に強きものは善にも強く、惡を爲し得ざるものは、又た善をも爲し得ざるものなり。ソークラテースは、能くアルキピアデースの人物を知り其敏捷にして記憶強く、勇氣ありて、能く

大度に、又た哲學性を有して、身體精神門地孰れも人に優り、後來實に第一流の人物たり得べきの望を屬し居たりしなり。

故に『理想國』篇中、暗にアルキビアデースを謂うて、「此くの如き性質の者の内より、最大害惡の人を出だし、墮落する時は、又た若し善良なる方向に趣く時は、最大善行の人を出だす。若し夫れ小人物の如きに至つては、國家にも個人にも、何等の大事をも爲し得る者に非ざるなり」と。

美少年アルキビアデース、實に此くの如きの人物たりしなり。天下の英才を得て之れを教育し、有益善良にして、第一等の人物と成さんと欲せるソークラテースが、之れを戀ひしは、素よりこれ當然のことにして、聖哲の目には、此くの如き稀有の才能と意志と身體とを有せる者は、實に貴重なるものにして、ソークラテースは、アルキビアデースの此強固なる意志の力を見込みたりしなり。

『アルキビアデース』前篇の記する所に據れば、一日ソトクラテース、途にアルキビアデースに會ひて謂ふて曰く、「余は最も始に君を愛し、最も終に君に此情を語るものなり。君必ずや之れを異しまん、されども是れ今日に至るまで、神命あ

りて之れを禁止せしを以つてなり。今や其禁止は解かれたり。從來君を戀愛したる者少なからざりしと雖も、其餘りに君の傲慢にして自負の甚しき爲めに、彼戀愛者等は、盡く君より去りしなり。然るに只余のみは、今に至るも君を棄てざるなり、君其理由を知れるか」と。アルキビアデース答へて曰く、「余は君に其事を問はんと思ひ居たり。君は常に余の到る處に附きまるとへり、君の余に對して爲さんと欲する所は何ぞや、願くば之を聽かん」と。此に於てソークラテースはアルキビアデースの大望あり、國家の政治に干與し大に爲す所あらんとするの心事を推測し、アルキビアデースの尙ほ年若く、教育經驗の足らざることを指斥し、彼れの自負心を撓き、「自己を知る」の必要を説き、苟も大事業を成さんと欲するものは、金錢に非ずして、徳義を求むべきことを語り、政治の根本は善惡正邪の知識にあり、此知識なきものは、外交にも内政にも、平和にも戦争にも決して眞の政治家たり得ざる者なることを言ひ、アルキビアデースが果して是等に就いて明晰なる知識を有し、又た果して能く「自己」を知れるかを詰り、有爲の人物たらんと欲せば、勤勞と習熟と、換言せば教育の必要を言ひ、善良なる戀愛者ありて監督

後見するに非ずんば、決して成功することあらざるべきを告げ、且つ曰く「人若しアルキビアデースの身體のみを戀愛する者あらんとも、彼れや眞にアルキビアデースを愛するものに非ず。君の靈魂を愛する者こそ眞に君を愛する者と謂ふ可けれ。かの身體の戀愛者は青年の花凋む時は、直に之れを棄て去ると雖も、靈魂を愛する者は、苟も靈魂にして徳義を守る以上は、決して見棄つるものに非ず。此に於て君は其最上のものを熟考せざる可からず。實にクレイニアスの子たるアルキビアデースの戀愛者は唯一人之れ有るのみにして、他に決して之れ有る無く、又有らざりしなり。而して其一人の戀愛者は最もアルキビアデースを愛せる者にして、ソフロニスコスとフアイナレテとの子なるソークラテースなり」と。學者の説に據れば、此時ソークラテースは三十九歳にして、アルキビアデースは漸く二十歳頃なりしと謂ふ。

ソークラテース言を續げて曰く「余が君を愛するや、君自身を愛するものなりと雖も、他人は然らずして、君に屬せる物を愛するなり。君の容貌の美は、是れ君自身に非ずして、君の眞我の發育するに際して凋落するものなり。君若しア

テイナイの人民の爲めに腐敗醜化さるゝに非る以上は、余は決して君を棄てじ。たゞ余の危む所は君はアテイナイ人民の寵兒となり、彼等の腐敗する所となることこれなり。従來アテイナイの高尙なる人物にして、民衆の爲めに腐敗されし者寡しとせず。故に君は民衆の甘言諛辭に注意せざる可からず」と。以つて、一切活動の根本たるべき正義の知識を得、「自己」を知るを得て、彼れの企圖せる所を行はんと欲せば、ソークラテースの援助に依らざれば、決して能はざること

を説けり。實にソークラテースの英才を愛せるや、至れりと謂ふべし。

此に於て尊大自負のアルキビアデース、大にソークラテースの誠意に感じて曰く「余は君の言に同意し、且つ吾等の關係反對となれりと言はん。今より後、余は君に隨従すること、従來君が余を追跡したる如く爲し、余は君の門弟子となり、君は余の師たるべし」と。ソークラテース曰く「そは妙なり、我れの愛は他の愛を解化したり。余は宛も鶴鳥の如く、余の解化したる兒鳥を愛育せん」と。是よりアルキビアデースはソークラテースを戀愛することゝなれりと云ふ。

孟子は英才を得て之れを教育するは、三樂中の一なりとなせり。ソークラテ

ースのアルキビアデースに對する情は正に是れなり。ソークラテース、然り、プラトーンの美少年戀愛主義の精神と目的とは、實にこゝにあり。

五 美少年の戀愛の効益

偉大なる精神のものが美少年を愛するは、之れを教育指導して、有爲の人物たらしめんとするにあり。ソークラテースのアルキビアデースに於ける關係是れなり。又假令大教育を美少年に加ふることを得ずとするも、尙ほ年長者たる戀愛者が、己の愛する美少年を保護し、不良の誘惑より之れを衛り、成らん限り善良有徳の人間たらしめ、終生共に幸福の途を歩まんとする精神は、高尚なる美少年戀愛主義の憲法なるが如し。プラトーンの『宴會』篇は愛廣き意味の讚美演説を主旨とせるものにして、青年の愛、男女の愛及び其他絶對美の愛等を論ぜり。篇中フアイドロスなるもの『愛』の神、男性なり、エロースと謂ふの最も古き神なるを謂ひ、愛の功益を説きて曰く――

「彼れ(愛の神)は單に年長者なるのみに非ずして、又吾等に取つて最大利益の

源泉たるなり。何となれば今や生活を始めんとせる所の青年に取つては、有徳なる愛者より善きはなく、又た愛者に取つては、愛人より善きはなかる可ければなり。人苟も高尚なる生活を爲さんとするに當り、其の嚮導者となすべき法則を固く吾等に扶植する所の者は、余は言はん、親戚も名譽も、富有も、或は其他の動機も、決して愛に優らざるなりと。余の言はんとせる所は何事ぞ。曰く、名譽、不名譽の感、之れなり。此感なき時は、國家も個人も決して善良偉大の事業を成すこと能はざるなり。余は言はん、若し愛者にして不名譽なる行爲を爲し、又は人の已に不名譽を加ふるに當りて、卑怯にも、其れに降伏するが如きことの看破さるゝときは、其父、其友、或は其他の人に由つて看破さるゝよりも、其愛人に看破さるゝは、一層の苦痛を感じるものたるなり。又た愛人たるものも、或不名譽なる位置に在るを見らるゝ時は、其愛者に對するや、又同一の感あるなり。若し一種の國家、或は軍隊を組織するを得べき方法あらんには、愛者及び愛人を以て之れを組織すべし。然らば、彼等一切不名譽の事を避け、互に名譽を競ひ、以つて自國の善良なる政治を爲すべきなり。而して一旦事あるに當つては、愛者愛人相携

へて敵と戦はば假令兵數少しと雖も名譽上の勇氣は以つて萬人に敵することを得べし。何となれば愛者なるものは自己の守るべき所を守らず或は武器を棄て、逃るゝを萬人に見らるゝとも之れを愛人一人に見らるゝことを好まず其卑怯なる所行を愛人に見らるゝの苦痛よりも寧ろ彼れ幾千度と雖も死することを撰ぶべければなり。誰か危急に際して其愛人を棄つる者あらん。此くの如き場合に於ては極めて卑怯の者と雖も感奮せる英雄となり最も勇敢なる人と同等となるべし。實に愛は能く人を感激せしむ。ホメーロスの言へるが如く神は其勇氣を英雄の胸中に鼓吹し又た其愛を愛者に吹込むなり」と。又たトロヤ戦争の勇將アヒレウス(美少年にしてグレンシア軍第一の勇者とバトロクロスの關係を述べアヒレウスの貞烈を頌美し)「神々は彼れを尊敬して死後彼れを幸福島に送れり」と云ひ「此他尙ほ愛は諸神中の最年長者たり至高のものたり最大勢力のものたり又た現世の徳義及び死後の幸福の主要なる創造者たり賦與者たりとの證據少なからざるなり」と其演説を結べり……こゝにフアイドロスの謂へる所の愛情とは美少年主義のことゝなす。

六 眞正の愛は男性間のものなり

パウザニアス前記フアイドロスに次いで演説し愛に二種あり——愛の女神プロデテーに二人あり一は年長者にして母なくたウラノス(男神)のみの女にして天のアフロデテーと謂ひ年若き方はゼウスとディオネーとの女にして普通の愛の女神なり。凡て高尚なる愛情は天のアフロデテーより出づるものにして吾等は此女性の分子なくた男性のみより生れたる所の愛を敬禮すしべとなして言ふて曰く天のアフロデテーの子は女性の分子なくた男性のみより生れし所の母より生れたるを以つて其愛やた青年のみを愛するものなり。此の女神は年齢長せるを以て放肆のことあらざるなり。此愛に由つて感動さるゝものは心は男性に向ひ益々勇壯伶俐の性を好み其愛着の性質中純潔なる熱誠を認むることを得べし。故に人々小兒は之れを愛せずして伶俐の青年の其理性の發育を始め又た漸く鬚毛の生せんとする頃の者を愛す。此くの如き者を友とするは彼等に忠實を盡くし一生を彼等と共に送り彼等と共に居り以

つて彼等の無經驗に乗じて之れを欺き、或は彼等と共に痴事を行ひ、或は彼等の一方を他に見代ふる如きことを爲さざらんとするにより凡て善を以つて法則となし——禮儀を正しくし、法則に従つて行ひたる愛情に對しては、一入として悪言するものあらず」となす。

プラトーンの美少年主義は相互の善にあり、特に愛さるゝ所の美少年の善を旨とす。決して肉體を愛し、情欲を満足せんとは非ざるなり。かの世俗の戀愛者が精神よりも肉體を愛するは、これ醜惡にして、彼れ堅固貞操なることなし。何と爲れば不定なる肉體を愛せばなり。彼れの如きはたゞ青年の花をのみ求めむる者にして、若し其青年の花の凋むに當つては、彼れは翼を伸ばして此青年より飛び去るなり。然るに高尚なる精神の愛はこれ不變なるものと一となり、其愛や又た永久なるべし」となす。

プラトーンの美少年主義は、美少年を教育保護せんとするにあり。故に、何人と雖も習慣に従ひて、能く他人の知識或は特科の徳義を進歩せしめんと、の觀念を以つて他人に盡くすことは——余は云ふ、此くの如き任意の勤勞は決して不

名譽と云ふ可からず、又た人の決して阿諛と稱することあらざるべしと。」

パウザニアス尙ほ言を續げて曰く「此くて青年の愛と哲學及び一般徳義の實行なる、此二個の慣習は、一致和合して、愛者は名譽を以つて愛人を樂しむことを得べし。若し愛者愛人一致して、各々其法則を有し、愛者は其能ふ限に於て愛人に愛を盡くすを正理なりと信じ、愛人は其能ふ限に於て自己を賢にし、又た善良ならしめんとする其人に慰勸を盡くすを正理なりとし、此くて一方は智慧と徳義とを教へ、又た他の一方は自己の教育と智慧とを目的となし之を求め、以つて兩者共に各兩者の愛の法則を完うして相一致する時は——こゝに始めて愛人は名譽を以つて愛者に従ふべきなり」と。此くてプラトーンの美少年戀愛主義の、青年の保護と教育とを精神とせるや、一層明瞭となれり。

パウザニアスの次にはエリキシマッホス演説し、其次に滑稽先生アリストフアネース演説し、男性間の愛情の高尚にして、勇壯なるを言へり。アリストフアネース始めに人間に三性あることを謂へり。三性とは男性、女性、兼性これなり。アリストフアネースの作話に由れば、人間は始め四手四足、顔面は前部、後部、二面

ありて、身體球形を爲し、甚だ有力にして神を侮辱すること往々之れ有り。此に於て神は人間の勢力を削殺せんとして球形の人體を兩分して、二手二足、一面のものとなし、一人を二個に別ち、一半のみにては不完全の者となせり。是故に人間互に自己の半身を求む。此の求むるの情はこれ愛なり。而して兼性の人間の兩分されて生じたる人は性質多淫にして、多淫男子及び多情の女子は通常此種の人なり。かの女性の兩分より成れる女子は男子を好まずして唯女子のみを愛す。かの男性の兩分に由りて成れる男子は男子を好み、其若き時は男子を求め、若し彼等成長せば政治家たるべきものにして、又た青年を愛し、自ら進みて女子と婚し、子女の生産を爲すことなし。されども彼等のこれを爲すや、たゞ法律の命に従ふのみにして、若し結婚せずして生活するを得るとせば、彼等は満足し……若し其半部たる一半を發見し得る時は、此一對は親交の驚歎に恍惚として我を忘れ、瞬時と雖も離居することあらずして、其一生を相互の爲めに生活す。若しヘーファイストスの神是等二人を融合して、一體となし、死後、他界に於ても、尙ほ一人の死したる靈魂の如くなすことありとせば、彼等必ず其を喜び、非

常の満足を感じる事となるべし、これ愛なりとなす。

プラトーンの言へる所の戀愛は、常に男性間のものにして、所謂美少年主義なり。プラトーンは「理想國」篇に於ては、男女同等の主義を唱ふと雖も、右に論じたる如き範圍に在つては、必ず男性を尊び、女子の如きは殆ど眼中に置がざるなり。意ふに女子は到底劣等淺薄のものにて、決して男子の如き有爲のものたるべからず。如何に教育指導愛護したりとも、軟弱淺薄遂に大人物たる資質なく、たゞ生殖の爲めのものなるに由るならん。然り。女子は如何に教育したりとも、遂に女子のみ。有爲の教育家は決して女子を眼中に置くとなく、たゞ有爲有望の青年をこそ愛すべきなれ。——此内より大人物出づるなり。女子教育は如何にするとも徒勞の事なり。眞正の大教育家の着眼する所は、あゝ有爲の青年なるかな。ソクラテースのアルキピアデースを愛したる、豈深遠の意味なからんや。

七 美少年の愛と絶對美の愛

プラトーンの「フアイドロス」篇は、美少年の名を取りて篇名と爲し、ものなり——戀愛可否論より。プラトーンの戀愛論(プラトニククラブ)は實に本篇にあり。又たかの世上の文章をあげつらひ、修辭學を云々し、演説を事とせる輩を罵倒して、下等淺薄の人物なりとし、詩人文士輩を笑ひ、青年たる者は、文章、修辭等の末技を事とするなく、遠大なる思想を以つて、哲學を考究し、堅固なる性格と實質ある知識とを養成すべきことを論せるものなり。

一日ソークラテース、途にフアイドロスに逢ふ。フアイドロスは此日學院の科業に倦みて、一卷を携へて散歩に出でたるなり。ソークラテース、其一卷は當時有名なる修辭家ルシアスが書き與へたる論文なるを知り、フアイドロスをして其を誦讀せしめんとして、相伴ひてイリッソス河畔に至り、楓樹の綠蔭に息ふ(時は夏なり)。ルシアスは戀愛反對論者にして、其巧みなりとせる修辭術を應用せるものなりと稱す。今其論の大意に曰く、——非戀愛主義の戀愛主義に優れるは、非戀愛者は自己の主人たり——感情的ならず——變心することなく——猜疑心少く他を排すること少く——非戀愛者は其數多きを以つて、多數中より

善良なる朋友を撰擇するを得るなり——非戀愛者は愛人を進歩せしむると雖も、戀愛者は之れを毀損す——非戀愛者は堅固なる朋友にして、求むるよりも與ふる者なり——又た其友情は永續して他より非難を受くることなしと云ふにあり。

ソークラテース聴き終り、自己も亦非戀愛主義を裝ほひ戀愛反對演説を爲せり。其大要たるや——人間には道理性の分子と非道理性の分子との二原理あり、戀愛は非道理性のものなり——戀愛者は其愛人の自己よりも劣れる者なることを欲す——故に戀愛者は愛人をして社會に交はらしめず、又た知識を得せらしめ、哲學を排斥す——戀愛者は愛人の柔弱なるものを求め、彼をして益々柔弱ならしむるものなり——戀愛者は愛人の朋友、父母、親戚等の取り去られんことを望むものなり——枯凋せる戀愛者は醜なり——戀愛者は愛人の肉體も精神も之れを傷害し、愛情去る時は、捨て、之れを顧みず——と云ふにあり。

然りと雖も、こは是れソークラテースが非戀愛主義者なるが如く、裝ひて爲したる演説にして、ソークラテースの言ふ所に據れば、此演説を爲し終りし時、神徴

ありて此演説は悪演説なり、愛の神エロースに對して不敬を言ひしものなりとの感起り、新に別に演説を構成し、前論を取り消し、以つてエロースの神に陳謝せんとす。其演説たるや、これ世界に有名なる「プラトニククラグ」(プラトニク恋愛説なり。此演説甚だ長し、今其大要を記さんに——
ソークラテース先づ戀愛を以つて高尚なる狂氣の一となし——狂に四種あり、其第一は預言にして、これ一種の狂なり、第二はインスピレーションに由つて家に傳來せる罪業を淨むることなり、これ亦一種の狂なり、第三は詩歌なり、これ亦一種の狂なり、第四は戀愛なりとし——こゝにプラトニクは靈魂を以て羽翼ある二馬と其御者とに比し、天上の美に接せんとして天路をたどることとを形容し、其肉體の情欲と精神の向上との關係を叙し、地上の美なるものは、凡て天上の大美を分有せるに過ぎざるを以つて決して地上の美に満足して、一身を快樂に委して顧みず、宛も下等動物の如く、逸樂と生殖とに突進し、放蕩を事とするな、尙ほ能く他に光榮ある大美あるを知りし者は、神の如く威儀端正なる容貌を有せる者、或は神聖なる美を表出せる形姿を見る時は、之れを驚歎し、其美は彼れ

の眼を通じて流入し、靈魂は濕潤を受けて、羽翼の發生を促がし、神氣を爽快にし、以つて天上に飛揚し、一旦上天の旅行を始めたる者は、決して再び暗黒に降ることなく、又たは地下の旅路をたどることなく、たゞ光明の中に在りて、愛者愛人其旅行の幸福なる伴侶となることなり。ソークラテースの此演説即ちプラトニククラグは言甚だ神秘にして、含意廣く且つ深しと雖も、其大要を言はゞ、地上の美は天上大美の分有なり、美少年に現はるゝ所の美は、天の大美を發表せるものにして、其美の力に由つて、靈魂の羽翼を温めて、其れが發生を促がし、遂に天上の大美に向つて飛揚せしむと云ふにあり。

是れを以つて哲學者にして始めて能く愛し、愛して始めて大美を得るなり。故に戀愛は最大効益のものたり、「哲學者——戀愛者」は最も高尚の人物なりと爲す。「フアイドロス」篇の拙譯プラトニク全集第三卷に攝收す。プラトニククラグの全編は幸に此書に就いて見るべし。

此に於てプラトニクの美少年主義は、意外の點に達したるものと謂ふべし。始めはハルミデースの美貌より裸體問題に關し「圖らずも衣服の内部を見て情

火熱し來りて、殆ど堪ゆべからざりし」と云ふが如き一種肉體的の分子ある言論より、今や靈魂の羽翼を生じて天上の大美に飛揚すると云ふが如きに至れり。あゝプラトーンの美少年主義や偉大なるものなるかな。

ソークラテース、又た『宴會』篇中デオチマなる女預言者の口を藉りて戀愛を説明し、愛は不死なりと爲し、(一)肉體上の交接に由て子を生むは一種の不死なり、(二)事業及び(三)名譽を後世に残すも不死なり。然と雖も此くの如きは愛の初歩にして、何人も解し得る所なり。其の奥儀は極めて難解なりと爲し、絶對美に進むの方法を教へて曰く「人若し此問題に就いて正しく進まんとせば、其青年の時に於て美なる形態に心向け始めざる可からず。彼れ美なるものより美なる思想を創造すべく、一の美は他の美と關係を有し、美は一全體なることを悟るべし。次に精神上の美は外形上の美よりも名譽とすべきことを考へ、制度法律等の美を思念し、是等は同一種の者たるを解し、人體美の如きは小事となすに至り、法律及び制度の後には學術の美を觀決して一青年或は人間或は制度等の美の卑しき奴隷となり、又は狹隘なる見識の者となるなく、能く美の豊富なるもの

を觀、美の大海に近づき、以つて知識の無限の愛に於て、多くの美なる高尚なる思想及び概念を創造し、遂に其海岸に成長して強力となり、最後に唯一の學術の示現は彼に啓示さるゝに至る。これ遍在の美の學術なり」と要するに此く向上するや「一より二に及び、二より一切の美なる形態に及び、美なる形態より美なる行為に及び、美なる行為より美なる概念に及び、美なる概念より絶對美の概念に達し、終に美の實相の如何なるものなるかを知るに至るにあり。

デオチマ此に於て結論して曰く「君若し一旦此美を觀る時は、かの金銀美服及び君等の精神を奪ひ、君及び多くの者は之れを愛好し、若し能くすべくんば、飲食を廢するとも彼等を見、彼等と語るのみなりとも之れに満足して共に在ることを求むる所の美童、美少年等は、到底此美に比較すべきに非ざるを知らん」と。此くして美少年の美の愛より、吾等は導かれて絶對美に達し、愛者愛人相示導し、相感化し、以て共に天上の大美を樂しむを得るとなす。

ハ ソークラテースの讚美

ソークラテースの美少年論、其旨深遠なり。此に於て、吾人は此論を爲したる所のソークラテースを讚美せざるを得ざるなり。何人をして讚美せしめんか、意ふにアガトーンの會主たる『宴會』の席上、ソークラテースの最も愛したる所のアルキピアデースをして讚美せしむるに優れるあることなけん。

『宴會』篇の席上、來會者盡く愛の神の讚美を演説し、最後の順番としてソークラテース前記絶對美の愛を語り終る。アキピアデース此日後れて至る、ソークラテースの演説終りし時なり。彼れ大に酩酊し、頭に蕙及び堇の大なる花冠を戴き、リボン^{リボン}の波を打たせ、友人及び藝妓等に扶けられ騒然として、室内に入り來り、頭より花冠を取りおろし、之れを會主アガトーンの頭に加ふ。時に顧みてソークラテースの其席にあるを見て驚きて曰く「あゝ、こは何事ぞや、ソークラテース此處に在りて常に余を待てり。又た何故にアリストファネス(前記)の如き滑稽先生の傍に在らずして、一同中の最も美麗なる人の傍に在るや」と。種々愛人關係の滑稽なる挨拶あり。其の内一人、此の宴會の催しとして來會者は皆な『愛の神の讚美演説』を爲すことゝなれる由を告ぐる者あり。されどもアルキ

ピアデースは滑稽を以て謂ひて曰く「若し余にして、ソークラテースの目前にて、神たれ人たれ苟も之を讚美するとあらば、彼れ嫉妬を以て、余を捕て離すとを爲さざれば、余はソークラテースを讚美せん」と。それよりソークラテースを讚美し、滑稽を交へて、ソークラテースの容貌の笑ふべきことを謂ひ、而もマルシヤスの神の如く、外形甚だ笑ふべきも内部には節制なる神像在します。が如しとなし。マルシヤスは笛に由つて人を感せしめ得るも、ソークラテースは是に優て、笛に由らず、樂器に由らず、其言語を以て人を感動せしめ、其談話を聴くに於ては、老の將に至らんとするをも忘れしむ。余はソークラテースに逢ふ時は、内心其教訓の爲めに責められて苦痛を感じ、時にはソークラテースの死して、吾等の間に在らざれば宜しきにも思ふこともあり。世の人々の驚歎する所の美貌富有名譽等も、彼れに於ては何物にてもあることなく、彼れ全然之を蔑如せり。ソークラテースの内心には神聖なる黄金に輝く神體ありて、其美は能く人を嬌惑し、余をしてソークラテースの命する如く行はせ得るものあるを見ると。是よりアルキピアデースの、ソークラテース讚美演説はアルキピアデースとソークラテ

スとの美少年主義の戀愛關係に移りて曰く

「時に余は以爲らく彼れは眞に余の美に愛着せるものなりと。又以爲らく是れ彼れの知れる所を盡く聽き得る大機會なりと。何となれば余は自ら大に青年美の引力あるを信せるを以てなり」と。アルキピアデースがソークラテースを戀愛者となさんとして屢々彼れを自己の家に招待し、或は運動場にて共に遊びなどしたるも、ソークラテース、毫もアルキピアデースの青年美に意のなき如く、アルキピアデースの美も聊かだにソークラテースの心を動かす能はざりしを言ひ、此れ「アルキピアデース」前篇の傳と異る所なり、最後に辛うじてソークラテースを饜應し、夜明ければとて一泊を勤め、床を並べて寝ぬるを得たる由を語る。此にアルキピアデース聊か自己の耻を語るものなりと雖も、ソークラテースを讚美するに當り、其高尚なる行爲は之れを隠蔽すべからずとなし、語り進みて曰く

「燈火は消されたり。家僕等は彼方に去れり。余は今夜こそは事を明瞭にせんと、余は彼れを揺り動かして曰く、ソークラテースよ、君は已に寝ねたるか」と。

彼れ曰く「否」。余曰く「君は余が何を思考せるやを知れるか」。彼曰く「其は何ぞや」。余曰く「思ふに余が從來有したる多くの戀愛者の内、實に君は最も余に相應はしき人にして、君は言語餘りに謙讓なるが如し、余は君の此好意及び其他の好意を否むの愚なるを感せり。故に余は余の有せる所及び朋友の有せる所を以て、君の足下に来りて余の徳義の道に進むを助けんことを願ふなり……君は他の者よりも最も多く余を助くる者なることを余は信ず。且つ君の如き人物の懇情を拒絶するは寧ろ以て耻辱と信ず」と。ソークラテース曰く「我友アルキピアデースよ、若し君の言ふ所は眞にして、又た余に力ありて、依つて以て君を進歩せしむるものありとせば、君の目的や實に高尚なり。君は、余には一種高價の美ありて、其美たるや余が君に於て見る所のものよりも無限の高きものなることを認めざる可からざるなり」と。尙ほ其他の問答ありて、アルキピアデースは十分ソークラテースの承諾を得たるものなりと思惟し、ソークラテースの臥床中に入れり。アルキピアデース其時の情を語りて曰く――

「此くて余は彼れの其他の言を待たずして起き上り、余の上衣を彼れに被せか

け。彼れの摩り切れたる上衣の内にもぐり込みたり。時これ冬なりしを以てなり。而して余は終夜此驚くべき怪物を抱きて寝ねたり。然るに凡て此くの如きにも係はらず。彼れ余の懇願に超然として余の美に對するや、輕視嘲弄侮蔑を以てし、自ら以て自己の美に引力ありと信じたる其美も、彼を動かすに足らざりき。此くて余は翌朝覺めて宛も父或は兄の寢床中より起き出づるが如き思ひを爲せり」と。美少年主義のソークラテースの情慾に對する節制や此くの如し。アテナイ市第一等の美少年アルキピアデースの如きすら、ソークラテースを生擒して、肉體的人物たらしむること能はざりき。

アルキピアデース尙ほ進みて、ポチダヤ戰爭中のソークラテースの疲労饑渴寒氣に堪ゆるの堅固なると、戰爭中と雖も、哲學思考を廢せざりしと、敗軍時のソークラテースの沈着なる勇氣ありしこと、を稱賛し、古來の英雄中之に比すべきものなきを云ひ、たゞ比較すべきは、滑稽なる「サテュロス」の神像あるのみとなし、結論して曰く――

「友人諸君、これ余のソークラテースの讚美たるなり。余は又た彼れが余を冷

遇したるに付きては、彼れに對する譴責をも附加したり。彼れの冷遇たるや、ただに余のみに非ずして、グラウコーンの子はハルミデース、チャクレースの子エウチデモス、其他多くの青年亦同じく冷遇されたり。彼れ始めは、彼等を戀愛する者として始むと雖も、終に其位置を轉倒して、却つて彼等をして、彼に媚を呈せしむるに至るなり」と。

アルキピアデース、語り終へし時、人々其飾なく、尙ソークラテースを戀愛せる如きを一笑せりと云ふ。是より宴席大に景氣を加へ、或は飲む者あり、或は歸る者あり、又た其場に眠る者ありしが、ソークラテース、アリストファネス及びアガトーンの三人は、終夜大杯を廻らして飲み、翌朝に至り、ソークラテースはアガトーンの家を辭し、リュケイオーンの園にて水浴して、終日其所に暮し、夕に至つて、家に歸れりと云ふ。

揚子の倫理學

漢人王充其著論衡に揚子を謂て曰く「揚子雲の篇を玩ぶは千石の官に居るよりも樂し」と。余も亦揚子『法言』を愛讀する者なり。

揚雄字は子雲、蜀の人なり。年四十餘にして京師に遊び、時の大司馬、車騎將軍王音の知る所となる。これ陽朔年號より永始に至る間の事なり。王音揚雄を薦めて侍詔せしむ。又曰く、客ありて雄が文相如に似たりと薦むる者あり、召て承明の庭に侍招せしむと。是れ鴻嘉、永始の間に在るべし。又同く正月上に甘泉に従ひ、還て甘泉の賦を奏して以て風す。天子異とすと。是れ永始四年の正月なる可し。

平帝の末年王莽篡立を謀りて誅せられ、揚雄、王莽の大夫となれりとの説ありと雖も、之れ全く訛傳なるが如し。然らずんば韓退之が如何でか揚雄を稱して「雄も亦聖人の徒か」と云ふが如き讚辭を爲すことあらんや。

揚子『法言』及び『大玄經』の著あり。其倫理思想は『法言』に據て之れを知るべし。

又たこれ天下の美文たり、揚子の倫理學は、美・的・倫・理を説けるものと謂ふ可し。然りと雖も揚雄の傳説は、實は殆ど知る可からざるものなり。

一 人性論

孟子、告子が性に就いて論ずる所ありしより、性論は支那哲學史上の注意すべき大問題とはなれり。孟子は性善なりとし、告子は性善なく不善なしとし、荀子は性惡なりとせるが、こゝに揚子は告子の性善惡なしとせるに反して、「人の性善惡混す」(修身篇)となせり。而して曰く「其善を修すれば善人となり、其惡を修すれば惡人となる」と。然らば揚子の説に由る時は、人間は如何なる人と雖も、善惡の兩性を有するものにして、所謂惡人の性中にも善性あり、所謂聖人の性中にも惡性ありて、たゞ其修する方の如何に由つて善となり、又た惡となり、其善惡の量の大小に由つて人物の差異を生ずとなすものなり。

揚子『氣』なる語を用ひて曰く「氣は善惡に適く所の馬なるか」(修身)と。之の語倫理學上左程重要な言語に非ず、たゞこれ人心中の一種盲目的の動力なるも

のたるを云へるものにして、又たこれ導いて善たらしめざる可からざるものに過ぎざるなり。

元來揚子の性論は孟子、荀子を折衷し以つて性論に解決を與へんとしたるものなりと雖も、未だ此問題の解決の時機に非ざりしか、疑問の提出されざるものあるなり、——即ち人々に由つて受くる性の不同——生れながらにして善性の人、悪性の人或は中等の性の人あることの問題は起らざりしなり。故に性論未だ十分の解決を得ざりしものとす。然るに韓退之に至つて解釋の材料に「三品説」の一問題を加へたり。

此くて揚子の人性觀は善惡混在にあり。而して又た謂へらく「天の生民を降すや、倥侗顛蒙(無知頑愚)にして情性に恣まゝにし、聰明開けず——之れに理を訓ふ」(學行)と。揚子の意たるや、人性善惡混在して倥侗頑愚の状態なり、故に若し此自然の状態に放置する時は其欲望情意を恣にするのみなり、之を以て是れを條理ある方に導くを要すと云ふにあり。

然らば如何にせば人は正理に向はしむるを得るか。揚子は學修にありとな

して曰く「學は性を修する所以なり。視聽言貌は性の有する所なり。學べば正しく學ばざれば邪なり」(學行)と。又曰く「學以て之れを治め、思以て之れを精にし、朋友以て之れを磨き、名譽以て之れを崇うし、以て之れを終ゆ、學を好むと謂ふべきなり」(學行)と。之れ學に由つて其善性を發揮せしめ正理に導かんとするの説なり。

然りと雖も人性中に有する善惡は、果して何れか眞に我物たるや、善若し善の發達せしめらるゝ權利ありとせば、惡も亦惡の發達せしめらるゝ權利を有せざるか。善と謂ひ惡と謂ふ、名は問ふ所に非ず、其の性中に在つて一を取り、一を斥くべしとする其標準は果して何物ぞや。其善性惡性共に我性たるや、一にして、其權利亦一たるに非ざるか。又た如何にして善惡混有せる人が、たゞ善のみを發達せしめんことを願ふに至りしか。又た善惡兩性を天より賦與せられたる人にして、其一方のみを發達せしめて他の一方を顧みざるは、或は之れ天物を暴殄することには非ざるか、揚子此是の點に考へ至らざりしものゝ如し。

それ然り。然りと雖も揚子の如き簡單なる言語に向つて、又た精密堅固なら

ざる哲學思想の人に向つて、明答を要むるは蓋し無理なり。吾人は等の諸點は揚子に對して疑問のまゝに置き、次に揚子が學修を獎勵せるの言を聞かん——或人揚子の説を評しく曰く「學は益なきに非ずや、人には質(性)の能不能あるに非ずや」と。揚子答て曰く「未だ思はざるのみ。夫れ刀あらば之れを礪ぎ、玉あらば之れを錯る。礪がず錯らすんば焉んか用ゆる所ぞ。礪いで之れを錯る、質其中にあり、否らざれば輟む(學行)と。性質に能不能、美不美ありと雖も學修に由つて美は其美を益し、美ならざるものは其不美を少うすべしとなす。

然らば學を爲すの方法は如何ん。揚子曰く「學を務むるは師を求むるに如かず。師は人の模範なり」と、而して師を讚頌して曰く「師なるかな師なるかな、侗子の命なり(學行)——師は侗者の善惡の命を制するものなりとなす。此に於て揚子の性論よりして、師或は模範を必要とするなり。

二 模範—師

揚子、師は侗子の命となし、模範の必要を謂へり。而して其模範たる人物は、學

を以て人を教へ、以て理に導き、又た其善性を發達助長せしむべしと爲す。揚子、師たるものが人を感化し、其模型に鑄成することを鑄金に比べて曰く「或人間ふ世に金を鑄ることを言ふ。金鑄るべきや」と。曰く「吾聞く、君子に見ゆるものは人を鑄ることを問ふ、金を鑄ることを問はず。或人曰く、人鑄るべきや。曰く、孔子、顔淵を鑄たり。或人歎爾として曰く、旨いかな、金を鑄ることを問ひて人を鑄ることを得たり(學行)と。實に師は人物を己れの如く感化するものにして、教育とは實に感化を作用することたるなり。

揚子、人の感化力を謂うて曰く「螟蟻(Meloe)の子産れて螺贏に逢ひ、之を祝して曰く「我に類よ我に類よ」と。久しうして之れに肖る。速かなるかな七十子の仲尼に肖たるや(學行)と。人は接する所に由つて感化せらるゝを謂へるなり。

此くて大人物は人を其模型に鑄造し、又た其接觸は、能く人を感化するものなりと雖も、人々大人物を理想とする時は、理想は又た其人を引き上げして、理想に達せしめんとするものなり。是を以て揚子、心を其希ふ所に潜むべきことを謂ふて曰く「昔仲尼心を文王に潜して之れに達す。顔淵も亦心を仲尼に潜して、未

だ達せざる一間のみ。神(心)は潜する所に在るのみ(同神)と。之れ潜心と人物形成の關係の理論なり。

又た理想力に就て謂うて曰く「驥を睥ふは驥の乘なり、顔を睥ふは顔の徒なり。或人曰く顔の徒易きか、之れを睥へば則ち是なる。曰く昔、顔常に夫子を睥ふ、正考甫常に尹吉甫を睥ふ、公子奚斯常に正考甫を睥ふ。若し睥ふことを欲せずんば已む。若し睥ふことを欲せば孰か之れを禦がん(學行)と。揚子此く理想力を謂ひて、孰か能く禦がんとなす。

次に又た習熟の勢力を云ふて曰く「習か習か、非を習ふも尙ほ是に勝つ。況んや是を習ふの非に勝つをや。あゝ、學は其の是を審かにするのみ(學行)と。

此くて人物養成は(一)模型鑄成に由り、(二)接觸感化に由り、(三)理想の引力により、又た四習熟の力に由るものとなす。而して其模型たり、又た理想たるものは如何なるものを選ぶべきか。理想の大小は人物の大小を生じ、其高卑は人物の高卑を生ず。揚子高尚なる人物、偉大なる人物を以てすべきことを謂うて曰く「日月を視て衆星の蔑なるを知る。聖人を仰いで衆説の小なるを知る(學行)。又曰

く「天庭を仰いで天下の卑きに居るを知る(善子)と。

又た諸子と聖人の書とを比較し、聖人の書を大なりとして曰く「書を読むものは之れを山及び水を觀るに譬ふ。東嶽に升つて衆山の崩施たるを知る、況んや介丘をや。滄海に浮びて江河の惡沓たるを知る、況んや枯澤をや(善子)と。之れ聖人の東嶽たり滄海たり、諸子等の崩施たり惡沓たり枯澤なるを謂へるなり。

揚子此く理想の大なるものを選ぶべきことを教へ、其理想に向つて止むことなく進むべきを誨へて曰く「百川海を學びて海に至り、丘陵は山を學びて山に至らず。是故に夫の畫(自棄)するものを惡む(學行)と。

又た其の實行なきものを以て無益となして曰く「大を好むも大を爲さざれば大ならず、高を好むも高を爲さざれば高からず(善子)と。大を好まば大を實行せよ、高を好まば高を實行せざる可からず、たゞに心に思ふのみにては益なしとなす。

三 聖 人 論

揚子は吾人の模範とする所、理想とする所、師とする所は聖人なり。吾人はここに揚子が如何に聖人を論せるかを觀んと欲す。

儒教の諸學者は、多くは『聖人』を以て殆ど一般人類と類を異にせる秀出の階級にあるもの、如くに之れを扱へり。揚子亦然り。故に聖人なるものは人類の模範たり、儀表たり、又た立法者たりとなす。其言に曰く、『聖人聰明淵懿、天に繼ぎ、靈を測り、群倫に冠し、諸範を經とす』と。其天に繼ぎ靈を測ると云ふが如き、實にこれ天より特に使命を被りたりとなすものに非ずや。諸範を經とすと云ふは、これ一切人類の模範たるを云へるに非ずや。

揚子又た聖人を美として謂ふて曰く、『或人問ふ、聖人の言は炳たること丹青の如しと、之れありや。曰く呼ば、是れ何の言ぞや、丹青は初めは炳たり、久しければ淪る。聖人の言淪らんや、君子と。丹青は變化褪色す、玉は淪はらざるなり。或人君子の玉に似たるを問ふ。揚子曰く、『純淪溫潤、柔にして堅、玩にして廉、隊乎として其れ形どる可からず』(君子)と。玉の不變の美と聖人君子の美とを同一視したるものなり。然りと雖も、『威儀文辭は聖人の表面にして、德行忠信は其裏面』(重黎)

なり。内外其美を併有す。

此くの如く美あり、光明ある、之れ即ち吾人の師なり、模範なり、又た理想たるなり。然りと雖も聖人とは果して如何なることを爲すものなるぞ。揚子曰く聖人とは、『天下の大順を成し、天下の大利を致し、天人の際を和同して、之をして間なからしむるものなり』(爾神)と。天下の大順は天地四時人倫一切の事物各々其職と分とを完うし、皆な其の道を歩むことなり。天下の大利とは萬物各々其所を得て幸福を享受し、人性を完うすることなり。而して天地自然と人間との間をして、最も圓滿に適合せしめ、軋轢することなく、よく調和せしむること、之れ天人の際を和同せしむることなり。揚子之れを聖人の職分となす。之れ人間に大利を與へ、大幸福を享受せしむることにして、聖人の爲すべき所の大なるものとなす。

聖人は事理に於て大智者なり、之れを以て其言や必ず敬聽せざる可からずとなす。揚子曰く、『君子(聖人と同じ)の言は幽にして必ず明に驗あり、遠くして必ず近に驗あり、大にして必ず小に驗あり、微にして必ず著に驗あり。驗なくして之

れを言ふを妄と謂ふ、君子妄ならんや。妄ならず(問應)と。愚者は目前顯著のことに非ざれば解せざるなり。たゞ大智の者よく視ざる所を見、顯はれざる所を察し、未だ來らざる所を知る、之れを以て愚者或は大智者の言を以て目前に効なしとなすと雖も、時に及びて其眞理なるの證明は事實となるものなり。淺近なる輩、到底永遠の事を知り得ざるなり。聖人を以て知者となす、故なきに非ざるなり。

然らば聖人の智識は吾人容易に之れを知るを得るか。揚子然らずとなす。曰く、或人問ふ、聖人の經書知り易からしむ可からざるか。曰く、知り易からしむ可からず。天俄にして度る可くんば、其の物を覆ふや淺し、地俄かにして測る可くんば、其物を載するや薄し。大なるかな天地の萬物の郭たるや、五經、即ち聖人の書の、衆説の郭たるや(問心)と。又曰く、或人問ふ、聖人の事を爲す、昭かなること日月の如くなること能はざるか、何ぞ後世の言々たるや。曰く、瞽曠(音樂者)能く黙す、瞽曠も不齊(不調子)の耳を齊する能はず。狄牙(調理人)も不齊の口を齊すること能はず(問心)と。聖人の言、聖人の意志、容易に知る可からず、容易に知る可

くんば淺薄たるなり。淺薄たるもの聖人と稱すべからず。且つ聖人を觀るものにして、未だ十分聖人を觀ることを得ざるものは、決して聖人の意志を解すること能はずとなす。且つ頑冥固陋の輩、到底聖人を解し得ざるなり。揚子之れを謂ひて曰く、吾れ震風の能く聳聳を動かすを見ざるなり(問心)と。震風烈ならざるに非ずと雖も、聳聳動かざるなり。聖言美利ならざるに非ずと雖も、頑冥の徒服せざるなり。聖人能力なしと云ふ可からざるなり。揚子聖人の言の深遠大利なるを讚美して曰く、聖人の言水火に似たり。或人水火を問ふ。曰く、水は之れを測れば益々深く、之れを窮めば益々遠し。火は之れを用るれば彌明かに、之れを宿へば彌壯なり(問道)と。又曰く、雷に非ず、霆に非ず、隱々駘々、久うして愈愈盈るは之れを聖に戸(フエ)と(問道)。又曰く、聖人の言は遠くして天の如く、賢人の言は近くして地の如し。其聲を瓊瓊にするものは、其質玉か(問道)と。聖人の言や美なりと雖も、其意志や遠大なり。

而して聖人の意志未だ人の知る所とならず、其目的未だ衆心に明かならざるや、人其聖なるを知らず、此の時に當てや、聖人實に泥に蟠る龍の如し。此に於て

揚子謂ふて曰く「龍泥に蟠れば蛇蜥蜴の類其れ肆す。蛇や、蛇や、悪んぞ龍の志を覩んや」(問神)と。聖人未だ現はれずして、小人跋扈するは方に是なり。小人跋扈する時は聖人實に屈す。「其身を屈するは道を信んが爲めなり」(五百)

時宜しからず、聖人其道行はれざるを知りて退くことあり。然りと雖も揚子聖人を以て、大貴富なること、天下敵なく到底商人輩の富貴の及ぶ可からざる所なりとなす、今其論に曰く——曰く「或人問ふ、孔子其道の用ゐられざるを知らば則ち載せて悪んか行かん」。曰く「後世の君子に行かん」。曰く「商人是の如くば亦た鈍ならずや」。曰く「衆人は愈々利して後に鈍なり。聖人は愈々鈍にして後利なり。百聖を關通して慙ぢず、天地を蔽うて耻ぢず。能言の類、人類能く加ふることなし。貴きこと敵なく、富倫なし、孰か之れより大ならん」(五百)。聖人の利萬世に及ぼす、大に非ずして何ぞやと。

聖人此くの如くそれ貴とし。而して揚子の尊崇して唯一とせる所の聖人は孔子となす。故に曰く「書を好みて之れを仲尼に要せざるは書肆なり。説を好みて之れを仲尼に見ざることは説鈴なり」(吾子)と。説鈴とは或註解者の言に由

れは、漢の時、鈴を振つて小説を唱ふるものあり、呼びて説鈴となすと。仲尼を尊崇せざるものは、現今鈴を振つて賣り歩む新聞賣りの如しとなす。

又、仲尼標準説を爲して曰く「或人己を治るを問ふ。曰く「己を治むるに仲尼を以てす」。或人曰く「己を治むるに仲尼を以てせば仲尼奚ぞ寡きや」。曰く「馬を率ゆるに驥を以てせば亦可ならずや」(吾子)と。之れ一切仲尼を以て律せんとするなり。

又た仲尼の大功業を謂ひ、又た之れを他人の學説等に比較して曰く「仲尼の術猶ほ四瀆支那四大江の如し、中國を經營して終に大海に入る。他人の道は西北の流なり、夷貉に綱紀し、或は沱に入り、或は漢に淪ぶ」(吾子)と。他人の道の終る所の小なるを謂ふなり。

又た仲尼の後世を導くは、宛も親たるものが小兒の手を援けて導く如しとして曰く「春木芑たり。仲尼我手を援けて諄たり。之れを去ること五百歳、其人存する如し」(五百)と。春木始めて生ずるや芑として、それ柔軟なり、吾人宛も春木の如し、仲尼吾人を導くこと手を援るが如し、歿後五百歳尙ほ其感化の力存するを

云ふ。揚子の孔子崇拜極まれと云ふべし。

四 孔子の道徳的政黨政治

揚子、孔子を崇拜す。孔子は聖人なり、道徳家なり。然りと雖も又政治家たるを記憶せざる可からず。政治家は又た其政見を實行せざる可からざるなり。其政見の實行には、先づ卿相を要し、百官を要し、是れを以て政府を組織せざる可からざるなり。

孔子志を得て政治を行ふことを得ることあらんには、必ず孔子の理想とせる所の道徳的政府を組織し、以て道徳政治を行はんとせしなり。而して其政府を組織する所の百官卿相は、必ずや七十子及び其他弟子三千中より任選したるべきなり。之れを以て此方面の觀察よりする時は、孔子は一種の政黨家にして道徳的政黨の首領たりしなり。孔子此の政黨を提げて、以て政を行はんとせしものと謂ふべし。揚子多少此觀察を爲せり。

揚子「淵騫」篇に謂ふて曰く「仲尼の後、漢道に至るまで徳行には顔淵、閔子騫、股

肱には蕭曹あり」と。之れ最も顔閔を尊重して及ぶ可からずとなして論せるものなり。然るに或人問ふ「淵騫の徒悪くんかある」。揚子答へて曰く「寢す」と。之れ淵騫今も之れなきに非ずと雖も、たゞ寢伏して人に知られざるなりと謂ふなり。或人又曰く「淵騫曷んぞ寢せざる」。揚子曰く「龍鱗に攀ち、鳳翼に附し、風以て之れを揚げば、物々乎として其れ及ぶ可からざるか。——其の寢に如かんや、其寢に如かんや」と。淵騫は孔子の時に遇ふを待ちし人なり。孔子若し志を得ることあらんには、二子必ず従つて興らん。譬へば龍鱗を攀ち、鳳翼に附し、大風以て之れを揚ぐるが如く、それ盛にして禦ぐ可からざるものありしなるべし。子の寢したるは、孔子が時を得るを待ちしなり。孔子若し時を得ば、其形成したる道徳的政黨を提げて政事を行ふべきを信じ居たるものなりとなす。之れ揚子の孔子の道徳的政黨觀なり。

五 政治論

揚子曰く「學の王者の事たる其れ已に久し」(學行)と。王者の事とは政治にして、

學問の大目的は政治にありとなす。而して揚子に在つては學問とは廣き意味の道德の學にして、一身を修め天下國家を平かならしめんとするものなり。道德と政治とは其目的を一にせるものなり。道德は政治の基礎となり、政治は道德の方法となるものとなす。之れ儒教全體に通じて然りとなす。之れを以て揚子亦政治を重んじ、是に就て論及せる所少なからず、其理想の政治たるや、實に道德的政治にして、以て道德的國家を組織せんとするものなり。

揚子政治の主義の道德的なるを謂ふて曰く「天下を治むるに禮文と五教とを待たざれば、吾れ黄帝堯舜を以て疣贅となす」(問道)と。禮文と五經とは道義の總稱にして、黄帝堯舜は道德政治を行ひしもの代表となす。

揚子の政を爲すの目的とせる所は「天下を陶成し」(先知)「天下を『動化』し、天下を『甄陶』して、『人をして士君子の器あらしむる』ものにして、之れ『聖人の樂しむ所』となす。政治の目的此にあり、之れを以て聖人之れを樂しみ、世を遁れず、群(社會)を離れず」以て政治に従事す、其目的とする所の高尙なる樂しむ所あればなり。故に聖人たるものは決して厭世、出世、遁離すべきものに非ず、遁離するものは是れ

聖人ならんや」となす。

然らば政治家たるもの、下に臨むの心事や如何ん。或人問ふて曰く「政を爲す、幾くかある」(先知)。揚子曰く「思はるゝと歎はるゝとなり。人の老を老とし、人の孤を孤とし、病者養はれ、死者葬られ、男子畝し、婦人桑す、之れを思はると謂ふ。(政を爲すこと此くの如きは人をして其所を得しめ、人の思ふ所にして爲政者を慕ふものなり)人の孤を屈し、病者獨りし、死者葬られず、田畝荒れ、杼軸空しき、之れを歎はると謂ふ。(此くの如きは人の厭ふ所、此くの如きは爲政者は人に厭はる)」。之れ揚子の爲政家の心事とする所なり。

揚子又た爲政者の務むべき所を謂ふて曰く「人に君たる者は務めて、民を般(ト)まし、財を阜(ト)んにし、道を明かにし、義を信にし、帝者の業を極め、天地の化を成し、粒食の民をして繫(ト)たり晏(ト)たらしむるにあり」(孝垂)と。人民の經濟を進むるなり、人性を完うせしむるなり、道義を守らしむるなり。此くの如きは之れ「思はるゝ」の政治なりとす。

揚子又た政を爲す「日新」の方を謂ふて曰く「政を爲すには日に新にす。或人

敢て日新を問ふ。曰く人をして其仁を利とし其義を樂しましめ、之を厲ますに名を以てし、之れを引くに美を以てし、之をして陶々然たらしむる、此れを日新と謂ふ(「先知」と)。之れ民をして喜びて善を爲し、厭ふことなく倦むこと勿らしむるものなり。

揚子、禮文五經を以て天下を治むべしと云ふと雖も、又たたゞ往聖の法を以て將來を治め、柱に膠して琴を調かしむる如きことある可からざるを謂ふて曰く「聖人の法未だ嘗て盛衰に關はらずんばあらず(「先知」と)。之れ國を治むるは時に隨ひ宜に制せざる可からざるを云へるものにして、道德、政治、法律等、其目的は一と雖も、亦時と共に應變せざる可からざるを覺れるの言となす。而して揚子の爲政に貴ぶ所は「中和(「先知」)にありとなす。されども中和に就ては揚子別に見るべきの言なきなり。

揚子惡政を謂ふて曰く「民に三勤あり、政善にして吏惡なる一の勤なり。吏善にして政惡なる、二の勤なり。政吏駢惡なるは三の勤なり(「先知」と)。之れ惡政の一なり。又た曰く「禽獸、人の食を食ひ、土木、人の帛を衣、穀人、晝に足らず、緜人、夜に

足らず、(晝夜力を竭くして尙ほ足らざるなり)、之れを惡政と謂ふ(「先知」と)。

六 禮樂文美

禮の大成したるものは素より美化せりと雖も、其禮の實質及び起始に於ては人の欲情を制限し、動作を節度して宜しきに合はしむるものと爲す。是を以て禮中には素り多少の強制的のものあるを免れざるあり。或人問ふて曰く「禮は世を強ひ難し」。揚子曰く「難きが故に之れを強ふ。夷俟、倨肆、箕踞、驕慢、羈角、幼兒の果を哺して之れを嗜ふが如くならば奚ぞそれ強ひん」。川に防あり、器に範ある、禮教の至を見る(「五百」と)。禮は制限して各自の分を守り、又た欲情の度あらしむるものなり。故に我が好む所の情と雖も、強ひてそれを限ることあり、我が好まざる所と雖も、強て之れを行はざる可からざることあり、之れを以て人必しも自ら好まず、行ひ難き所あり、之れを以て之れを強ふるなり。川の堤防あるは水の氾濫を禦ぐなり、人の禮あるは慾情動作を制限して法度に合はしむるものなり。

禮の生起の性質此くの如し。然りと雖も人性美を好み、美を求め、美に動く。之れを以て聖人禮を美とし、樂及び文美を之れに加へて以て人にすゝむ。揚子は政治の如きも禮文の美を以てせざる可からざるを感じて其必要を云へり、乃ち其の言に曰く「天下を治むるに禮文と五經とを待たざれば、吾れ黃帝堯舜を以て疣贅となす」(問道)と。又曰く「聖人の天下を治むるや之れを礙るに禮樂を以てす。無ければ禽、異れば貉」と。實に野蠻醜惡に安んずるは人性に非ざるなり。聖人の爲す所は野を變じて文となさんとするものなり。故に揚子曰く「聖人は質を文にするものなり。車服以て之れを彰はし、藻色以て之を明かにし、聲音以て之れを揚げ、詩書以て之れを光にす。籩豆陳ねず、玉帛分かつ、琴瑟鏗たらず、鐘鼓転たざれば、吾れ以て聖人を見ることなし」(五百)と。之れ皆な徳美を可視的に美化する方法にして、又た以て人に徳をすゝむるものとなす。

然るに老莊派の人々は禮樂文美を以て人心を亂るものとなし之れに反對す。此に於て或人問て曰く「太古は民の耳目を塗り塞げり、何となれば見ればなり、聞けばなり。見聞せば欲情塞ぎ難ければなり」(問道)と。揚子答へて曰く「天の聲め

て民を生ずるや、其をして目見、耳聞かしむ。是れを以て之れに禮を見せしめ、之れに樂を聴かしむ」と。之れ天の與へし人性を完うして其耳目の欲を充たすと同時に禮樂の美を感せしめて惡なからしむるものなり。若し「視ること禮ならず、聞くこと樂ならざる時は(民散亂して制す可からず)民ありと雖も焉んぞ得て之れが耳目を塗り塞ぐことを得んや」(問道)となす。

老莊派又た愛を重んずと雖も禮を輕んず。此に於て或人問ふて曰く「太古は徳懷して禮懷せず。嬰兒慕し、駒犢従す、焉んぞ禮を以てせん」。揚子曰く「嬰犢なるかな、嬰犢は母懷して父懷せず。母懷は愛なり、父懷は敬なり。獨り母のみしにて父なきは、未だ父母の懿ヒカに若かざるなり」——徳と愛とは勿論善し、然りと雖も、禮と敬とを之れに加へ有するに若からざるなりとなす。

七 提 要

(一)揚子の倫理學史上に有名なるは其性説の、人性善惡混す、其善を修むれば善人となり、其惡を修むれば惡人となると云ふにあり。(二)其人を導き、其善を教ふ

るものは師なりとして師及び模範の必要を謂ひ、師たるものゝ感化力及び人物養成の法則を謂ひ、其の師の理想として聖人を謂ふ。又た(三)聖人は萬人の模範なりとし之れを讚美し、聖人の最大なるものを仲尼となし之れを崇拜す。(四)揚子、孔子の弟子を教養するを見て一種の政黨的のものとなし、道德政治を行はんとするものならんと、意を得ば孔子必ず其政黨に由つて政府を組織せんとするものならんと、言を爲せり。(五)揚子政治論あり、素より道德政治を謂ひ政治家の心得べきは、民に思はれ歎はれざることゝなす。(六)揚子又た禮樂文美を尙ぶ。

我心石に非らず(詩經)
我心石に匪ず、轉す可からず。
我心席に非ず、卷く可からず。
威儀棣々たり、運ぶ可からず。

張子の倫理學

傳

張子諱は載字は子厚、横渠先生と稱す。世々大梁の人なり。父迪、仁宗の朝に任へて殿中函知涪州事に終ふ。尙書都官即中涪州を贈る。西官に卒す。諸孤皆な幼にして歸ること能はず、鳳翔縣横渠鎮の南、大振谷の口ホトに寓す。因つて徒つて家す。

張子、嘉祐二年、西曆一〇五七、進士弟に登り、始めて新州司法參軍に仕へ、丹州雲巖縣の令に遷り。又た著作佐郎、簽書涪州軍事判官公事に遷る。熙寧二年の冬、召されて入對し、崇文院校書に除せらる。明年疾を移して十年の春復た召して館に還り、太常禮院を同知す。是年冬、謁告して西歸す。十二月、臨潼に行次し、館舍に卒す。享年五十有八。子あり、因と云ふ、尙ほ幼なり。

張子始め外傳に就くや、已に志義群ならず、少より孤にして自立す。學を好み、

殆ど學ばざる所なし。友人來るあらば喜びて兵を談ず、而も其言ふ所以つて實戰に用べきなり。

年十八。慨然として功名を以つて自ら許るす。時に范仲淹巡撫使たり、張子上書して范文正公に謁す。公一見して其遠大の器なるを知り、之れを大成せしめんとして之れを責めて勵まして曰く「儒者は自ら名教あり、何ぞ兵を事とせん」と。因つて中庸を讀ましむ。張子之れを讀みて愛すと雖も、尙ほ未だ以つて足れりとせず。是に於て佛教の諸經典及び老教の書籍を訪ね、累年にして盡く其説を究む。然りと雖も是等の無益のものにして、遂に得る所なきを知り、反つて之れを六經に求め、聖人の道を以つて大なりとし、其れより大に佛老を排し、是等の諸教を以つて倫理を亂り、生死に迷ふものにして、國家人民の福利を増進せしむる能はざるものとなす。其佛老を攻撃するの言語は、殆ど凡ての論文中に存在せり。

嘉祐の初め張子京師に在り。自ら以つて道を得たりと信じ、師を以つて自ら居り、虎皮に坐して周易を説き居たり、聽從するもの甚だ衆し。一日二程洛陽よ

り至り、易を論ず。次日張子虎皮を撤して曰く「吾れ平生諸公の爲めに説きし所のものは皆亂道なり。二程あつて近く至る。深く易道を明かにせり、吾れの及ばざる所なり。後輩之れを師とすべし」と。張子乃ち陝西に歸る。(一説に由れば張子此事あるに非ず、たゞ二程と共に道學の要を語り、渙然として自ら信じて曰く「吾道自ら足れり何ぞ旁く求むるを事とせん」と乃ち盡く異學を棄て、淳如たりと云ふ張子之れより益々勉學砥礪する所あり。

其未だ進士に第せざる時、文潞公故相たるを以つて長安に判たり。張子の名行の美を聞きて聘するに束帛を以つてし、之れを學宮に延いて其禮際を異にす。士子矜ひ式る。

其雲巖に在るや政治大抵本を敦うし、俗を善くするを以つて先と爲し、毎に月吉を以つて酒食を具へて郷人の高年を召して縣庭に會し、爲めに勸酬して、人をして老を養ひ長に事ふるの義を知らしむ。又た民の疾苦を問ひ及び子弟を訓戒する所以の意を告ぐ。教告する所あらば、常に文檄の出で、盡く民に達する能はざるを患ひ、毎に郷長を庭に召し、諄々として口諭し、往いて其里閭に告げし

む。間々民事に因つて庭に至り、或は行いて道に遇ふことあらば必ず問ふて曰く「某時、某に命じて某の事を告ぐ、聞きしや否や」と。聞けば即ち已む、否なれば其命を受けし者を罪す。故に一言の出づるや、愚夫孺子と雖預り聞かざるなし。張子又た郡學に延致せらる。其人を教るや、徳を以つてし、學者に語るに堯舜の域に進むことを以つてす。

涓に在るの時は張子軍事判官公事たり。軍府の政に贊助する所少なからず。時に塞に穀ふの民常に食に乏しきを苦しむ。官幣に貸て足ること能はず。又た府に言ふて軍儲數十萬を取つて以つて之れを救ふ、又た言ふ兵の徒往來するは用を爲すべからず、若らす數を損して以つて土人を募つて便となさんにはと。神宗位を嗣いで二年新政を施かんとす。御史中丞呂晦叔、張子を朝に薦めて曰く、張載學本原あり。西方の學者皆な之れを宗とす。以つて召對訪問すべしと。神宗即ち命じ召す。既にして入つて見ゆ。神宗治道を問ふ。張子の理想は堯舜にあり、故に二代に漸復するを以つて對となす。神宗大に用ゐんとす。然りと雖も張子謝して曰く、「臣外官より召に赴けり。朝廷新政の安んずる所を

測らず、願くば徐く旬月を觀て繼いで獻する所あらんと、神宗然りとなす。他日執政王安石に見る、執政嘗て語つて曰く「新政の更る、懼くは事に任ずると能はざらん、助を子に求む、如何ん」張子曰く「朝廷大に爲すことあらんとせば天下の士下風に與らんことを願はん。若し人の善を爲すに與みせば孰か敢て盡くさらん。若し玉人を教へて追琢せしむるが如きあらば、人亦故らに能くせざるあらん」と。執政默然なり。語る所多く合はず、寢く悦びず。

既に教書崇文に命ず。張子辭して謝することを得ず。復た命じて獄を浙東に案せしむ。或人爲めに之れを言ふありて曰く「張載道德を以つて進む、之れをして獄を治めしむ可からず」と。執政曰く「阜陶の如き猶ほ且つ囚を獻す。此れ何を以つてか傷まん」と。獄終つて朝に還る。弟天祺言を以つて罪を得るに會ひ張子益々安んぜず、乃ち謁告して西歸し、横渠の故居に居り、疾を移して起たず。横渠至つて僻陋なり。田數百畝あり、以つて歲計に供す。約にして能く足れり。人其憂に堪えずと雖も、張子之れに處つて益々安し。而して貧窮の如きは張子に取つては何事にも非ざるなり。嘗て曰く「勇者は懼れず、死をだに且つ避

けず。然るに反へつて貧を安んせざるは其の勇將た何くに施こさんとするか。稱するに足らざるなり〔有徳〕と。貧窮に安んずるこは決して之れ理想とするに非ざるなり、たゞ天命の如何ともするなき時、其命に安んずるのみ。而して其安んずるや内心富貴を欲するも力足らずして、止むを得ず之れに安んずると假稱することには非ざるなり。故に張子曰く「人多く言ふ貧賤に安んずと。其實はただ是れ計窮し、力屈して營盡すること能はざるのみ。若し稍動し得ば恐くは肯て之れに安んせざるべし。須く是れ誠に義理の利欲より樂しきを知つて乃ち能くす〔氣質〕と。富貴は眞に貴きものに非ず、人間の品性道德之れ眞の富貴にして、之を得たるものこそ眞に富めるなり。故に張子曰く「天下の富貴、外に假る者は皆な窮りあるのみ。蓋し人欲厭くことなくして外物限りあり。惟道義は爵無くして貴く、之れを取つて窮りなし〔學大原下〕と。あゝ道義のみは人間無窮に進歩の地を有せる範圍たるなり。張子「土牀」の詩あり、其心中の安如たるを見るに足る、曰く「土牀煙足つて袖袵暖かなり。瓦釜泉乾いで豆粥新なり。萬事思はず温飽の外。漫然たる清世の一閑人」。

此くて終日一室に危坐し、簡編を在右にし俯して讀み、仰で思ふことあらば之れを識るす。或は中夜起坐して燭を取つて以つて書す。張子銘を作つて學堂の雙牖に掲げ、右に「訂頑」を書し左に「砭愚」を書す。伊川之れを視て其名稱の極端なるを言しより爲めに「訂頑」を改めて「西銘」となし、「砭愚」を改めて「東銘」となす。東銘は戲言戲動を戒めたるものなり、學說十、戲謔過誤の責任論を見よ、西銘は愛を以つて天下を一家となし、萬物を一體と感ずる高尚なる大言語なり。學說五、「天地萬物我一體の感情を見よ」程子之れを稱して曰く「訂頑の言極めて純にして雜なし、秦漢以來學者の到らざる所」。「訂頑の一篇意極めて完備す。乃ち仁の體なり。學者此意を體して、之れを己に有らしめば、其地位已に高し。此地位に到らば自ら別に見處あり。高きを窮め、遠きを極む可からず。恐くは道に於て補ひなからん」。「子厚の此くの如きの筆力、他人は倣し得るに縁なし。孟子以後、人此に及ぶ者あらず」と。

張子の道に志ざし、銳意之れに向つて進むや、實に乾々として息むことなし。故に謂ふて曰く「學者息むことある時は一に木偶人の捧搖すれば動き、之れを舍

つれば息み、一日にして萬生萬死するが如し。學者息むことある時は亦死に異ることなし。是の心死すれば身生けりと雖も亦物なり。天下の物多し、學者はもと道を以つて生となす。道息む時は死す。終に之れ偽物なり、當に木偶人を以つて譬となし、以つて自ら戒むべし。息むことの大不善なるを知つて因つて惡譬を説くこと此くの如し、只だ息まざらんことを欲す〔氣貫〕と。

張子は實に勉強主義の人なり。『勉々』は其の重要な言語なり。故に人を戒めて曰く、人若し志趣遠からずんば、心あらず。學ぶと雖も成ることなし。人道に進むに懈れば自ら達することを得ることなし。成徳の君子に非ざるよりは、必ず勉々して、心の欲する所に従つて矩を踰えざるに至つて方に放下すべし〔義理〕と。怠惰は以つて學徳を成就する所以に非ず。之れ張子の大に戒むる所なり。

人若し學を成し徳に達せんと欲せば非常なる決心を要す。決して苟且偷安の能くする所に非ざるなり。張子曰く、今人學を爲すは山麓に登るが如し。其迤邐の時に至つては濶歩大走せざるなしと雖も、峭峻の處に到るに及びては便

ち止まる。須く剛決果敢にして以つて進まんことを要す〔學大原下〕と。又た學を爲すに堅勇を貴ぶの言に曰く、學に志ある者は都て更に氣の美惡を論せず。只志如何を看る。匹夫も志を奪ふ可からず。惟患ふ學者の堅勇なること能はざるを〔語錄〕と。

然りと雖も、學は以つて小成に安んじ決して人の下風に立ちて甘んずべきに非ざるなり。故に曰く、學を爲すこと須く進みて以つて人に異なること無き時は、是れ郷人のみ。貴きこと公卿なりと雖も、若し以つて人に異なることなき時は郷人たるを免れず〔學大原上〕と。然らば人に優るの工夫如何ん、曰く、下學して上達し、人に問ひ、人に學ぶを耻ぢざるにあり、故に曰く、學の動進かざる者は正に七年の病に三年の艾を蓄へざるが如し。今の學に於ける、工を加ふること數年ならんには自ら是れ、之れに享ること窮りなし。人多くは人に問ふことを耻づ。假使ひ今日人に問ふて明日人に勝るも何の不可あらん。是くの如くなる時は孔子、老聃、苴弘、鄒子賓、牟賈に問へる何の得ざるあらん。天下衆人の善を聚むる者は是れ聖人なり。豈其一端を得て使ち聖人に勝るあらんや〔學大原下〕と。

學を勉め徳を養ひ、神氣を清健ならしめんには、決して「朝」と「夜」との及ぼす勢力を看過すべからざるあり。張子早起の必要を謂ふ、之れ學徳の進歩の爲めなり、曰く「人早起して未だ物に交はらず、銳意精健平正なるべし。故に整頓一早晨なるを得んことを要す。物に接し、日中に及びては泪没すべく、夜に至らば自ら息することを求めて反つて静かなり」(學大原上)と。朝は銳意精進を求め、夜は静かに其息養を致す。朝と夜豈意味なきものならんや。張子芭蕉の詩あり、之れ進徳勉強を自然より學ばんとするものなり、曰く「芭蕉心盡きて新枝を展ぶ。新に新心を卷いて暗に己に隨ふ。願くは新心を學びて新徳を養ひ、旋つて新葉に隨つて新知を起さんことを」と。

張子の學は實に勉強と苦心との結果なり。故に聖人孔子の如きをも生知の人に非ず、勉強し、古を好み、敏にして之れを求めて得たるものなりとせり。朱子、張子の性格を評して程明道に比較して曰く「明道の學は從容として涵泳の味治し。横渠の學は苦心力學の功深し」と。張子實に此種の人物なり。

張子學を勉め、徳を修むることを心とし、又た以つて之れを人に教ふ。學者問

ふことあらば多く告ぐるに禮を知り、性を成し、氣質を變化するの道を以つてす。學必ず聖人の如くにして後ち已む。聞く者心を動かし進む有らずと云ふことなし。張子よく人を教ふ、其人を益するや己に大なり。而して張子は又た人を教ふるは、大に自己を益し、學を進め徳を進むるものなりとせり。其言に曰く「人小童を教ふるも亦益を取るべし。己を絆うて出入せざらしむ、一の益なり。人に授くること數々すれば己も亦此文義をなす、二の益なり。之れに對すれば必ず衣冠を正うし、瞻視を尊うす、三の益なり。常に己に因つて人の才を壞するを以つて憂と爲す時は敢て墮せず、四の益なり」(語錄)と。

又た以爲らく、之れを教ふること、必ず能く之れを養ふて然る後信ありと。故に貧にして自ら給する能はずと雖も、苟も門人の貴なき者には糲蔬と雖も亦之れを共にす。

張子此く學を奨む。又た書を讀むことを勸めて曰く「書を讀むこと少なければ考校して義の精しきを得るに由なし。蓋し書は以つて此心を維持す。一時放下すれば一時徳性懈ることあり。書を讀む時は此心常に在り、書を讀まざる

時は終に義理見へず。書は須く誦を成すべし。思を精にすることは多くは夜中にあり。或は静坐して之を得。記せざる時は思ひ起さず。但大原に通貫し得て後、書も亦記し易し。書を觀る所以のものは、己の疑を釋き、己の未だ達せざる所を明かにす。毎に見て、毎に益す所を知る時は學進む。疑はざる所に於て疑あるは、方に是れ進むなり〔義理〕と。

又た學者の思想及び文字等を得たる時の注意を與へて曰く「學者心を潜めて畧得る所あらば、即ち且く之れを紙筆に誌るせ。其の忘れ易うして其良心を失ふを以つてなり。若し得る所は是れを充大して、以つて其心を養ひ、數千の題を立て、旋つて注釋し、常に之れを改めよ。一字を改め得れば即ち是れ一字を進得す。始めて文字を作る時は須く其詞を多くして以つて意志を包羅すべし」〔義理〕と。

張子、義理を考究して、之れを求むる時の注意を與へて曰く「急に義理を求むること有らば復た得ず、閒暇に於て時に得ることあり。蓋し意樂しむ時は見易く、急にして樂まざれば之れを失す。蓋し義理を求むる所以は、天地禮樂鬼神至大

の事に非るなし。心洪ならざれば見ることを得るに由なし〔義理〕と。書を觀るに於ても亦然り、意思をして迫了せしむることなく、文に泥みて大體を求めざる時は得る所なしとなす。

張子此く學を貴び讀書を獎む。然りと雖も腐儒蠹魚の意には非ざるなり。故に曰く「學は心悟を貴ぶ。舊を守れば功なし」。『書を觀る時は必ず其言を總べて、作者の意を求む〔義理〕と。學は心に得るにあり、義理を悟るにあり、必しも舊に泥むに非ざるなり。書は字句に溺るゝに非ず、大觀して作者の意を得るを目的となす。

張子の學なるものは義理を知ることとを旨とするものにして、必しも古今の事變を知り、博學多識なるを要せずとなす。故に義理の書は之れを重んずと雖も、歴史の如きは之れを重んぜざるなり。其言に曰く「書を觀るには且つ史を觀ること勿れ學、急處を理會すれば亦た觀るに暇なし。然りと雖も、史を觀ること、又た山水に遊ぶに勝る。林石の趣始めは愛すべきに似たりと雖も、遂に益なし。若かず、心を経籍義理の間に遊ばしむるには〔義理〕と。張子山水林石を無益とな

す、聊か風流の氣なきが如し、蓋し之れ張子氣質の然らしむる所なるべし。後人張子を云ふて迫れる所ありとなせるも亦其理由なきに非ず。

然りと雖も張子感美性なしと云ふに非ず、其詩を貴び之れを詠誦し、樂器篇には之れを解釋せるが如き、吾人其觀美心あるを知る。又た和樂を貴び、和樂は道の端なり。和すれば大なるべし、樂しむ時は久しかるべし。天地の性は久大のみ、誠明と云へり張子又た易を貴び、易說の著あり、易は樂天を教ふ。張子亦天を樂しむを云へり。「西銘」の如きは著しく之れを云へり。又た天文學を好みたるが如し、日月星辰の構成、物質及び其運行等を論せるの一篇あり。

此くて張子其知らんとする所は聖人の心なり、其成就せんとする所は聖人の徳なり。而して之れを得んには決して淺薄以つて得べきに非ず。嘗て聖心の詩を作つて曰く、聖心は淺心を用つて求め難し、聖學は須く禮法を專にして修すべし。千五百年孔子無し。盡く變に通ずるに由つて優游に老ふ」と。張子の意を考ふるに、孔子以後聖人なく、自ら直に孔子に繼がんとする者の如し。當時喪祭甚だ法を失せり、張子之れを慨し、流俗を矯正し古に復さんと欲し、身

以つて固く其禮を行ひ、家祭の如きは四時の薦を行ひ、曲に誠潔を盡くせり。閑く者始めは或は疑ひ笑ひしも終には信じて之れに従ひ、一變して古に従ふ者甚だ後きに至れり。其時の感を謂ふて曰く、其始めて期の喪を持せし時、人の非笑せんことを恐れ、己も亦自ら羞耻するが如し、自後大功小功と雖も亦之れに服す。人も亦以つて熟すとなし、己も亦熟せり。天下の大患は只だそれ人の非笑を畏るゝにあり。車馬を養はず、麤を食ひ、惡を衣、貧賤に居る、皆な人の非笑を畏る。知らず當に生くべければ生き、當に死すべければ死す。今日萬鐘、明日之れを棄て、今日富貴、明日饑餓せんも亦た郵ますたゞ義の在る所を爲すのみ」と。人の非笑を恐るゝは事を成し得ざる大なる原因なり、正理あらば何ぞ人言を恐れん、自ら進みて爲すべきのみ。又た曰く、人の己を行ふ能はざる所以のものは、其難き所のものは情り、其の俗に異なる者は易しと雖も羞縮す。たゞ心弘き時は人の非笑を顧みず。趨く所義理のみ。天下を視るに能く其道を移すことなし、論語と。此くて理の在る所は、何事と雖も猛進して回避すべからずとなす。其言に曰く、坎は心亨る。故に行て尙ふことあり。外積險と雖も、苟も之れに應じて心亨

つて疑はざる時は、難と雖も必ず濟して往いて功あり。今水萬仞の山に臨み、下らんと要すれば即ち下り、復た疑滯の險前に在ることなし。惟義理あるを知るのみなる時は復た何ぞ回避せん〔語錄〕と。此心以つて事を爲すべし、此心以つて浩然の氣の行爲を生ずべきなり。

張子氣質剛毅なり。故に困難の如きは毫も意となす所に非ず、却つて人物を堅固にし、徳に進ましむるの益ありとなす。曰く「困しみて變ずることを知らざるを民斯れを下とす。困しむを待たずして喻るは賢者の常なり。困の人を進むるや、徳を爲すこと辨に感爲すこと速かなり。孟子謂ふ、人徳慧術知あるものは疾疾に存す」と。此れを以つて古より内に困しむものは舜に如くなく、外に困しむものは孔子に如くなし。孔子の聖を以つてして困に下學する時は、其難を被りて志を正うし、聖徳日に躋り、必ず人の知るに及ばざる所にして天獨り之れを知るものなり。故に曰く「我を知るなし、我れを知るものは其れ天か〔三十〕と。困難は以つて心志を鍛鍊すべし、決して之れが爲めに其心性の品位を失ふ可からざるなり。故に曰く「君子は身困辱を被るも人に徇ふに非禮の恭を以つてせ

ず、寧ろ孤立して助なくとも、親を賤しむべきの人に失はず〔有徳〕と。

張子徳盛に、貌嚴なり、然りと雖も人と居ること久うして日に親しみ、最も「朋友と琴瑟と簡編〔性理拾遺〕とを好み、其家を治め、物に接する、大要己を正しうして以つて人を感せしむ。人未だ信せざれば躬に反みて自ら治め、以つて人に語らず。故に識ると識らざると、皆風を聞て畏る。其義に非ざれば、敢て一毫を以つて之れに及ばさず。其家の童子は必ず洒掃應對して長者に待せしむ。又た小兒を養ふ方法を謂ふて曰く「善く子を養ふ者は其嬰孩之れを鞠ふに當つて、養ふ所を得しめ、其をして氣を和せしむる時は、長じて性美なり。之れに教へて示めすに好惡を以つてすること常あれ〔學大原〕と。女子の未だ嫁せざるものは、必ず祭祀を親らし酒漿を納れしむ。之れ皆な孫弟を養ひ成徳を就す所以なり。嘗て曰く「親に事へ祭に奉ず、豈人をして之れを爲さしむ可けんや」と。又た女子の貞従なるべきを教ふるに、女戒を作りて曰く「婦道の常は順唯厥の常なり。是れを天明と謂ふ、是れ其の帝命なり。爾が婉婉にして克く爾が親を安んずることを嘉す。往いて爾が家に之け。克く施こし、克く勤めよ。爾が順惟れ何ぞ夫子に違

ふこと勿れ。然かく阜々たること勿れ(阜々は言を與)。然かく誦々たること勿れ(誦々は事を與)。彼れ是に違ふも爾焉ぞ非を作さん。彼れ舊を革るも爾焉ぞ儀を作さん。惟れ惟だ儀なるに非ず、女生るゝ時は戒む。王姬、肅雍酒食是れ議れり(周王の女も亦然り)。爾に五物を貽る以つて爾が心に銘せよ。爾が佩巾を錫ふ、予が誨言を墨せよ。爾が提匱を銅にす、爾が賓薦を謹しめ。爾が奩具を玉にす、爾が藻綯を素にせよ。爾が文竹を枕にし、爾が吳筵を席にす。爾が書訓を念ひ、爾が退安を思へ。彼れ實に室を有す、爾從ふて室とすること勿れ。爾が提提を遜せよ、爾が生逸を引ひうせん(張子全書十三卷と)。

張子人の善を聞けば喜顔色に見はれ、問ひに、學者に答へては、多しと雖も倦まず。能くせざる者あらば未だ嘗て其端を開かずんばあらず。其至る所必ず人才を訪ふ。語るべきものあらば必ず丁寧に以つて之れに誨へ、惟だ其成就するの晩きを恐る。張子の此くの如きの行爲や實に虚心にして、毫も挾む所あるなく、其誠心を盡くすのみ。實に誠意は虚心より來る。張子が「虚を貴ぶは又た此くの如きの點にも存するものあり。故に曰く「虚心にして然る後能く心を盡く

す(語錄)「大人は其赤子の心を失はず。今ま知るべし、其虚なるを以つなり」。『天地虚を以つて徳となす。至善は虚なり。虚は天地の祖なり、天地は虚中より來る』と。宇宙論に於ては虚を以つて大原因となし、倫理に在つては、誠の體となす。歳適々大に歎らず、人相食ふに至りしことあり。時に家人米の精ならざるを惡み之れを舂かんとするや、張子亟々之れを止めて曰く「飢殍野に滿つ、藜食すと雖も且つ自ら愧づ、又た安んぞ擇ぶことあるに忍びんや」と。咨嗟して食せざることを數回ありき。

熙寧九年の秋、張子異夢を感じ、忽ち書を以つて門人に屬し、乃ち立つる所の言を集む。之れを「正蒙」と謂ふ。出して門人に示めして曰く「此書予年を歴、思を致して得る所なり。其言殆ど前聖に於て大要を合與し、端を發し、人に示めすのみ。其類に觸れ之れを廣むることは吾れ將た學者に待つことあり。正に老木の株の如し。枝別固に多し、少ぐ所のものは潤澤華葉のみ」と。張子「正蒙」を著はす時の工夫を見るに、又た甚だ勉強せるものにして、或時の如きは終夜黙座して曉に徹したることあり。又た諸室處々に筆硯を置き、意を得れば即ち書したり。

之れ其時に浮びたる思想を逸失せざらしめんが爲めなり。其精勵實に「任重うして道遠し」の意を念とせるものゝ如し。著書家當に此工夫あるを要す。一度浮び出でたる善良なる思想は實に貴重なるものにして、一度之れを逸失忘却することあらんには、或は再び之れを得るや否やは甚だ不明のものたればなり。エマーソンは、夜中若し床中に在つて妙想を得たる時は、直に點火し、起きて書き付けたりと云ふ。又た或人は枕頭常に筆紙を備へ不眠の時思想を得ることある時は又たエーマンの爲せしが如くなせしと云ふ。

張子の政治理想は三代にあり。其經濟の策としては井田法を主義となし、井田法を行ひ、經界を定めば以つて仁政を行ふの手始めたるを得べしとなせり。嘗て曰く「仁政は必ず經界より始まる。貧富均しからず、教養法なき時は、治を言はんと欲すと雖も皆苟もするのみ。世の此主義の行ひ難きを云ふ者は、未だ始めより亟に富人の田を奪ふを以つて辭となさずんばあらず。然るに此法の行はるゝを悦ぶ者衆し。苟も之れを處するに術あり。期するに數年を以つてせば一人を刑せずして復すべし。病む所のものは特に上の未だ之れを行はざる

のみ」と。茲に於て言ふて曰く「縦ひ之れを天下に行ふ能はずと雖も、猶ほ之れを一郷に驗すべし。方に學者と古の法を議し、共に田一方を買ひて畫して數井となし、上公家の賦役を失はず、退いて其私を以つて經界を正し、宅里を別ち、飲法を立て、儲蓄を廣め、學校を興こし、禮俗を爲し、蓄を救ひ、患を恤み、本を敦うし、末を抑へて以つて先王の遺法を推して當今の行ふべきを明かにするに足れり」と。實に之れ經濟上の重要な問題にして、現今に至るとも、學者の大に考究を要する所の事と爲す。張子大に周禮を重んじ、周の官制を美とし、「周禮は是れの當の書」(經濟理會周禮)なりと云へり(其後世の添入あるは十分之れを認む)。又た曰く「天下を治むること、井地に由らざれば終に平を得るに由なし。周道は是れ均平なり」と。又た井田法の行はれ易きを謂ふて曰く「井田至つて行ひ易し、但だ朝廷一令を出さば以つて一人を答たずして定まるべし」(同上)と。而して張子を用ゆる者あらば直に之れを實行して示めすべしとなせり。其志此くの如く熱心なりしと雖も、未だ其事を成すに至らず。

會々秦鳳の帥、呂公之れを薦めて曰く「張載の學善く聖人の遺意を發す、之れを

措いて以つて古に復すべし、乞ふ召して舊職に還へし、訪ふに治體を以つてせよ」と。詔して之れに従ふ。張子曰く「吾れ是行敢て病を以つて辭せず、庶幾ば遇ふことあらん」と。都に至るに及びて公卿風を聞いて之れを慕ふ。然れども未だ深く張子を知るものあらず。張子其の言はんと欲する所を以つて嘗て人に試む、多くは未だ之れを信せず。會々言者ありて冠婚喪祭の禮を講行せんと欲す。詔して禮官に下して咨問す。禮官故常に安習して、古今俗を異にすとの説を爲す。張子獨り以爲らく行ふべしと。然りと雖も議卒に決せず。張子悦びず。會々疾あり、謁告して以つて歸る。道の行はれ難きを知り、門人に其初志を成さんと欲す。西に歸るの途次洛を過て二程を見る。張子曰く「載病、起きじ、されども尙ほ長安に及ぶべし」と。臨潼に至つて沐浴して衣を更めて寢す。旦に及びて之れを視れば亡せり。歿するの日惟一甥側に在り、囊中索然たり。明日門人の長安に在る者繼いで來奔し、哭して車を挽いて歸り葬る。其喪禮を治むること一に古を用ゐ、以つて其師の志を終ふ。

此に吾人は張子の生死及び未來等の觀念を一瞥せんか。張子は宇宙萬物の

本體を以つて氣となせる人なり(學說一、萬物の本體を見よ)。物の生滅は氣の聚散のみ、其本體や一なりとなす。故に曰く「聚も亦吾が體、散も亦吾體、死の亡せざるを知る者、與に性を言ふべし」(大和)と。又た人の生死と宇宙との關係を云ふて曰く「氣の太虚に聚散するは氷の水に凝釋するが如し」(大和)。又た曰く「海水凝る時は氷り、浮ぶ時は漚たり。然るに氷の才漚の性、其存亡、海得て與からず。是れを推せば、以て生死の説を究るに足れり」(動物)と。之れ生死の觀念なり。敢て未來を云々して、靈魂の死不死を思ひ煩ふが如きことなし。生死の念に迷ふものは佛教なりとなす。故に張子は此點に於て、又た倫理破壊の點に於て佛教を攻撃せり。死は人生の常分なり、故に張子曰く「老いて死せざる、之を賊となす——幼にして教に率はす、長じて循ひ述ぶることなく、老いて死を安んせざる——三者は生を賊するの道なり」(有徳)と。死すべき時に死すべきは常道とせる張子、何ぞ死を云々せんや。然りと雖も張子、身死すと雖も死せざるものなきに非ずとなす、其物何ぞや曰く「道德性命は是れ長在不死の物なり。己が身は死すと雖も、此は常に在り」(義理)と。道德性命は即ち之れ天地の本體の有する所の性にして、

吾人死する時は之れに合體するなり。

張子は實に剛毅の人なり而して其理想や大なり。嘗て謂ふて曰く「天地の爲めに心を立て生民の爲めに道を立て去聖の爲めに絶學を繼ぎ萬世の爲めに太平を開く」(性理拾遺)と。あゝ天地心なし、人たる吾れ心なき天地の爲めに心を立てざれば天地爲すなけん。生民道を知らず、吾れ爲めに道を立てん。聖人と雖も後繼者無き時は學統絶ゆべし、吾に非ずんば誰か絶學を繼がん。萬世の太平を開く、之れ亦吾れの任なりとは、實に張子の抱負たりしなり。

朱子、張子の像に贊して曰く「早に孫吳を悦び、晩に佛老を逃る。臯比を撤するに勇にして、一變して道に至る。精思力踐、妙契疾書す。訂頑の訓我廣居を示めす」(全書十五卷)と。

學 說

一 萬物の本體

張子の倫理説は萬物の本體より論じ出づるものなり、之れを以つて吾人も亦張子の哲學に溯り、然る後倫理學に及ばざるを得ざるなり。

張子は萬物の本體を以つて「大虚なるものとなし、大虚なるものは又た「氣なるもの、本體となす。而して此太虚即氣なるもの、未だ有形の萬物とならざる時の状態は果して如何ん。張子之れを『易』より學び、其説を布演するものなり。今ま『易』(象上傳)の之れと同一の文を見るに、曰く「大なるかな乾元、萬物資つて始む……。乾道變化して各々性命を正しうし、大和を保合し……首として庶物を出だし……」と。張子之れと同じく「太虚即ち氣なるものを乾元と同一のものとなし、乾元が大和を保合せるが如く、太虚即ち氣なるものは大和を有して、一切事物の本源となす。張子は此の太虚或は氣なるもの、此の大本源の状態或は位置にあるときを稱して「太和」と云ひ、又「道」と云ふ。曰く「太和は所謂道なり、中に浮沈升降動靜相感するの性を涵す。是れ綱緼相盪し、勝負屈伸の始を生ず。其來るや幾微易簡なり」と雖も、其究りや廣大堅固なり「大和」と。此思想「易』より出で、又た子思の中庸を讚美したる説に基づくものなり。

此の太虚が太和の状態にあるに當つては無形無識なりと雖も、其の内に自有せる所の力に由り、氣の聚散を致して萬物を現象し、意識生ずとなす。曰く「太虚形なきは氣の本體。其の聚其の散は變化の客形のみ」(太和)と。即ち無形の本體なるものありて、其聚散に由つて有形の萬物を生ずるなり。而して此本體や全く無意識なりと雖も、物相交りて意識生ずとなして曰く「至靜感なきは性の淵源にして、識あり知あるは物交の客感」(太和)となす。此くて太虚の無形より氣の聚散に由つて有形生じ、無感無識より物交に由つて意識生ずとなす。其太虚を稱して本體と云ひ、現象したる所を生じて客感客形と稱す、之れ客なるものは常住性のものに非ざるを以つて客の名稱を與へたるなり。即ち本體は不變なりと雖も現象は生滅するを謂へるなり。故に曰く「客感客形と、無感無形とは、惟り性を盡くす者のみ之れを一にす」(太和)となす。之れ即ち佛教等に所謂本體と現象とは一にして二ならず、二にして一に非ず、能く其理を明かにせしもの其一にして二ならざるを知ると云ふ如きの語法となす。

張子は太虚と氣とを同一物となせるものゝ如しと雖も、又是れ別物にして、太

虚中に氣なるものありとなせるものゝ如し。然と雖太虚中には氣なきことを得ず、又た氣の種々に現象するは必然の理に由るものなりとなして曰く「太虚氣なきこと能はず。氣は聚りて萬物とならざる能はず、萬物は散じて太虚とならざる能はず。是に循つて出入す、是れ皆な已むを得ずして然り」(太和)と。已むを得ずして然るは之れ必然の理に由るなり。必然の理は如何ともすること能はず、之れを以つて「聖人は其道を盡くし兼ね體して累はされざるものは神を存する其れ至れり。彼の寂滅を語る者は往いて反へらず。有を執るものは物にして化せず。二者間ありと雖も道を失することを言へば均し」となす。即ち之れ必然の理に従うて事を處し、身を處するを謂ふなり。

然らば氣は如何にし萬物となるか——張子曰く「氣は太虚に塊然として升降飛揚し、未だ嘗て止息せず。易に所謂「網緝莊生の所謂「生物の息を以て相吹く野馬」なるものか。此れ虚實動靜の機、陰陽剛柔の始めなり。浮んで上る者は陽の清降つて下るものは陰の濁、其感遇聚散は風雨となり霜雪となり、萬品の形を流く、山川の融結する糟粕の煨燼するも亦、教に非ざるなし」(太和)と。

此くて氣聚れば形ありて物たり。其状宛も、氷の水に凝釋するが如し」となす。而して「氣聚れば離明_(目)施すことを得て形あり、氣聚らざれば離明施すことを得ずして形なし。其聚るに方つてや安んぞ之れを客と謂はざるを得んや。其散するに當つてや安んぞ遽かに之れを無と謂ふことを得んや」_(太和)となす。其形は現象なり、生じ又た滅す。其の生するや客形なり、而して滅すと雖も「太虚即ち氣」なるを以つて「無なし」尙ほ太虚即ち氣の本體存せるなり。

元來此太虚なるもの、性質は如何なるものぞ。張子之れに道德的の性質を與へて謂ふて曰く「太虚に由つて天の名あり、氣化に由つて道の名あり。虚と氣とを合せて性の名あり、性と知覺とを合せて心の名あり」_(太和)と。天と謂ひ、道と謂ひ、性と謂ひ、心と謂ふ、皆な古來神聖なる意味を含ませて傳へ來れる言語名稱にして、此の宇宙の本體は、道德的の性質を有せるものとして説明せんとする傾向の言語なり。故に張子は又た一切萬物の生滅變化を謂ふて「教に非ざるなし」_(太和)となし、精粕の煨燼するも教へなりとせり。之れ本體たる太虚は道德性を有せるものにして、其物の作用たる一切の事は、又た道德的の教義を含有せりと

なすに基づくものなるが如し。

二 性及び誠——天地の性と氣質の性

張子又た子思及び周子等に倣ひて性及び誠を貴び、之れを以つて萬物の本源となし、實體となせり。故に性を謂ふて曰く「性は萬物の一源なり、我が得て私することあるに非らず」_(誠明)と。又た誠を謂ふて曰く「天の長久にして已まざる道は所謂誠なり、仁人孝子の天に事へ、身に誠なる所以は仁孝に已まざるのみ。故に君子は誠を之れ貴となす。誠に是の物あらば終あり、始あり、僞は實に有らず、何の終始あらん。故に曰く誠ならざれば物なし」_(誠明)と。之れ、誠を以つて單に人事倫理の重要なものとなすのみに非ずして、子思と同じく宇宙の要件否な或は本體なりとまでに論じ貴ぶ所の言となす。かの「誠ならざれば物なし」とは、之れ子思の意見に異ならざるなり。

此の性及び誠は宇宙萬物の本源にして、萬物に瀰漫して在らざるなく、萬物皆な以つて體となす。此の萬物の本體たる「性」の人に在るや、張子は以つて「水性の

氷に在るが如し。疑釋異なりと雖も物たること一なり〔誠明〕となす。張子又た子思と同じく「性を盡くす」ことを云ひ、人間の道義此に完きを得となして曰く「心能く性を盡くすは、人能く道を弘むるなり」〔誠明〕と。即ち性を盡くすは善となすものなり。

今若し、性を盡くし、自己の性を完うすることにして善なりとせば、性の善なることを前定せざる可からざるなり。然り張子は性即ち萬物の大源たる「性は善なるものなりとなせり。曰く「性の人に於けるや善ならざるなし」〔誠明〕と。性は天の與へたる所、しかあれ」と天の命じたる所故に又た一面より見る時は「命」と謂ふ。張子又た命を謂ふて曰く「命の人に於けるや正からざるなし」〔誠明〕と。天其の之れを人に命するや正しからざるなく、人之れを受けて性とするやまた之れ善ならざるなし。然りと雖も張子が性及び命の善なるを謂ふや、始めより以つて善なりと獨斷して論じ起こすものにして、毫も其善なるの論證は之れを爲さざるなり。故に之れ性善論の獨斷説と謂ふべきなり。

張子の説に由る時は、かの萬物の本源たる大なる性なるものは善なりと雖も、

之れ未だ人たり物たらざるの前、即ち有形の個物とならざる前の事にして、之れ純粹無雜の性たり善たり、即ち「天地の性」なり。然るにこゝ氣の必然の理由に由つて萬物と化し、有形となり、個物となるに及びてや、張子こゝに「氣質の性」なるものありとなし、純粹の性善に混するに氣質の不純なるものを以つてせざる可からずとなして曰く「形而後は氣質の性あり」〔誠明〕と。此に於て、吾人は性を論ずると單に「天命の性」張子「天地の性」と謂ふのみを以つてすること能はずして、氣質と云ふことを算入して論せざる可からず。

天命の性即ち天地の性なるものは善ならざるなく、正しからざるなしと雖も、氣質の性なるものゝ雜入するに當つてや、吾人人間たる者は天地の性の純善を保つこと能はず、或は不純となり、又其正を得ざるものあり。故に張子は天地の性に復歸すべしとして曰く「性の人に於けるや善ならざるなし、其の善く反へると善く反らざるとに繋るのみ。天地の化を過ぐれば善く反へらざるものなり。命の人に於るや正しからざるなし、其順ふと順はざるとに繋るのみ。險を行ふて以つて僥倖するは命に順ならざる者なり。形より後は「氣質の性」なり、善く之

れに反へる時は「天地の性存す、故に氣質の性は君子性とせざる者あり」(誠明)と。之れ復性説なり。程子が「學は氣質を變ずるに至つて方に是れ切なり」とせしは、又た之れ張子の意たるなり。

張子尙ほ天地の性に反へることに就いて論じて曰く「人の剛柔緩急才と不才と有るは氣の偏なり。天は本と參和不偏なり。其の氣を養ひ之れが本に反へつて偏ならざる時は、性を盡くして天なり。性未だ成なざれば善惡混す。故に聖々として善を繼ぐ者は斯くに善を爲す。惡盡く去る時は善因つて以つて亡ぶ。故に善と云ふことを含いて、之れを成す者は性と云ふ」(誠明)と。性天地の大性は善なりと云ふと雖も、惡に對したる意味の善に非ずして、絶對の意味を以つて之れを謂ふなり。故に之れを善と云ふは、假りに之れを謂ふものにして、其真正の言語を以つてせば善に非ず惡に非ずして、性なりと云ふべきのみとなす。然り之れ大和なり。

而して性は人の受くる所命は天の命する所、兩者同一物にして、同じく善たるなり。然と雖も氣質及び偶然なるものには甚しき除外の場合ありとなして曰

く「人一たびし己れ百たびし、人十たびせば己れ千たびす、然るに至らざるありて猶ほ性を語り難き時は、以つて氣を謂ふべし。行同うして報異なる時は命を語り難し、以つて遇を謂ふべし」(乾稱)と。之れ氣質の偏固甚しき場合なり、遇然の甚しき場合なりとす。

此くて純善の性に、氣質を混じてこゝに中正を失し、惡を生ずとなす。然りと雖も、性善なると同時に、氣も氣質も亦善なるべき筈のものなり。然るに氣の偏を生ずるは如何なる理由なるか。若し氣なるものは宇宙の本體にして其の屈伸運動の作用にして正を得たらんには、焉んぞ人に於て氣質の偏あらんや。其の、れあるは、太虚中の氣の運動作用の正を得ざるに由ると云はざる可からず。若しそれ然りとせば萬物の本體は純然と云ふ可からざるなり。張子が氣質の性を云ひしは、其内眞理ありと雖も、之れを宇宙論本體論と連結して考ふる時は、本體論に於て、其道徳性あるを云ひ、純善を云ふに於て、衝突なきこと能はずと謂はざる可からず。

然りと雖も、兎にも角にも張子は性、氣——即ち天地の性は善なりとし、其善に

反へり、性を知り、性を盡くすべきことを謂ひ、大に之れを重んじ、又た一方には氣質を變化すべきことを云へり。

吾人は先づ第一に如何にせば天地の性を知り、之れを盡くすべきやとの、張子の知識論を見んと欲す。

三 道德上の知識論

吾等の力むべき所は、今や如何にせば性に反へるべきや、其道如何んと云ふにあり。張子の言ふ所に由れば此道德上の知識を得るには二種の方法或は二種の人物ありとなせるものゝ如し。即其(一)は事物の理を窮め、之れを明かにして誠を致し性を盡くすものなり。其(二)は自然の内心より誠にして自然に明かにして性を盡くすものこれなり。即ち一は學問に由つて之れを知り、他は直覺に由つて之れを知る者なり。其の言に曰く「明かなるより誠なるは理を窮めて性を盡くすなり。誠なるより明かなるは性を盡くすより理を窮むるなり」(誠明)と。然らば事理を窮むるとは如何にすべきや、又た誠より自然に性を盡くし之れを

知れる人物とは果して如何なる人物なるやと謂ふに於ては、張子別に論證する所あらざるなり。

然りと雖も張子の知識論は、寧ろ事物の理を窮めて性を知るの方法よりも、良知良能、直覺の説を取る者ゝ如し。故に曰く「誠明の知る所は乃ち天徳、良知。開見の小知に非ざるなり」(誠明)と。天徳良知なるものは、之れ自有自發の知識力にして、開見五官の感覺より來る所のものに非ざるなり、誠より自然に明かなるなりとす。之れ子思と同一説にして、子思已に中庸二十一章に於て「誠より明かなる之れを性と謂ふ」と云へるに同じ。孔子が又た「誠は勉めずして中り、思はずして得、從容として道に中るは聖人なり」(中庸二十一章)と云へるも亦同説にして、之れ直覺説なり。

張子は耳目見聞の知、即ち感覺より得來る所の知を下とし、誠明の知識を以つて眞の大なる知なりとなし、若し眞の性を知り道を知らんとするものは必ず心の從來する所を知らざる可からずとなす。曰く「天の禦まらざるは太虚より大なるはなし、故に心知之れを廓かにし、其の極を究ることなし。人の病は耳目の

見聞を以つて其心を累はされて其心を盡くすことを務めざるにあり。故に其心を盡くさんことを思ふものは、必ず心の從來する所を知つて後能くす〔太心〕と。張子の意に由る時は耳目は素より知識を得内外を合するの要ありと雖も亦「性の累を爲す〔太心〕ものなるを以つて、苟も眞の大知識を得んとせば、見聞耳目を脱出し墻壁を撤去し、以つて心の本源萬物の本體に合一し、以つて「性」「道」「義」「虚」等に直接せざる可からずとなす。

其誠明の知に由つて性を知る(即ち道德上の善の何たるやを知る)は果して如何なる理由或は基礎有るに由るぞ。同く張子の哲學に由れば、萬物は氣萬物の本源本體の生ずる所にして、人も氣を以つて體とするを以つて、自體中には自然に其本體の知即ち氣即ち性の知識あるべき筈なりと云ふにあるものゝ如し、故に曰く「狀るべきは皆な有なり。凡そ有は皆な象なり、凡そ象は皆な氣なり。氣の性は本と虚にして神なる時は、神と性とは乃ち氣の固有する所。此れ鬼神、物に體として遺すべからざる所以なり」〔乾稱〕又曰く「匹夫匹婦と雖も、天の聰明に非ずんば其人と爲るを成さず、聖人は天の聰明を盡くす者なり」〔至宮〕と。即ち虚神、

性、是等は皆な氣の有せる所にして、人と雖も之れを有す。匹夫匹婦と雖も自體に天の聰明あり、故にたゞ自ら自己の知識に由つて自己の性を知るを得るなり。故に張子の哲學に由れば、吾人の性を知り道を知るは素より我分内のものを知るものなりと雖も、我を立て、其我なるものゝ知に頼るに非ずして、寧ろ萬物の本源にして、又た吾身の實體を爲せる所の性其物の自有せる知力に頼つて之れを知るとなすものなり、換言せば、自力自功に非ずして、天功なりと謂ふべきなり。曰く「吾が身を成すものは天の神なり。性を以つて身を成すを知らずして、自ら身に因つて智を發すと謂ひ、天功を貪りて己が力となす、吾れ其知れることを知らざるなり」〔太心〕。

性は自ら性を知る、之れを以つて性知らんと欲せば性のまゝに誠なるにあり。至誠なるにあり。故に曰く「至誠は天性なり、息まざるは天命なり。人能く至誠なれば性盡きて神窮むべし。息まざれば命行はれて化知るべし。學、化を知るに至らざれば眞得に非ざるなり」〔乾稱〕と。此くて至誠以つて知を致す時は、之れ天地の大性の知を得るものにして、此に至つては、人は實に天地と合體せる

ものと云ふべきなり。故に曰く「天萬物を内に包載す。感ずる所性とする所は乾坤陰陽の二端のみ。内外の合するなく、耳目の引取なく、人物の叢然たるを異なり。人能く性を盡くし天を知り、叢然の爲めに見を起こさざれば幾かし」(乾稱)と。あゝ此に至つては、吾れや叢然たる小物に非ずして、實に天地と大たるなり。張子尙ほ進みて曰く「有無一に、内外合す。此れ人心の自つて來る所なり。聖人の如きは専ら聞見を以つて心と爲さず、故に能く聞見を以つて用と爲さず。感ぜざる所なき者は虚なり、感は即ち成なり、萬物本と一なるを以つて故に能く異を合す。其の能く異を合するを以つて之れを感と謂ふ。異なるにあらざれば合することなし。天の性は乾坤陰陽なり、二端なり。故に感あり。本と一なり、故に能く合す。天地の萬物を生ずるや、受くる所同じからずと雖も、皆須臾の感ぜざるなし、所謂性は即ち天道なり。感とは性の神なり、性とは感の體なり。惟だ屈伸動靜終始の能く一なるなり。故に萬物に妙にして之れを神と謂ひ、萬物に通じて之れを道と謂ひ、萬物に體して之れを性と云ふ」(乾稱)と。此くて誠に自己の本體を察知せば、性を知り、道を知り、以つて吾人は如何にせば性を盡くし、善

たる得るやを知るべしとなす。

子思の知識論は、此くの如く實驗的に感官より得るとせるものに非ずして、自己の誠明に由つて直覺に知るものを以つて大となし眞知となす。

此くて張子は萬物の本體たるものは氣なり、性なりとし、吾人人間も亦其氣或は性の生じたる所なるを以つて、其本體に歸入し、内省自察せば自然に其自性を知り、道を知るべしとなす。其立論は「性とば萬物の一源」なりと云ふにありとなす。

然りと雖も此誠明の知識なるものは、果して何人と雖も能く得べき所なるか否か。孔子は曰く「誠は勉めずして中り、思はずして得、從容として道に中るは聖人なり」と。張子も亦同じく曰く「惟り大人能く其道を盡くす。是故に立てば必ず俱に立ち、知れば必ず周く知り、乗すれば必ず兼ね乗じ、成れば獨り成らず。彼の自ら蔽塞して吾が理に順ふことを知らざるものは未だ之れを如何ともすることなし」(誠明)と。こゝに張子、惟り大人のみ能く其道を盡くすとなせり。是に由つて之れを觀る時は、此誠明自然の直覺は、甚だ得難きものなるが如し。故に

之れは聖人の域の人の能くする所と云ふべきなり。然らば吾人の問ふ所は、直覺なるもの果して存するや否やにして、此論は又た溯りて張子の本體論の前定に至りて批評を加へざる可からずと雖、張子は是等の點に於て證明する所あらざるなり。

四 天地萬物我と一體なり

張子は太虚、氣、性、等皆な之れ一物にして、其種々の聚散を爲したるものを物となす。故に事柄は千羅萬象なりと雖、其體や一にして、人は萬物中に特殊の如きものなりと雖、實は之れ萬物と一體を爲し、宇宙の大系統を爲せるものに外ならざるなり。故に彼の『游氣紛擾合して質を爲すものは人物の萬殊を生じ、其の陰陽兩端循環して已まざるものは天地の大義を立つるものにして、其本體は謂はば太虚なり、又た氣なり。一たるなり。故に天地あり、人物の萬殊ありと雖も、物に孤立の理なし』(動物)、『萬物本と一なり』(乾釋)故に物相感ず。一ならざれば相感することなしとなす。張子之れを例證するに、鳳凰來義するは是關聯せる、一た

る本體の發動に由つて、人と物と相感通するに由るとなせり(太和)。之れ其感通の一例なり、天と人、人と物、互に相感するは本體一なればなりと。

以上は天地人物の一體なることを外形上より論じたる所なりと雖も、張子又た之れを心の方面より論じ、吾が心を大にする時は天地萬物一體なりとなす。之れ「我」を擴大するの論たるなり。而して我を擴大するは心を大にするにありとは張子の言ふ所にして、心を大にするは我を大にするを意味するなり。然らば心とは如何なるものぞ。張子は心を以つて、世間の所謂、或は宗教家等の信する如き一箇常住の心體、或は靈魂なりと爲さざるなり。故に「人本と心なし」(語錄)となし、物に因つて心ありとなす。故に物は心の原因にして、又た内外の墻壁を去るときは物は心なり。一切の萬物を心となすときは、我は一切の萬物に體し、萬物我たるなりとは張子の意なり。故に曰く「恐くは聞見を以つて心と爲さば、以つて心を盡くすに足らず。人本と心なし、物に因つて心と爲す。若し只だ聞見を以つて心と爲さば、但恐くは心を小却せん。今天地の間に盈るものは皆な物なり。若したゞ己が聞見の接する所に據らば、幾何ぞ能く天下の物を盡くさ

ん〔語録〕と。張子の「大心」論は實に「大我論」なり。又た曰く「其心を大にすれば能く天下の物に體す。物未だ體せざるあらば心外ありとなす。世人の心は聞見の狭に止まると雖も、聖人は性を盡くし、見聞を以つて其心を梏せず。其天下を視ること一物の我に非ざるなし。孟子の心を盡くす時は、性を知り天を知ると謂へるは此れを以つてなり。天は大にして外なし。故に外有るの心は以つて天心に合ふに足らず。見聞の知は乃ち物交はりて知るものにして、徳性の知る所にあらず。徳性の知る所は見聞に萌さず……人己れ知ること有りと謂ふは耳目受くること有るに由るなり。人の受くる有るは内外の合するに由る。内外を耳目の外に合することを知る時は、其知たるや人に過ぎたるを遠し〔大心〕と。此くて心を大にし、自己を以つて天地の本體に合し、以つて大觀するに於ては萬物の體はやがて又た我が體なり。而して萬物彼我通じて一たるなり。たゞ耳目の知、即ち彼我の間隔區畫ある知識の爲めに、自ら我れを小となすは張子の悲しむ所となす。

孔子四つのものを絶つ、曰く意我意、曰く必必期、曰く固固執、曰く我我執、之れな

り。張子亦天地萬物に合體するに於いて此四者を以つて妨碍を爲すものとなす、何となれば此四者は皆な箇人的、孤立的、分離的、衝突的、區畫的の性質のものたればなり。曰く「意は思ふ所なり。必は待つことあり、固は化せざることあり、我は方あり、四者一あらば天地に相似ざるなり。天理一貫せば、意、必、固、我の鑿するなし。意、必、固、我の一物と雖も存する時は誠に非ざるなり。四者盡く去る時は直養して害することなし〔中正〕と。而して「浩然として害することなければ天地と徳を合す〔至當〕となす。即ち之れ天地と一體となり、所謂天地と「流を同じう〔至當〕するなり。

大人とは如何なるものぞ、曰く、大なる「我れを有せるものなり、小人とは如何なるものぞ、曰く自ら其心身を區畫して小とせるものなり。故に張子曰く「大人は物を容るゝ有つて物を去つることなし。物を愛することあつて物に拘ふことなし。天の道然り。天は直を以つて萬物を養ふ。天に代はりて物を理るものは曲成して其直を害せず、斯に其道を盡くす。志大なれば才大に、事業大なり。故に曰く大なるべしと。又た曰く、富有と。志久しき時は氣久しく、徳性久し、故

に曰く、久しかるべしと。又た曰く日新と（至當）と。此くて物を排斥せずして之れを容れ而も悪は之れを正しうし、長久日新、以つて我れの徳性の進歩と擴大とを力む。之れ實に大人の爲す所なり。大人の志の大ならざる可からざるは、其の以つて天地と相似んが爲めなり。張子曰く「道の久しかるべく大なるべき所以は、其天地に似て離れざるを以つてなり。天地と相似ざれば其の道を違（至當）ると遠し」と。

大人は物を排斥せざるなり、故に又た争ふことを爲さざるなり、何となれば争ふは分離なり、排斥なればなり。之れ以つて心を大にする所以に非ず。且つ君子は、屈伸の理を知り、物の得喪なきを知ればなり。曰く「幾を知るを、能く屈を以つて伸を爲すとす。君子は争ふ所なし。彼れ伸ぶる時は我れ屈するは知らず。彼れ屈する時は吾れ伸びずして伸ぶ、又た何ぞ争はん。容れざることなくして屈伸の道を盡くす。至虚なれば伸びざる所なし。君子は争ふ所なし。幾を屈伸の感に知る。義を精しうして神に入り、伸に争はざるの地に交はる。順之れより甚しきなく、利之れより大なるなし。天下何をか思ひ何をか慮らん。

屈伸の變に明かなれば斯に之れを盡くす（至當）と。

君子は天下を以つて己れに一體となす、故に自己の私なく、又た人を惡むことなしとなす。曰く「君子の天下に於けるや、善を達し不善を達す。物我の私なし。理に循ふ者は共に之れを悦び、理に循はざるものは共に之れを改む。之れを改むる者は過ち人に在りと雖も己に在るが如くにして、自ら誣ふることを忘れず。共に悦ぶものは、善己に在りと雖も、蓋之れを人に取つて爲し、必ず以つて人と與にす。善、天下を以つてし、不善、天下を以つてす、是れを善を達し不善を達すと謂ふ（中正）と。

張子此く我れと天地萬物とを一體となし、内外を合一せんことを理想となすと雖も、其之れを合一するの趣きや如何ん。或は一種の凡神論の如く、我れを以つて或大なる存在者の一發現となし、我れは其物の一部分なりとすべきか、或は唯心論者の論の如く、天地萬物は我が心の發現する所にして、此の點よりして天地萬物は即ち我れと同體なりとなすべきか。張子の説は前者にして、後者は之れを小となし、天功を貪るものとなし、佛者等の誤謬の論となせり。前にも云へ

るが如く、張子は萬物の本體は氣性、或は神等の名稱を有するものにして、人は此物の生ずる所なり、現象なり、容形なりとなせるを以つて、張子の所説は一種の凡神論なりと云ふべきなり。曰く「吾が身を成すものは天の神(本體の氣性等)なり。性を以つて身を成すことを知らずして、自ら身に因つて智を發すと謂ふは、天功を貪り己が力となす。吾れ其知れることを知らず……。物に體たり、身に體たるは道の本なり。身にして道を體とすれば其の人となりや大なり。道能く身を物にす、故に大なり。身を物にすること能はざれば身に累はさる。藐として其れ小なり。能く天を以つて身に體するときは能く物に體するや疑はず……。我を以つて物を視れば我れ大なり、道を以つて物我に體する時は道大なり。故に君子の大は道に大なり。我に大なる者は狂たるを免かれず(大心)と。我れは道或は性の化身なり、我體は即ち宇宙の本體たる性を體とするものなり。而して道や窮るなきの大なるものなるを以つて、其を體とせる我れや、又た大ならずんばあらざるなり。我れよりして物を視れば我れ素より大にして、天下の物を小とするに足れり。道よりして物我に對する時は道大なり。然りと雖も、我れ

は道を體すとせば、其道の大なるは、やがて之れ我れの大なり。故に道を體とする者は其の人となりや大なり。眞に天地萬物に體し、其身は天地萬物其物となり。若し之れに反して「成心」を有し、我意を有し、人欲を區々たる一物に畫するが如きは(大心)之れ小人の爲す所なりとす。

張子此の凡神論を以つて天地と我れとを一とし、以つて大人の大人たるは此の道たり性たる本體の知に達して天地大の人となるにありとなせり。而して彼の佛者の唯心論を以つて誤謬なりとして曰く「釋氏天命を知らず、心法(唯心)を以つて天地を起滅し、小を以つて大を緣し、末を以つて本を緣す。其窮むること能はずして之れを幻妄と謂ふ、眞に所謂氷を疑ふ者か。釋氏六根(感官)の微を以つて天地を因縁す、明盡くすこと能はざる時は天地日月を誣めて幻妄となし、其用を一身の小に蔽はれ、其志を虚空の大に溺らす。此れ大を語り小を語つて流通して中を失する所以なり。其大に過ぐるや六合を塵芥とし、其少に蔽はるゝや人世を夢幻とす。之れを理を窮むと謂ふて可ならんや。理を窮むることを知らずして性を盡くすと謂ふて可ならんや(大心)と。然り佛敎の唯心論は純然

たる哲理よりするも素より誤謬にして、唯念論より實驗論に進行せざる初歩の未熟の哲學たるに過ぎず、且つ其倫理の點よりする時は、唯我を以つて獨尊となし、明かに倫理の基礎を覆がへし、人生を夢幻視して、道義の要なからしむるものたるなり。

五 天地萬物我と一體の感——「西銘」

張子の哲學は、宇宙の本體より論じて、萬物體を同じうして種々に發現せるものとなせるは前述の如しと雖も、又た感情の點より天下を一家となし、天地を父母となし、萬物を與物となし、人々を同胞となし、道德の大系統を一家の家族的に組織せる所の「西銘」の一篇あり、又た高尚なる大文字となす。其言に曰く——
「乾を父と稱し、坤を母と稱す。予れ茲に藐焉たり、乃ち混然として中に處る。故に天地の塞は吾れ其體、天地の帥は吾れ其性。民は同胞、物は吾が與なり。大君は吾が父母の宗子、其大臣は宗子の家相なり。高年を尊ぶは其長を長とする所以なり。孤弱を慈しむは其幼を幼とする所以なり。聖は其徳を合し、賢は

其秀たるなり。凡そ天下の疲癯殘疾、憐獨寡は皆な吾兄弟の類、連して告ぐるなき者なり。こゝに之れを採つは子の翼しむなり、樂み且つ憂ひざるは孝に純なる者なり。違ふを悖徳と云ひ、仁を害するを賊と云ひ、惡を濟す者は不才、其形を踐むは惟れ背たる者なり。化を知る時は善く、其事を述べ、神を窮むる時は善く、其志を繼ぐ。屋漏にだも愧ぢざるを忝しむるとなし。心を存し、性を養ふを懈るに非ずとなす。旨酒を惡むは崇伯が子の養を顧みるなり。英才を育するは類の封人の類に錫ふなり。勞を弛へずして豫を底すは舜の其功なり。逃るゝことなくして烹るを待つは申生が其恭なり。其受くるを體して全を歸へす者は參か。従ふに勇みて令に順ふ者は伯奇なり。富貴福澤は吾が生を厚うせんとし、貧賤憂戚は庸つて汝を成るに玉にするなり。存すれば吾れ順事し、没すれば吾れ寧んす。」(西銘)

天下は一家なり、天地(乾坤)は父母なり、吾れ天地の子として藐焉として中間にあり。故に天地有形の部分は吾が體として表はれ、天地の氣は吾が性となりて存す。吾れや天地の子、即ち小天地なり。人々は我同胞なり、萬物は同類なり。

大君は吾が父母の宗子なり、不幸の人々は吾兄弟の顛連して告ぐるなきものなり、自ら能く其性命を保つは子としての慎しめるなり、天を楽しみ、憂うるなきは孝に純なるなり。富貴も貧賤も、皆な吾れに益たり。生存すれば天地に順ひて事へ、樂しみ、死する時寧んじて天地の命のまゝに従ふのみとなす。

『西銘』……若し哲理を以つて批評する時は、素より正堅なるものに非ずと雖も、其感情を以つてすれば實に之れ偉大なるものなり。愛の教へこゝにあり、忠の教へこゝにあり、孝の教へこゝにあり、生死に安んずるの教へこゝにあり。其感情の高尙にして、藹然たる和氣ある、決して耶蘇教、佛教等の死を畏れ、未來の賞罰を以つて人を畏すが如き下等なるもの、比に非ざるなり。人若し宗教なかる可からずとせば、余はこゝに之れを取らんかな。程子西銘を稱して曰く、『訂頑』西銘の言極めて純にして雜なし、秦漢以來學者の未だ到らざる所なりと。或は以つて韓退之の原道に比較して曰く、『孟子』の後只原道的一篇あり、其間言語固より病多し、然りと雖も大要理に近し。西銘の如きは是れ原道の宗祖なり。原道は未だ西銘の意志に到らずと。而して又た其『筆力』を稱賛す。今ま若し『西銘』

と『原道』とを比較すれば西銘には一種形而上學の分子あり、天地的に立説すと雖も、原道は凡て實際的にして人間的の立説なり。西銘は理想的感情なりと雖も、原道は實踐さるべき法則道義なり。韓退之は社會國家を重んずと雖も、張子は宇宙と人類とに就いて云へり。吾人は韓退之の實際的なるを採ると同時に、又た張子の理想的感情を美とするものなり。

六 最大數の幸福

聖人の心とする所は何ぞや。曰く、最大數の人々をして、各々其幸福とする所を得しむるにあり。然らば其幸福とは如何なるものと爲すべきぞ。或は以つて最大幸福となすべきか、或は以つて分量的大小を以つて云ふ可からず、其高下を以つてすべしとなすべきか。吾人は此くの如き問題は甚だ無益の論となす。何となれば幸福は之れを大小を以つて言ひ表はすも、亦た之れを高下を以つて言ひ表はすも、何れも之れ形容の言語にして、大小を以つて非とし、高下を以つて言ひ表はすべしとするも、何が故に「高き」ことは吾人の取るべきことなるかと云

ふに至つては、毫も基礎あるに非ざるなり。故に大小と云ひ高下と云ふ、何れも吾人は形容詞に過ぎずして、何れにするも可なりとなす。張子善を謂ふて「欲すべき之れを善と謂ふ」(中正)となせり、之れ孟子の言へる所なり。而して欲すべき所の事物は何なりとも之れを善と云ひ、幸福と稱して不可なるなし。而して吾人は其幸福は各自の以つて幸福とする所を以つて幸福となさば可なり。

又た其幸福は果して最大數を目的とすべきや、或は少數の或部分を目的とすべきやとの論に至つては、吾人は云はん、成らん限り、最大數の人間に幸福を與ふるやうなすは、之れ最も望ましきことにして、最大數は實に仁人の理想とし、主とし、度とし、標準とする所なりと。

張子は最大數の幸福を以つて大人の目的とすべき所とするの人なり。故に曰く「大人の存する所、心とする所は必ず天下を以つて度となす。故に孟子の人を數ふるや、貨色の欲、親長の私と雖も、之れを天下に達して後に已む」(中心)と。又た曰く「必ず博く施こし、衆を濟ひ。之れを天下に擴め、之れを無窮に施こさんと欲せば必ず聖人の才有つて能く其道を弘む」(至善)と。之れ貨欲たれ、色欲たれ、音

樂欲たれ、又たは庭園の欲たれ、皆な人々の幸福たるを認むるものにして、聖人たるものは、天下の人々の此欲を達せんことを心とし、敢て幸福に上下の別を立てず、人々をして成らん限り、一様に其欲する所に従つて、之れを得しめんとするなり。此に於て張子は、最大數即ち天下の幸福を得しむる所の行爲を以つて善となすものなり。

張子の主義は最大數——天下——の善を以つて目的となす。天下の善は、天下の人々の欲する所を得しむることなり。欲することを得しむるは、之れ幸福を得しむることたるなり。故に人の徳なるものは「天下の善を主となす」(有徳)ものにして、天地萬物は一體なるを以つて、天地萬物は、大なる我なり、我は我身を愛するを以つて、吾人の天下の善を欲するは「天下の一なるに原づく」(有徳)なり。而して人々天下の善を欲せば、天下治安にして、こゝに「善は治に歸す」(有徳)と云ふべきなり。要するに「天下の善」は之れ道徳の目的と云ふべく、又た理想と云ふべきなり。

七 中正主義

欲すべきこと之れを善と云ひ、天下の善は大人の目的とする所なりと雖も其の如何にせば自他に眞に善なるやと云ふに至つては、又た其標準として、之れを自己一身の好悪以外に、確固たるもの求めざる可からざるなり。張子之れを「中正」となす。中正は張子の道德の標準とする所にして、之れ天下の道を貫くものなりとなす、曰く「中正にして然る後天下の道を貫く」(中正)と。中正は之れ天下の道の中心を貫く最も主要なるものたるなり。「此れ君子の正に居るを以つて大なりとする所以なり。蓋し正を得る時は止まる所を得、止まる所を得る時は以つて弘めて大に至るべし」(中正)となす。此くて中正を大にして、大なる所の中たる「大中」を得而して其最も正しき所の「至正」(至正)を得べきことを云ふなり。

中は實に人の立つべきの位置にして、其立つべきの位置を得て、以つて其徳を大にすべしとは張子の意なり。故に曰く「學者中道にして立つ時は、位の以つて之れを弘うすることあり、中道にして弘うすることなき時は、大を窮めて其居を

失す。其居を失すれば、地位の以つて其の徳を崇うするなく、及ばざる者と同じ」(中正)と。此くて人は中正を以つて自己の立場となすべきなり、故に「徳大中を以つて極となすことを知るは、至りを知ると謂ふべし」(中正)となす。大中至正之れ徳の目的とする所なり。

然らば大中至正を得るの方法如何ん、張子曰く「中庸を擇んで固く之れを執るは乃ち之れに至るの漸なり」(中正)と。即ち中庸は大中至正に至るの方法なりとなす。

然りと雖も中庸は又た如何にして之を發見するを得るか。曰く「惟だ學を知つて然る後能く勉む、能く勉めて然る後日に進みて息まずして期すべし」と(中正)又た曰く「其大を極めて後、中求むべし、其中に止まりて後、大有すべし」と。思ふに中庸たゞ漠然として之れを得べからず、必ずや學知以つて勉めて日に其中たる所以を明かにし、其果して中なるや否やを窮め、又た心は大を極めて眼界を大にし、中の果して何處にあるやを識り、以つて此に居り、此に居つて其徳を擴大すべしとなすものなるが如し。而して論此に至つては、中庸發見と學問或は徳義と

知識との關係の問題に立ち入らざる可からざるなり。

八 知識と徳行

張子の説に由る時は人の性は善にして、性中自然に徳行法則の知識ありとせるものゝ如しと雖も、張子は決して普通の直覺主義の論者、或は良心論者等の如く知識と徳行とは關係なし、知識なくとも徳行の人たるを得べしとなし、道德上の小成主義に安んずる人に非ざるなり。

之れ聊か張子の直覺主義「誠明」の知なる説に背反せるが如き趣ありと雖も、生知直覺は聖人の事にして、此くの如きことあり得るや否やは別問題なり、常人は學びて知らざる可からざる域の着なるを以つて、此の點に於て張子が學問を奨勵せるものと見ば、毫も張子の倫理學組織に衝突を生ぜざるものゝ如し。又た知識其本源は如何なりとするも、が徳義に必要なものなりとの説は、最も聽くべきの論となす。

張子の意に由る時は大中至正は道德の至高なる所なりと雖も、其の之れに達

するには、學を知り、大局を觀、見識を大にして、眞の中正は果して何處にあるやを明にせざる可からず、然らざる時は其人小道德家たるに過ぎずして、大道德の人たること能はずとなす。故に張子道德の大成には、大なる知力と學問を要すること論じて曰く「徳性を尊ばざれば學問従つて道らず、廣大を致さざれば精微其の誠を立つる所なし。高明を極めざれば中庸を擇んで時に措くの宜しきを失す」(中正と)。眼界を擴大し、思想上富豊なる材料を以つて、前後相對し、原因の生ずる結果を考へ、或は彼此相比較し、遠近大小長短高下を明かにし、廣大を致し、高明を極め、以つて中正の眞の所を得ることを爲すべきなり、然らざる時は、吾人の中庸なりと思ふ所も、或は其れを誤ることなれば、非善と思ひて爲したる事も時に不善の結果を生ずることあり、之れ大に避けざる可からざることにして、意志の善と結果の善とは、互に相違ふこと無からしむるこそ、眞の道德の精神を得たるものにして、又大道德と謂ふべきなり。かの少學小知を以つてして、假令善意ならしむるも、其結果は豫想に背馳し、不測の不良のものたるが如きは、之れ不完全なる道德と謂ふべく、意志のみ善なれば、其結果は如何ならんとも可なりと

する所のカント流の倫理は、道德上の小成に安んずる主義と謂ふべく、又た其意志の善と結果とを相合一せしむることを力めざる、道德上の怠惰主義、儉安主義と云ふべきなり。

故に若し道德をして大道徳たらしめ、善意をして、其意の如き結果を得しめんとせば、決して儉安姑息、所謂不完全なる良心などを以つて唯一の指導とすることなく、必ずや、十分の學を爲し、忠慮を練り、品性を陶冶し、理想を養成し、こゝに始めて得らるべきなり。意志の善は、勿論之れを要すと雖も、其内容の善の實なき時は、單に之れ虚形のみ。學問知識は、其虚形に實質を與ふるものと謂ふべし。知識豈に貴ばざる可けんや。

張子曰く「事豫めすれば立つ」(中正)と。之れ知識の以つて前見的のものあらば、意志と結果と合一して成功するを云へるものなり。之れを爲すは「教の以つて之れに先んずるある」に由る。教へは即ち知識なり。而して教への善を盡くすは必ず義を精うし以つて之れを研く、義を精うして神に入り、然る後に立ちて斯に立ち、動いて斯に和す」となす。「義を精うし」之れを研き「神に入り」等の語は皆な

之れ知識の奨励なり。

かの所謂善人なるものは善意ありと雖も、知に於いて缺くる所あるの人なり、聖人なるものは善意に兼ぬるに知ある人なり、一は不完全なり小なりと雖も、他は完全なり大なり。故に張子、善人を卑しむに非すと雖も、尙ほ道德を大成せしめんとして、學問知識の必要を言ふて曰く「善人なる者は仁に志して未だ其の學を致さず。能く惡なきのみ。君子之れを名づくる、言ふべきこと是くの如し。善人は仁を欲して未だ其學を致さざる者なり。仁を欲す。故に成法を踐まずと雖も亦惡に陥らず、之を己に有すればなり。室に入らざるは學ばざるに由る、自つて聖人の室に入るとなし。不仁を惡む(聖人は)故に不善未だ嘗て知らざるに非ず。徒に仁を好みて不仁を惡まざれば、習ふて察ならず、行ふて着ならず。是の故に徒善は未だ必ずしも義を盡くさず、徒是は未だ必ずしも仁を盡くさず。仁を好み不仁を惡み、然る後仁義の道を盡くす」(中正)と。善を好み、不善を惡む、此に善惡を知るを要す。たゞ意志のみ善にして、善なる事物は如何なるものなるやを知らざるが如きは之れ「徒善」「徒是」なり、此の善此の是は名稱のみ存して内容

空虚にして善の實質の知れざるものなり、之れ眞に徒善徒是のみ。意志のみ善良ならば可なりとせる論者の如きは、眞に之れ徒善徒是家たるのみ。張子此徒善徒是家を小となし、學を好み、知識を有し、以つて道德を大成せざる可からずとして曰く「信を篤うし、學を好む。信を篤うし、學を好まざれば善人信士たるに越えざるのみ。徳を好むこと色を好む如くするは仁を好むこと甚し。過を見て内に自ら認め、不仁を惡みて其身に加へしめざるは不仁を惡むこと甚しとなす。學者是の如くならざれば以つて身を爲すに足らず」(中正)と。此くて善惡の性質を明かにし、如何なる之れ善たり、如何なる之れ惡たるやを知り、或は比較し、或は計量し、或は將來を考へ、或は少數多數を考へ、廣大なる眼界より、思慮の材料を蒐集し、以つて中庸を擇び、以つて大中至正を得ることを力むべしとなす。而して之れを得るには、此くの如く學問知識を要するなり。孔子が格物致知を尊びたる、又た西洋の功利主義の倫理説が知識を貴ぶ、實に此くの如き意味に外ならざるなるなり。知識なき善意は徒善なり。道德の大成には善意と共に大知識を要す。然り其知識や惡魔的知識「不善未だ嘗て知らざるに非ず」の點にまで道

せるものならざる可からざるなり。

九 氣質の變化——徳性涵養

無形の性形體を取りてより、人には氣質の性「氣質の性は君子之れを性とせざるあり」となすなるもの生じ、純然たる善を失ふに至れりとなす。之れ宛もゾラトーンの「觀念」なるものが人體に入つて其自由と完全とを失へりとなすに比すべし。此くて氣質なるものに由つて天地本然の性を妨げ、之れを亂る所ありと雖も、其天地の性なるもの、存在を失へるに非ざるを以つて、其方法を以つて氣質を矯正し、變化し、以つて本然の天地の性に復歸せば、依然として善たるなり。故に張子の道德の實踐を重んずる所は、氣質の變化にあり。之れ張子の主要なる主義となす。而して若し「其氣を養ひ之れが本に反へつて偏ならざれば性を盡くして天なり」(誠明)となす。

張子の氣質の變化、徳性涵養説は二箇の着眼點よりするものにして、(一)は知識を性化すると、(二)は氣質其物を變化して善たらしむるものにして、何れも氣質の

訓練と云ふべきなり。

一、知識の性化——張子の知識を貴びたるは前に云へる所なり。然りと雖も知識は知性的のものにして、必ずしも情を有して人をして行爲せしむるを爲さざるなり。知は道徳の善なるを知ると雖も、道徳善には不快の分子あり、又は苦痛の分子あるものなるを以つて、氣質は時々之れに叛謀し、好みて之れに歸向せざることあるを免れず。故に知は單に知に止まりては其効甚だ少く、知の善とする所は、情亦之れを快と感じ、自然に之れに傾向自進するやう馴致して始めて其知は「我れ」と同一となると云ふべきなり。故に張子は知を性化し、我化せざる可からざるを謂ふて曰く「知之れに及べども禮を以つて之れを性にせざれば己が有に非ざるなり。故に知と禮と、性を成して道義出づ〔至當〕と。禮を以つて知を我性となすなり。

二、氣質の變化——次に又た氣質の變化法を云ふて曰く「孟子曰く、居は氣を移し、養は體を移すと。況や天下の大居に居る者をや。仁に居り義に居れば自然に心和して體正し〔禮樂〕と。之れ人は其の居る所の四周の事物及び飲食物等

の氣及び體を變化せしむることを云へるものなり。又た曰く「時舊日の爲す所を拂ひ去り、動作をして皆な禮に中らしむる時は、氣質自然に全く好し。禮に曰く「心大に體胖かなり」と。心既に弘大なる時は自然に舒大にして樂しむなり。君子心和すれば氣和す。心正しければ氣正し。其始めや固より矜持すべし。古の冠を爲くるは以つて其首を重んじ、履を爲るものは以つて其足を重んじ、盤盂几杖に至るまで銘となる。皆な以つてこれを慎戒する所以なり。人の氣質の美惡、貴賤、天壽の如き、皆な是れ受くる所の定分なり。氣質惡なるもの、如き、學べば即ち能く移る。今ま人多く氣の使ふ所と爲つて賢たるを得ざる所以のものは、蓋し學を知らざるが爲めなり。古の人郷間の中に在つて其の師長朋友日に相教訓すれば、自然に賢者多し。たゞ學は性を成すに至れば氣勝つに由なし〔禮樂〕と。此くて氣を變じ、體を移し、心を留めて内部より身體の習慣を作り、禮に由つて外部より内部に作用し、或は學を性にし、習修反復、肉體の有する傾向を制御し、其習慣を作り、氣質を變化し訓練し、以つて天地本然の性に反へるべしとなす。

此くて氣質の惡を矯めて善たらしむるを得たらんには、其人の功や非常なりと云ふべきなり。張子此くの如き人を謂ふて曰く「天資美なる者功となすに足らず、惡を矯め、情を矯めて勤となす、方には是れ功となす」(氣質)と。獨逸のカント亦た之れと同様の説を爲して、眞の道德的價值は、其人の性質或は嗜好等より行ひたるものに非ずして、如何に自性は之れを行ふことを厭ふとも、ただ義務なり、故に已むを得ずして之れを行はざるを得ずとの感をも以つて爲したる行爲なりとなし、天資美なるより自然に善を行ふとも之れ道德的價值に非ず、親が子を愛し、子が親を愛するは天性のみ、肉體自然のことのみ、道德的價值あるに非ずとなす。此點老子が「道德は消極的價值なり」と謂へるに同じ。天資美なもの素より功なし。カントに云はしむれば素より道德的の價值はあらざるべし。然りと雖も、吾人は、功なくとも可なり天資美にして人々相和睦し、整和の社會を形成するを得ば、何物の善か之れに如かん。吾人必ず、道德的の名稱を求めざるなり。徳を忘れ義を忘れ、自然に大道に合し、知らず識らず帝の則に従ふと云ふが如きを得ば、實に之れ願はしきことたるなり。何ぞ、功を貴ばん、又た何ぞ、徳義なりとの

名を求めん。

十 張子の善意志説とカントの善意志説

張子意志の善を謂ひ、善意なき時は如何なる智識才能も敢て害物なりとせり。曰く「士必ず慾にして彼に智能著はる。不慾にして多能なるは之れを豺狼に比す。近づく可からず」(有徳)と。此言に由つて見る時は、智識才能の如きものは、決して獨立して價值あるものに非ずして、其之れを善と稱し惡と云ふは、實は意志の善惡より云ふて定めたる價值なりと云ふものゝ如し。智識才能其物善に非ず、善意を以て使用して始めて善となり、惡意を以て使用する時は、豺狼の用となりて却つて害となるべしとなす。之れ張子の意志を貴ぶの言なり。カント亦同様の説を爲せりと雖も、張子は未だカントの如く明瞭に精密に論ずる所あらざるなり。カントの説に由る時は、意志の善の外、他に條件なき善なるものあらざるなり。節制も勇氣も、幸運も、富有も、權勢も、たゞ之れ善意に屬して善たるに過ぎず。たゞ善のみ絶對的善なり。善意なきの智力才能等はサタンにして是

等のものを有せるが如しとなす。張子とカントに大要相似たるの説なりと雖も、カントが善意の外眞の善なしとせしは未だ之れ思はざるの言となす。何となれば意志の善とは如何なる事なるや、又た意志の善悪は何を標準として之れを定むべきやと云ふに於ては、意志以外に、意志の善以外に、他の善なかるべからざるに於ては、意志の善の説明は到底不可能の事に屬す。然りと雖もカントは、義務或は法則に従ふと善意なりとなし、尙ほ他の善を否定すべしと雖も、義務或は法則は如何にして其權威あり、又た其の目的は何處にありや、何故に義務を義務とし法を法とすべきやと問ふに至つては、尙ほ進みて、法を法とし、義務を義務とする所の理由に溯らざる可からざるなり。此に於てカントは法は法なり、義務は義務なり、たゞ法として、たゞ義務として之れを行へ、其理由を問ふの要なしとなさん。此に於てカントの所謂「法」なるものは標準なく無法と云ふべきなり。而して其行動や妄行盲動の外なく、たゞ自己我儘の獨斷にして社會の善、自他の善などは毫も其思考中に置くべからざるなり。之れ無法、我儘、簡人、妄行、盲動の主義にして、一見高尚の如しと雖も、十分に論じ詰むる時は此くの如きのみ、何ぞ

貴ぶに足らん。

此くの如きは之れ自然の善と道德の善とを區別せざりしより生ずる所の困難にして、又た意志の善或は善意とは如何なるものなるやを分析して考へざりしに由るなり。今ま意志の善を分析して考ふるに、意は漠然として善たるを能はず必ずや或る目的物或は觀念を有せざる能はず、故に意志をして善たらしめんには、吾人は先づ意志の外に善きものを前定せざる可からざるなり。其の善きものは之れ自然の善にして、道德善或は善意をして善たらしむるは、此の自然の善を前定することなくしては能はざるなり。故にカントの如く、たゞ意志のみの善を云ふて其内容或は自然の善を云はざるものは之れ中空の善なり、何ぞ貴ぶに足らん。然りと雖も張子カントの如く詳細に論せざりしを以つて、吾人はこゝに十分に論評すること能はざるなり。張子はカントの如く深き哲學上の意味を以つて之れを云ひしには非ずして、たゞ一言人間の精神意志の善を貴ぶ趣を云ひしものに過ぎざりしなり。